
時の旅人

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の旅人

【Nコード】

N5932N

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

もし、力を持っていたら——そうなったら、どんなに良いことだろう？ そう願ったポケモンがいた。そのポケモンは、強さに執着し、その為なら、何をするにも躊躇いを見せなかった。そして、彼は自分という一個を引き換えに、限り無い力を手に入れた。だが、その時から始まっていた。崩壊は。

プロローグ

人間とポケモンの共存の世界、また人間のみがこの世で猛威を振るう世界、そのような世界があるならポケモンのみが独自の文明を持つている世界も存在するのが世の理である。

そのポケモンだけの世界に住む者が、また今日も一日を迎えた。

地方区分はホウエン、街区分はキンセツシティの東区に建てられたポケモン屋敷。

ここはキンセツシティの自治組織の拠点であるとともにその領主、アーサー卿の自宅でもある。

この広大な土地の中で、また物語が生まれる――

「ふわぁ……………」

ポツポのさえずりが聞こえる朝。イーブイのゼウスは目を覚ました。13歳とは思えないほど幼げな仕草と顔立ち。勿論ゼウス本人は自覚していない。

「ゼウス、起きたのか？」

横から幼馴染のピカチュウ、ジャードが話しかけてきた。こちらは仕草が少し老成している（顔立ちは13歳のもの）。

「うん、久しぶりによく寝たなあ」

彼は鏡の前に立つと、尻尾についた寝ぐせを取り始めた。

「ふつ、最近は忙しかったからな」

ジャードは頬の電気袋を軽くパチパチさせる。

「もう朝ご飯の時間じゃない？」

ゼウスはまだ眠い目を擦りながら部屋を出た。

「さて、飯を食いにいくか」

「今日のメニューって何だっけ？」

「確かカレーライスかオムレツかうどんだったぞ」

廊下を歩きながら悪友と他愛もない会話を続ける。

ガチャリ――

「ゼウス、ジャード、お早う」

食堂に入るとエルレイドである屋敷の主、アーサー卿が挨拶してきた。

「「お早う御座います」「」

二人揃って頭を下げる。

プロローグ（後書き）

ゼウス…Zeus

ジャード…Jadu

アーサー…Arthur

L e g e n d : 1 まさか誘拐？（前書き）

ゼウス

「なんか作者さんらしくないタイトルですね」

まあね、

ゼウス

「まあねの一言で済ますって……」

Legend : 1 まさか誘拐？

「ゼウス〜早く遊びに行こうよ〜」

まだ朝食を食べ終わらない僕を、ラルトスが促した。アーサー卿の愛娘、ルウムだ。僕達は“姫君”って呼んでいるけど。

「ズズズズ……………ちょっと待って下さい〜」

「ゼウス……………今更だが御前本当に食うのおせえな。うどん一杯に30分かけてる奴俺始めて見たよ……………」

幼馴染のジャードも呆れて頭に手を当てている。これも日常茶飯事なのだが。

「（ゴクゴクゴク）……………ぷはあっ！！ 御馳走様！」

うどんのつゆを飲み干した僕は勢いよく言った。

「やっと食い終わったよ……………」

「じゃ、行きましようか姫君」

僕はジャードの言葉など気に掛けずに歩き出した。

「ゼウスホントに味わって食べるんだね〜そんなんじゃ、恋人とが出来たとき困っちゃうよ〜？」

「ほ、ほっというて下さい！」

「こんな阿呆なイーブイに恋人なんて出来るわけないだろ」

「ジャードだって、そんなに性格が悪いんだから女の子からもてないんだよ？」

「五月蠅い！」

互いに罵倒しながら屋敷の廊下を外へと歩いていく。

この屋敷での僕等の仕事は主に姫君の遊び相手。まあほっぽりすぎていることが多いけど。

そしてその結果がこれだ。

「ほれ見ろ！ 御前がグーたらやってるから、姫君を見逃しちまうたろうが！」

「そつちこそ、姫君から目を離して買い物に行くなんて最悪だよ！」

街の広場で僕とジャードは言いあいをしているが、誰も気には留めない。イーブイとピカチュウの口論を見かけるのは珍しいことではないからだ。

「って、こんなことしてる場合じゃ無いね。早く屋敷に戻ろうよ」

これ以上言い争っても不毛だし、早く屋敷に帰ろうとした。姫君もいるだろうし。

だがジャードは……

「俺は姫君を探す」

「え？」

「今まで無かったんだ、こんなことは。姫君がどこか行っちゃっても、その辺を捜せば普通に見つかっていたんだ」

「そ、それはもうお昼ご飯の時間だから帰ったとか、ちょっと好奇心を起こして遠くまで探検に行ったとかさ。ほら、いつもそうじゃない？」

「姫君はああ見えて気が弱い。好奇心如きで遠くに行く人じゃねえ

ポケモン

よ。それに遊びに行ってる時に飯を理由に帰ったりしねえ。そんならい分かるだろ？」

そう言っただけだ。考えすぎだと思っただけだ……

「ルウム様なら帰ってきてないけど」

門の見張りをしていた、フライゴンのカインが言った。

「ええっ!？」

「朝君達と一緒に出たのを見たのが最後だね」

有り得ない! そう思った僕は街に向かって走り出した。

「あの、すいません。さっきここで僕と口論してたピカチュウを見ませんでしたか？」

「え? 見てないわ————ってゼウス!？」

僕が話しかけたのは同じく幼馴染のミミロル、パフィーだった。

「な、なんだ、パフィーだったのか……」

「フフッ、おかしかったわ、やたらかしこまって、私に尋ねてきちゃってさあ」

「き、気づかなかったんだよ!」

いつものことなんだけど、パフィーと話しているとよく分からない感情が生まれてくる。ってどうでもいいか。

「それより、ホントにジャード見てない？ 困ってんだよ」

「何かあったのね？ 話して」

「うん、えっと――」

僕はルウム嬢疾走事件を簡単に説明した。

「分かったわ。じゃあデインとアステルも呼んで来るわ」

「た、助かるよ――！」

「私にここまでさせといて、ただ迷子になっただけってなら容赦しないからね！」

「そこは普通、迷子で済んで良かったって思っべきだよね！？」

Legend:2 一大事

「あーもう最悪だよ！　なんでこんなことになっちゃったんだ？」

ゼウスは走りながらブツブツ呟いた。アーサー卿の娘が拉致されたとなれば彼はその拉致した者を徹底的に攻め滅ぼすだろう、いや、自分は娘の守役なのだ。姫君を守れなかったともなれば卿から仕置きを受ける可能性も十分にある。殴られる、蹴られる。最悪なのは解雇され、屋敷から追い出されること。それは避けなければならぬ。孤児のゼウスにとって世間は冷たいもの。幼くないとはいえ、まだ成熟していない彼が生きていることは困難だろう。（実際はアーサー卿はそんな冷たいことはしない）

「「うわあっ！」」

曲がり角でゼウスとジャードはぶつかりそうになった。

「ジャード！　姫君は見つかった？」

「御前がそう言うことは見つからないんだな！？　ちきしょう……やはり誘拐されたか……」

ジャードが頭を抱えて唸る。その時

『おい、ゼウスー！！　ジャードー！！』

彼等と呼ぶ声が聞こえた。振り向いてみると、パフィーがブイゼルとスポミーを従えて走って来ていた。

「三人共……」

「ルウムさんが連れ去られたんだな？」

ブイゼル……デインが唐突に聞いた。

「うん、今搜してるんだよ」

「私、怪しい人見たです」
ポケモン

その横からスポミー……アステルことアステリアーゼが有難い情報をくれた。

「どんな奴だった？」

「4匹のごつい人達で、もごも動く袋を抱えてたです。近くの喫茶店に入ってたです」

このスポミーは警察に通報したのだろうか。

「その喫茶店は何処？」

「この通りの一番向こうの『アーマルド』ってお店です」

「よし！そこに行くぞ！」

ゼウス達は『アーマルド』と呼ばれた喫茶店へと走っていった。

Legend:2 一大事(後書き)

パフィー:Puffy

アステリアゼ:Asteralase

デイン:Dane

Legend:3 頭破

—— カランコロン

「いらつしゃい」

ゼウス達が窓を開けると人の良さそうなアーマルドがいた。

（ホントにここなの？ その怪しい人達^{ポケモン}がいた場所って）

（間違いないです。ゴリキーがモゴモゴ動く袋を抱えて入っていったです）

（ならこの何処かに奴らの隠れ家があるってことだ）

ゼウス達がヒソヒソ話しあっているのを見かねたのか、アーマルドがイライラしながら注意した。

「坊主共、入るなら入る、出るなら出るでハッキリしてくれんかね。客の迷惑になるよ」

「フン、客がいねえのに迷惑なんてこと——」

「あ、はい。上がらせて頂きます」

ジャードが余計なことを言い出さないうちにゼウスが店の中のテーブルの椅子に座った。

暫くして、メモを持ったアーマルドが来た。

「注文は決まったかい？」

「はい。僕はエクレアで」

「俺はレモンティーだ」

「アタシはマドレーヌ」

「……オレンジジュース」
「私はチーズケーキです」

それぞれオーダーを言うと、アーマルドは奥に戻って行った。

「……さて、搜索の時間だな」

ジャードが唇の端を軽く持ち上げて言う。

「ジャード、まさか……」

「ふっ、そのまさかだ。あのマスターがいない間にこの辺をあさくりまくる。幸いなことに閑古鳥だしな。デイン、あのアーマルドが戻ってきたら伝えてくれ」

「……ああ」

彼等はテーブルを離れると、怪しい場所を探り始めた。

「うーん……扉は……床には無いのかなあ……」

「あら♪ 可愛いお花♪ 家に持って帰りたいわあ♪ ……あら？」

「おいパフィー、何処搜してんだ」

「ねえ、これ鍵じゃないかしら？」

「何い！？——モゴモゴ」

思わず叫びそうになった——というより叫んでしまったジャードの口をゼウスが押さえる。彼の声は透き通っているため、普通に話していても聞かれているかもしれないのだ。

「もう、あの人にばれちゃったらお終いなんだからね！」

「あ、ああすまん……それよりその鍵を見せてくれ」

「はい？」

パフィーがジャードに銀色の鋭利物を差しだした。

「隠されていたところが怪しいな……………なんか鍵穴のような――

――」
「待たせたな」

そこでアーマルドがおぼんを持って登場したので搜索は断念――

「おつと足が滑った」

「うわおう！？」

されなかった。アーマルドの方は後頭部を強打して気絶したが、注文の品が乗ったおぼんはパフィーがキャッチしたため無事だった。

「ジャード姑息すぎだよ……………」

「そう言うゼウスもエクレア食ってんじゃねえか」

そして搜索を続けること10分

「う……………」

「……………まずい、マスターが起きる」

それまで黙ってアーマルドを見張っていたデインが口を開いた

「お、俺はいったブギヤツ！？」

今度はゼウスがアイアンテールを浴びせ、また眠りに落とした。

「あ？ これ鍵穴ではないですか？」

その時、アステリアーゼ、通称アステルが、スポミー特異の頭の蕾をパタパタさせながら声をあげた。

全員（デインはアーマルドに注意を向けながら）アステルがさした場所を見る。確かに、床の色と一致していて分かりにくいが、鍵穴らしきものがあつた。

「ああ、面白いほど嚴重にカモフラージュしてあるしな、間違いない。んじゃここにこの鍵を——」

ガチャ

無機質な金属音が響き、今まで何もないと思つていたところに地下へと続く階段が現れた。

五人とも音を立てずに入つていった。だがしんがりのデインが扉を閉めているとき——

「お、御前ら、何やってんだ！」

上ずつた声と共にデインの体が上の方に引き上げられた。

「あ、あぶねえ！」

「頑張つて！」

ゼウスとジャードが同時にデインに捕まる。

「私達も手伝つです」

「もつつ！！ 仕方ないわね！」

アステルとパフィーもしがみついた。

いまや彼等は暗い縦穴の中で宙吊り状態だ。デインが掴んでいる扉は、向かいでアーマルドが、五人の体重に抵抗しながら必至に開けようとしているのが分かる。

「……………！」

ジャードはその力で不規則に上下に動く扉を見て何かを思いついたようだ。

「デイン、もう良いぞ。手を離せ」

「……………」

彼が言い終わるか言い終わらないうちにゼウス達の体は縦穴の中をまっさかさまに落ちていった。

「ふう、全員無事で何よりだ」

ジャードが黄色い尻尾をさすりながら言った。

「だからって落とすことはないよ」

「……………俺の手のことも考えろ」

ゼウスとデインが反論した。因みにアーマルドは……………

「……………」

頭部に巨大な瘤を作り悶絶していた。どうやら彼等の抵抗が無くなった故に、反動で勢いよく扉を開けてしまい、一緒に体ものけ反って…… 本日3度目の頭部強打となったのだ。

「でも地下に基地を作るなんて……ただ事じゃないよね」

ゼウスが辺りを見渡す。無機質な通路が続いていた。

Legend:3 頭碎(後書き)

ゼウス

「タイトルあのマスターにしか関係ないじゃないですか」

まあ面白いからね

ゼウス

「いや面白くもなんともないし」

Legend：4 ワープ

「うげっ！？　ししし侵入者だぁっ！」

正面から歩いてきた一匹のスリープがすつとんきような声をあげた。

「ちっ、気づかれた」

「問題ないよ、シャドーボール！！」

ゼウスはスリープに向かって邪悪な魂を放った。突然の不意打ちに、避けられなかった彼は、もろにシャドーボールを喰らうと、逃げて行った。

「逃がさねえ。電撃波！」

そのスリープに、俺が必中の電気を放ち、スリープは倒れた。

「……俺達が侵入していることを知られたら困るからな。御前に恨みはないんだが」

俺はスリープに吐き捨てると、進んでいった。俺達の存在が気づかれてなければ良いが……

彼等がいる部屋とは別の部屋で、図体の大きい何かが、映像に映されたゼウス達を見ていた

「侵入者が……厄介だな。……ネイビス、奴らを始末してこい」
「はっ」

暗い声の命令に、トーンの高い声が勇ましく返答した。そのままネイビスと呼ばれた影は部屋の片隅に歩いていくと、突然姿を消した。

「あれ？ ジャード、これワープパネルじゃない？」
「何？」

俺はゼウスが差したオレンジ色の床を見つめた。そうしていると……

——ギューイイイイイイイイ

「え？」

俺は、不意に変な感覚に襲われた。いや、俺だけでは無いようだ。ゼウスやアステルも分からない顔をしている。後で「サイコキネシス」と呟く声がないような気がしなくもない。

そのまま、全員ワープパネルに乗せられ。4次元の中を移動していた

「うわあっ！……！」

——ヴウン

気がつくと、闘技場のような部屋にいた。

Legend:4 ワープ(後書き)

ゼウス

「あの、ワープパネルって何? 的な人もいるんじゃないでしょうか
……」

それについては次話で説明します

L e g e n d : 5 ゼウスの実力（前書き）

ゼウス

「分かり安過ぎるタイトルですね」

まあ良いじゃん良いじゃん。

Legend:5 ゼウスの実力

「ちきしょう……サイコキネシスでワープパネルまで持っていて俺達を強制移動させるとはな……」

横からジャードが呟いた。

それより、ここはどこ？ って言いたいんだけど。あ、ワープパネルって何？ 的な人の為に言っておきますね。踏んだら一定の場所に名前通りワープさせられる床です。まあ、……。団のアジトにあるあのオレンジ色の床、あれと同じだと思って下さい。

「…………ゼウス」

突然よこからデインが呼んできた。

「…………敵の気配がする」

「え！？」

まさか…………そう思っただけを見渡すと、何もない空間に敵が落ちてきた。

コラッタ、イトマル、ビツパ————雑魚ばかりじゃないか

「敵か……厄介だな」

「でも、そんなこと言ってる場合じゃないんだよね———つと———」

前方からパラスがひつ掻くを仕掛けてきた。

僕は、ジャンプしてかわす。このままだと後にいるデインに当たっ

ちゃうけど……

「グエ!？」

その前にパラスを踏みつけた。

次は横から襲ってくるコラッタかな………それじゃこのままジャンプして………

「アイアンテール！」

コラッタを吹っ飛ばした。そのまま彼は地面に――――ではなく地面にいたパラスにぶつかった。
これで二匹片付いたね。

「空手チョップ！」

「切り裂く！」

次はジャードが処理中のワンリキーとコロトックかな。電光石火一撃で倒れそうだ。

「ちっ………厄介な奴らだ………」

「ジャード、今行くよ！」

僕は親友に叫ぶと体の力を抜いた。

「電光石火！」

刹那、コロトックとワンリキーが倒れ伏す。次は………

「ちょっと、アンタ達寄らないでよ!」

パフィー達を襲っているイトマル軍団だ。
僕は茶色い掌を向かい合わせた。

ゴオオオオオ

掌と掌が向かい合う中に顕れた紫色の球体——シャドーボールを放つ。殆ど吹き飛ばせたけど、まだ残っていたようだ。

「ぐ……このイーブイ、なかなかやるな………」
「作戦変更だ。コイツからやる」

イトマル軍の残党3匹が僕を取り囲んだ。馬鹿だなあこのポケモン達——

「え、えつと……痺れ粉！」
「いいっ!？」

アステルの黄色の粉が一匹を痺れさせた。

「飛び蹴りいっ!」

そのままパフィーの技でノックダウンする。

「お……おい、やばくねえか？」
「仕方ねえ! こうなったら玉砕だ!」
「りょうか——」
「電光石火」

イトマル二匹が僕に飛びかかってきたけど、その瞬間僕は彼等の後

にいた。イトマル達が地面に倒れ悶絶する。

「……………水鉄砲」

デインの技がオタチをK・O・する。これで終わりだ。

『君達、なかなかやるな』

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

いきなり聞こえてきた高い声に体を硬くする。

「だ、誰だ！ 隠れてねえで出て来い！」

「はっはっは。威勢が良いな。もっとも僕は君らの後にいるんだけど」

「!?!?!」

僕等が後を向くと、フリーデインがいた。

「フリーデイン……エスパークタイプ……まさかサイコキネシスで俺達をここに移動させたのも御前か？」

「御名答♪ 察しが良いねえ君。そんなに頭がいいならここに来るなんて愚かなことは止した方が良くないかい？」

「ほざくな。俺達はこのままでは帰れねえんだ」

ジャードとフリーデインの会話が続く。その交渉も佳境に達した

「この部屋のワープパネルは電源を切つてある。この鍵がないと開けられないよ。まあ、このネイビスに勝てばあげるけど」

と、銀色の鍵をちらつかせた。このまま先に進むにはこのネイビス

ってポケモンを倒さないといけないみたいだね……

「ジャード、ここからの交渉は任せて」

「ああ、負けたりなんかすんなよ」

ジャードの言葉に軽く頷くと、体に力を溜めた。体の中から光が発せられるのが分かる。

「？ 君が僕の相手——」
「切り札」

僕を包んだ光はネイビスを吹っ飛ばした。地面に倒れた彼は動けなくなる。

「よし、鍵はちゃんと取ったぜ」

ジャードが鍵をクルクル回しながら部屋の機能制御装置に差し込む。数秒後、ピーという電子音が鳴り、

『IDを読み取りました。ワープパネルを開放します』

という無機質な声が響いた。

「よし、じゃあ行くか」

「ちよっと待って」

僕はワープパネルを踏もうとしたジャードを呼び止めた。

「？ どうしたんだゼウス？」

「行く必要は無いよ」

そして落ち着きはらったように言った。多分あの人も仕事は終わってんじゃないかな。

「え？　なんでだよ？」

「もうすぐ来る筈だよ。僕達は囧だったんだから――」

「！？」

待つのは永くなかった。数分後にワイプパネルが反応し、リオルトスのペアが現れた。リオルは僕を見て言った。

「^{ミッションクリア}任務完了だ」

Legend:6 フォース・チェンジ(前書き)

さて、今回新キャラが出ます。

ゼウス

「前回出てきたあのリオルですね？」

うみゆ。彼はポケモン屋敷に召し抱えられている忍者なんだよ

ゼウス

「ふーん」

あと、有り得ない技を使ったり。まあ本編で色々設定を書いているけど。

Legend : 6 フォース・チェンジ

「レンさん？ どうしているんだよ？」

ジャードが疑問顔で尋ねた。レンと呼ばれたりオルは真顔で答える。

「ゼウスが来て欲しいって言ってたんだよ」

「ゼウス？ いつの間に……」

「あの時、屋敷に帰っていた時だよ」

ジャードが驚いたような顔をした。

そのまま沈黙が流れたが、パフィーがそれを破った。

「ルウムちゃんも助かったし、いいんじゃない？ さっさと帰りましょう」

彼女はそう言うと、ゼウスの背中を押していった。

「ははっ、元気な嬢ちゃん達だな」

レンが微笑して呟く。

「あ、テメエら！」

帰り道、彼等は喫茶店主、アーマルドと鉢合わせしてしまったようだ。

「厄介な奴だな……俺が倒そうか」

レンはそう言っただけを退かせると、アーマルドの方へと歩み寄っていった。

「あ！？ テメエが俺の敵か――」

「テレポート」

その瞬間、レンの姿が掻き消えた。レンがテレポートを使った。そこまでは良いのだが、一ツ気にかかることがある。リオルはテレポートを覚えないのだ。

「瓦割り」

ドゴオッ！！

突如、轟音と共にアーマルドが痙攣した。そのまま倒れていく。

「ちょ、ちょっとお！？　なんでただのリオルがテレポートなんか使えんのよ！？」

「た、ただのリオルじゃないってことですか」

あまりの展開の速さについていけないパフィーとアステルが慌てふためく。

「そうだ、俺はただのリオルじゃないってことだ」

倒れたアーマルドの後でレンが爽やかに笑って言う。

「……………説明は後、とりあえず脱出」

その時今まで黙っていたデインが口を挟んだ。

「うん。早く行こう」

ゼウス達は歩き出した。

「で、レンさん？ さっきのテレポートのこと、教えてくれない？」

『アーマルド』とは別の喫茶店で紅茶をすすりながらパフィーが言った。

「ああ、あれは術式変換技フォース・チェンジというものだ」
「「「術式変換技？」」」」

レン、ゼウス以外の者が声を揃える。

「技の能力、威力を科学技術で組み替えるんだ」

ゼウスがレンに代わって説明を始めた。

「例えばレンさんのテレポート。本来リオルはそんな技覚えないけど、レンさんのテレポートは技の性質を変換しているからリオルでも使えるんだよ」

全員が頷いた。パフィーはゼウスの示唆することが理解できず、首をかしげている。

「じゃあゼウスの切り札も術式変換技ですか？」
フォース・チェンジ

その時、アステルが口を挟んだ。

「え？」

「私みてて思ったんです。切り札って、技を出す前に他の技を何回も出していないとそこまで強くならないじゃないですか。でも、あの時ゼウスが出した切り札はあまり技を出したわけじゃないのになり威力が高かったです」

「そう言えば……………」

「わ、私もおかしいって思ったのよ」

「絶対嘘だよな。君切り札って技自体知らなかったんじゃない？」

ゼウスの一言にパフィーの顔がひきつる。

たしかにパフィーは知らなかったとおかしくないだろう。

彼はパフィーの表情など気にせずにアステルの質問に答えた。

「当たり前。僕の切り札も術式変換技だよ」
フォース・チェンジ

彼女の疑問は見事に当たっていた。

「だが、術式変換技には欠点があるんだ」
フォース・チェンジ

馬鹿にされ無視されて怒心頭のパフィーがゼウスに殴りかかろうとするのをレンが止め、言った。

「例えば俺のテレポートはスタミナを大きく消費するとか、ゼウスの切り札は相手に与えたダメージの反動がくるとか。使い方を間違えると、死に至ることもあるんだ」

「じゃあ、ゼウスはなんでそんな危ない技を覚えたの？」

ルウムの言葉に全員が疑問を抱く。ゼウスはなんとか誤魔化そうとしたが……

「ああ、いや生まれつきの――」

「嘘だな。例えば親が術式変換技を持っていたとしてもそれが遺伝で子に映ることはないんだ」

出来なかった。

「術式変換技を習得するには専用の技マシンがないとできないんだ。研究所が技の情報を書き換えて、それを技マシンに挿入するんだ」

ゼウスの顔に『余計なことを……』を書いてあるのが分かる。

「へえ……ゼウスがわざわざそんなものを覚えるなんておかしいな……」
「コイツの実力だとわざわざ覚えなくても大抵の相手に勝てるんだからな」

ゼウスは今更ながらに自分の実力を呪った。秘密を言うなら自分の過去も明かさなければならぬ。

別に隠すことではない。ただ同情されたくないだけなのだ。

「……べ、別に、ただもっと強くなりたいってだけで……」

彼は答えた。だが、どう見ても拳動不審だ。怪しい。

「ゼウス、辛そうな顔してるです。言ったほうが気分が楽になるかもしれないです」

アステルが優しく言いかけた。だが……

「ほ、本当に何もないんだって!」

彼は声を荒げて黙ってしまった。

「えーと……だから、そうするにはポケモンの性質を変えればいいのかね?」

「……………何故か、俺の言ったことが全く別のことに受け取られてる……………」

因みにデインは話の内容が全く理解できないパフィーと頭腦的な格闘を強いられていた。

Legend:6 フォース・チェンジ(後書き)

新キャラ登場でっす♪

レン

「よろしく願い申し上げます」

まあ余談なんですが、彼がテレポートを使える理由としては、忍者の仕事でテレポートとかできたら便利だよなあ……とか

レン

「それが由来なのか？　ならもうちょっと強い技にして欲しかったな」

まあ他の技が電光石火、はっけい、影分身でさあ、本当に忍者みただいだよ。

Legend:7 悲しい記憶(前書き)

ゼウス

「前話も含めて何があるか容易に予想できるタイトルですね」

うん。その通り。ゼウスの過去だけど、かなり悲惨なことになっているよ。

ゼウス

「そうじゃないと僕が拒む理由がないんじゃない………」

確かにね

Legend:7 悲しい記憶

「なあ、ゼウス。何故御前は術式変換技を――」
「それ以上言ったら切り札を放つけど」

ゼウスの鋭い視線に刺されて俺は口をつぐんだ。

「聞かない方が良いかな？」

ポケモン屋敷の忍び、レンさんが優しく言った。
今日俺達を助けてくれたが、その代償に仕事をほっぽり出してきたらしい。
流石に酷過ぎんだろ。

「もう就寝の時間だな。それじゃお休み」

「ああ」

「お休みなさい」

俺達は口を揃えて挨拶をした。

「済まねえなゼウス。俺はただの好奇心で御前のことを知りたい訳じゃねえ。ただ、親友として御前の悲しみを和らげてやりたいんだ」

真夜中。

ゼウスが寝たのを確認すると俺は彼に向かって柔らかな光を放った。

それは寢息で規則正しく動くゼウスを包み込んだ。
俺の特殊な力“タイム・リワインド時空超越”の一つ“タイム・リブダクト別時元再生”だ。

「……………！！」

光は一つの光景を展開した。

見知らぬ街道、

そこを大勢のポケモンの集団が隊列を組んで行進している。
隊列の先頭には一匹のブースターがいる。

「デービス様、我々は諦めません」

ブースターは大きな館の前まで来た。

アーサー卿のポケモン屋敷の10倍はあるだろう。

そこでブースターは叫んだ。

館からデービスと呼ばれたドサイドンが現れる。

「なんだフレア。休日の日に来て減税を訴えるつもりか？」

「消費税65%は多すぎです。我らとて感情があります。悲しみも感じるし、痛みも覚えます」

「ダメだダメだ！ 我が領は領主の命は絶対なのだ！」

デービスが声を張り上げる。

すると、フレアについてきていたポケモン達は耐えきれなくなった

のか、叫び出した。

「ふざけんじゃねえーーーーー！　こんなに税金絞りあげられて生きていけるかーーーーー！！」

「私達にも生きていく権利はあるのだーーーーー！！」

「税率を下げるーーーーー！！」

「やかましい！！　者共、かかれえーーーーーっ！！」

デービスが叫ぶと、館から護衛のポケモン達が現れ、フレアに従っていたポケモン達を攻撃し始めた。

フレアも攻撃は受けたが、なんとか逃げる事が出来た。

「御帰りなさい父さん、大変だったでしょう？」

「貴方、そんなに気を落としちゃダメよ？」

フレアが家に帰ると彼の娘であろうグレイシア、妻であろうシャワーズが玄関まで迎えに来ていた。

「その声はマキとアクアか。ああ、また1%も下げて貰えなかった」

フレアが娘のグレイシア——マキと、妻のシャワーズ——

——アクアに答えると、シユンとする。

彼が住むミシロタウンはあのデービスというドサイドンが領主（江戸時代の大名とか、そんな感じのです）を務めている。

先の騒動でもあったが税率は65%。高すぎる数字である。

当然町民も黙っていないだろう。彼等は税率を下げるように求め、

フレアを筆頭に、デービスの館まで押し掛けたのだ。

後はさっきの通りである。しかもフレアの言葉から察するにこれが始めてでは無いらしい。

「姉さん、父さん帰ってきたの？」

廊下の影から一匹の幼いイーブイがヒョコ、という効果音が似合いそうな動きで現れた。

マキの弟のようである。

「ゼウスか、只今」

フレアはイーブイの息子——ゼウスに微笑みを返した。
が、すぐにやつれたような表情を浮かべ、自分の部屋に去って行った。

「姉さん、父さんまたダメだったの？」

「そうみたいね。でも明日またチャンスはあるわ」

マキはゼウスに言った。だが、ミシロタウンで起きるデモは今日が最後だったのだ。

「デービス様、控訴に来る奴等………どんどん数を増しておりますが」
館の一室で、ダーテングが報告した。

「更に……数日前、レンが掴んだ情報によればフレアは反乱軍を集めて、革命を目論んでいるとのことですよ」

「もついい。アイツを………サイズを送り込め。これでフレアも終わりだ」

「はっ」

「ムニユ……………」

「！？」

ゼウスが寝がえりを打ち、すぐ側にいたグライオンが息を潜める。

「なんだ、寝返りか。びつくりさせやがる……………コイツもだが、ま
ずはこのクソブースターからだ」

彼は冷や汗をかきながら標的にピントを合わせる。
その時！

「父さん、危ない！」

パチッ！

マキの甲高い声が響き、部屋の明かりがついた。

「！？ マズッ……………」

存在を気づかれ、焦ったグライオンはフレアに当てるつもりの大
地の力を外してしまった。

だが――

ちっ、外した？ いや、外れてない！ 奴の嫁に当たっている！
本当はフレアからやっちゃまいたかったんだが、コイツから殺しても
いいだろう！

「ああっ！ 母さん！」

ゼウスが悲痛な声をあげる。ゼウスの母、アクアは大地の力による根っこで心臓を貫かれ、絶命していた。なんで殺されなきゃいけないの！ 何も……何も悪いことはしていないのに！

彼は目から涙を流した。それがもう一つの致命傷だった。

「危ない！」

父のフレアが叫んだ。

ゼウスが気づいた時には遅かった。根っこは目前まで迫って来ていた。

もう逃げられない！

彼は死を覚悟し、目を瞑った。

だが、いつまでたっても体は無事のままだ。

「?……」

不審に思った彼は目を開けた。するとそこに飛び込んできた光景は

「と、父さん！」

息子を庇い絶命した父、フレアの姿だった。

彼は恐怖に口を開いたまま、動くことが出来なかった。

「ゼウス！ 逃げるわよ！」

マキはそう言っつて弟の前足をとると家から飛び出した。
だが………

「逃がすなあっ！」

『おおーーーーーっ！！！！』

グライオンが手配していたのか、多数のポケモンが迫ってくる。彼等は次々に逃げ道を塞がれ、やがて崖際に追い詰められた。

「はっはっは。後はこいつ等を殺れば終わりだ……………」

グライオンが邪悪な笑みを浮かべて一歩、また一歩と歩み寄ってくる。

目の前には自分達の命を狙う刺客、周りには自分達を逃がすまいと構えているゴツいポケモン達。そして後には急流の川。ゼウスとマキは絶望的な状況に陥った。

後の川に飛び込むという手段もあるが、ゼウスにはそこまでの勇氣はない。

「ゼウス、良い？ セーので飛び込むのよ？」

「や、やだ！ 怖いよ！」

「甘ったれたこと言わないの！ このまま死ぬ方がいいの！？」

「う……………」

「父さんは貴方を庇って死んだのよ！ ならここでゼウスが死んじやったら、父さんはなんのために死んだのよ！？」

ゼウスの顔に曇りが見られた。

「何をごちゃごちゃ言ってるんだ！ 死ねえっ！」

グライオンがシザークロスを放った！

「ぜえのっ！」

ゼウスはマキの掛け声に合わせ、後にジャンプした。
シザークロスは彼の尾を掠めて飛んで行った。

「……………」

ゼウスは目を覚ました。

周りは知らない森、生きていることだけは確認できた。だが……………

「……………」姉……………さん？」

マキの姿が見つからない。

「姉さんっ！　姉さん！　何処……………」

彼はマキの呼称を呼びながら駆け回った。
だがその声は尻すばみになっていった。
暗い森が怖くなったのだ。

「う……………うわあああああっ！」

彼は泣きじゃくりながら闇雲に駆け回った。
運よく、街道に出た。

(……………ここ……………は……………どこ……………だ……………ろっ……………)

ゼウスの意識は途絶えそうになっていた。
永い間歩き続け、耐えられなくなったらしい。
ゼウスはキンセツシティの一步手前で力尽きた。

『何よ、急に呼び出して』

『ああ、悪いが協力して欲しい』

『……………何があった？』

『一大事ですか？』

そして8年経った。幼かったゼウスも、そこで知り合った友人達が幼馴染と言えるほど成長し、今ではキンセツシティのポケモン屋敷で働いている。

そんなとき、ゼウスはある人に出会った。

「ヘーイ！ その兄ちゃん、これ知ってまあいすかあい？」

変な訛りの言葉使いでバシャーモが話しかけてきた。
見ると技マシンを持っている。

「何？」

ゼウスはその技マシンを見つめた。

「これはですねー、フォース・チェンジ術式変換技といってえー。普通の技を強化したものでえー、とっても強くなれえーるものなんでえーすよ」

とても強く、という言葉にゼウスは反応した。

「この中にはあー、切り札って技が入っててえー、普通ならあー技を出さないとおー、しょぼあーい威力なんだけとおー、この中の切り札はあー、しょっぱなから使ってもあー、ベリイベリイグレエイトな威力なんだあーよあー」

「それ下さい」

ゼウスに迷う予知は無かった。

あるとき、僕が強かったら……父さんも母さんも死ぬことはなかったんだ――

強さへの執念が、彼にはあったのだ。

「おおーう、ありがとーうございまあーす！ 5000ポケになりまあーす！ ああーつと、わすれてたあー！ その術式変換技はあー、相手に与えたダメエージのフィードバックがありますのおーで気をつけてくうーださああーい」

彼は技マシンの代金を払うと、早速効果が書き換えられ、強化された切り札を習得した。

「……………成る程な」

俺は術を解くと、ベッドに寝転がった。

憶測だが、アイツは同情されるのが嫌でこんなことを話さないんだろっ

今日見たことは誰にも話さない。

……………これから、アイツに優しくしてやろうかな……………

そう思いながら俺は眠りについた。だが……

「ゼウス！ テメエ俺の肉じゃが食いやがったな！！」

「ジャードこそ僕のシチュー食べちゃったじゃない！！」

朝っぱらから口喧嘩。

俺がアイツに優しくするなんて一生ないだろうな。

Legend:7 悲しい記憶(後書き)

ジャード

「おい、最後のあれなんだよ」

いくらなんでも悲惨すぎるからねえ。やっぱりオチをつけよう、みたいなの？

ジャード

「御前な……親友の概念が崩れてくるだろうが……」

Legend : 8 怪盗 R

「はぁ……よりによってこんな物が来るとはねえ……」

レンが暗い倉庫の中のような部屋の中で溜息を吐いた。
ここはポケモン屋敷の屋根裏であつたりもする。

「とりあえずこれを卿に届けないとな……よいしょと」

彼は独り言を呟くといきなり姿を消した。
色々不審点があるが、忍者なので仕方ない。

「屋敷にこんな物が？」

温厚で人柄の良いエルレイドで、ポケモン屋敷の主人でもあるアーサーが一枚の紙を見て佇んでいた。

「卿、俺が一肌脱ぎましょうか」

「ああ、頼むよ」

それから12時間が経った。

あけもどろと共に始まる日常的な一日が――

「昨日、怪盗から予告状が届いた」

「「「ええっ!?!」」」

アーサー卿の予想外の言葉に崩された。

「ど、どういことですか!？」

屋敷の家臣の一人、ルカリオのハントがすつ頓狂な声をあげた。

「どういことも何も無いさ。この屋敷の宝石“ラピスラズリ”を盗むと怪盗むしゅうが言っているんだ。私達もそれなりの御持て成しをしようではないか」

アーサーはそう言つて爽やかにほほ笑んだ。

「……………怪盗、ですか。そうですね。この予告状の主、怪盗：Rに牢獄への招待券をプレゼントしましょう」

ゼウスが元気よく言った。

アーサー卿が返す。

「ああ、では皆、予告状に指定されてある夜中12時になったらこの広場に集まるんだ。怪盗：Rの狙い目、ラピスラズリはここに置いておく」

アーサーは皆に指示を出すと、群青色と銀色のコラボマッチ、星満点の夜空をこの一点に凝縮したような石：ラピスラズリを食堂の真ん中の鳥ポケモンの石像の足元に置いた。

この後は皆が食事しながら談笑する日常的な光景があった。

「怪盗Rって何処のどんな奴なんだろうなあ……………」

「さあな、とりあえず口コンうどん食つて右足をとつと動かせ」

「Rって言つからラ行で始まるポケモンだよな」

「そっじゃねえの？ ほらとつとと食え。伸びるだろうが」

「ラ行で始まるのは……ラムパルド、ルナトーン、ルンパツパ……」

「早く食えつてのったく……」

ジャードは段々苛ついてきて、貧乏揺すりを始めた。

「ん？ パフィー達はどうしたんだ？」

ゼウスはロコンうどんの汁をやっと飲み干し、キンセツシティの広場までアーサー卿の愛娘・ルウムを連れてきていたジャードが周りを見渡し、ある異変に気づく。

「ああ、今日は学校の行事で遠足があるんだってさ」

「ふん、学校か………良いなあ、親のいる奴は……」

ジャードには哀愁が漂い、ゼウスは悲痛な面持ちを浮かべた。とてもルウムがいる雰囲気とは思えない。そのルウムがゼウスをつっついて言った。

「ねえ、怪盗って何？」

どうやら先程のアーサーの話聞いて疑問に思ったようだ。

「ん？ 怪盗を知らんのか？ 怪盗ってのはな、普通のポケモンが思いつかない方法でお宝を盗むのを職業にしてる奴のことを言うんだ。頭がよくねえと出来ねえことだが、犯罪者であるのに変わりはないねえ」

「ふん、凄いなえ」

ジャードの説明にルウムが感嘆の声をあげている。
タメ口だがあまり気にしない。

ついでに言つとジャードはアーサー卿にもタメ口だが、彼も気にしていない。

「犯罪者なら、その怪盗さんを捕まえに行こうよ」

「はい!？」

その時、ルウムがとんでもないことを言い出した。

その怪盗が殺しはしない主義なら構わないが、必要とあらば殺す者なら困る。

その怪盗Rがどのような者かすらも不明なのだ。

ゼウスは止めようとした、が……

「ねえ早く早く」

「い、いや、危け」

「行こうよ」

「姫君、行きたいのは分か」

「行きたい」

ルウムは梃子でも動かない、という構えだ。

埒があかない、と思つたのかゼウスはジャードに耳打ちした。

（良いじゃない？ 適当に探して暇つぶしでもしておいたほうが）

（んん？ だがあの様子だと見つけるまで帰らないって感じだぞ？）

（じゃあこのまま姫君と交渉して時間を潰すとか）

（お、それいいな）

意見がまとまった二匹がルウムとの交渉を開始――

「ね、ねえ姫君、危ないですから――」

「うん、じゃあいこー!」

する前にルウムが動き出してしまった。

流石のジャードも止められず、結局二匹はルウムの怪盗探しに付き合う運びとなった。

「ゼウス、姫君から目え離すなよ。この前は酷い目に遭ったんだから」

「ジャードのせいでもあるんだけどね」

2時間後、ルウムは“そこまで込み入った場所は探さないだろう”という二匹の浅はかな思い込みを凌駕し、命の危険が及ぶ可能性のある場所へどんどん二匹を引き込んでいた。

「熱いね」

「.....」

三匹はキンセツシティをずっと北に上がった先にある煙突山に来ていた。

その時、ルウムが屈みこんで何かを拾っていた。

「? 姫君、それは.....?」

「ん? 見てこれ。私が持ってるのと同じ」

彼女はそう言って2つのペンダントを取り出した。

紐の長さ、ペンダントの形、更にペイントされてある漆黒の劔の紋章のマークも、全て一致している。

「？ 姫君、これをどこで拾った？」

「ん〜とね、こっちは今ここで、もう片方は昨日捕まった時に牢屋の中で拾ったんだ〜」

ルウムの言葉に2匹は驚愕の色を顔に浮かべた。

「この劔の紋章は………^{ダーク・ソード}暗黒の劔！ 奴等が………ここでも活動していたのか！？」

「いや、このペンダントは比較的新しいよ。多分今も活動中——
——」

ゼウスがそこまで言った時、彼等の背筋を凍らせる声があがった。

『侵入者発見！ 侵入者発見！ 直ちに排除せよ！』

「了解！」

バタバタと、周囲から多数のポケモン達が飛び出し、彼等を取り囲んだ。

「わー凄ーい」^{ポケモン}

「んーったく、人の苦勞も知らずに呑気なこと言いやがって」

ジャードは悪態を吐くが、その顔は何処となく笑っていた。

「まあ勝てばいいんだよね？ こんな雑魚共なら普通に勝てるよ」

ゼウスが周囲のポケモン達を見下したように言う。

「てっ、テメエ！ 俺達をなめてん——ギピ！？」

そのポケモンの頭領と思しき者、ポチエナが吠えた。
が、その途中でゼウスのアイアンテールの餌食となった。

「はっはー！ ゼウス、やられんなよ？」

「勿論」

ゼウスとジャードにポケモン達が躍りかかり、大乱闘が始まった。

「サイコキネシス」

「グヘエ！？」

ルウムの技に締めあげられたWゴリキーがニョロトノの死に際のような断末魔をあげる。

そこを1匹はジャードの10万ボルトで、もう1匹はゼウスのシャドーボールでノックアウトされた。

「これで良いかな？ 後は——」

「後の御前等だな」

「！？」

2匹の背後から不意打ちを喰らわそうとしていたポケモン達は電撃と硬い尻尾で吹き飛ばされた。

「封印！」

そして最後の1匹がルウムの技に拘束される。
そのモンジャラは苦しみ、もがいたが——

「電光石火」

ゼウスの体がモンジャラを撃った。

モンジャラは鮮血を吹き出して、力を失ったスバメのように地に堕ちた。

「ふう………とりあえず助かったかな？ それじゃ、もうこんな物騒な場所はおさらば——」

「わりの、姫君、ゼウス、先帰ってつてくれ」

危険の無いことを確かめているゼウスにジャードは言った。

「え？」

「シダケタウンに行く。アーサー卿にはそう伝えといてくれ」

ジャードはそう言うと2匹に背を向け走りだした。

Legend:8 怪盗R(後書き)

ゼウス

「? ジャードに何が?」

まあ色々だね。

ゼウス

「それより疲れましたよ。なんであそこまで行かなきゃなんないの」

愚痴言っなって(汗)

Legend：9 怪盗と忍び

現在午後10：00・怪盗の予告していた時間まで残り二時間だ。
屋敷で働いているポケモン達が怪盗の目標ターゲット、ラピスラズリが置かれてある食堂に集まる。

「おや？ ジャードはどうした？」

ポケモン屋敷の主、アーサー卿が人数に違和感を抱く。

「今日シダケタウンに行つて戻ってきません」

ゼウスが疑われないように言った。

煙突山まで行った、なんて言ったら流石に怒られるだろう。

「ゼウス〜また煙突山行こうね〜」

ルウムに墓穴を掘られた。

当然アーサー卿の耳にも届いている。

「……………ゼウス？」

「……………はい」

「……………まさか……………煙突山まで行った、なんてことは……………」

「……………黙秘します」

アーサーは苦笑いだが目がシリアスだ。

今ここにいる全てのポケモンが怖いと思っている。

その後、5分程してゼウスは戻ってきた。
くどくどと説教をうけていたのだ。

アーサー卿は怒ると怖いが、決して暴力は振るわない（バトルとかの時は別）。

キンセツシティの住人に慕われている理由の一つでもある。

「まさか、ホントに煙突山まで行ったのか……………」

フライゴンのカインがゼウスの側に歩み寄ってきた。
屋敷の中で一番頭が良く、信頼も厚い。

「……………うん」

ゼウスは妙に俯いてボソツと返した。

レンは食堂の屋根裏に潜んでいた。

怪盗がここで下準備をすると踏んでいたのだ。

理由は一つ。

数時間前に真新しい傷跡や細い透明の糸を見つけたのだ。

屋敷のポケモン達に聞いても屋根裏に侵入する者などいなかった。

それが大きな理由だ。

レンは暗い部屋に積まれた段ボール箱の物影に潜み、気配を完全に消してみせた。

かつてミシロタウンに住んでいた時もよく使った方法だ。

あの時は貧困さに敗れ、悪政を行う領主の下でストーカー紛いの仕事をしていた。

「……………!!」

カサコソ、という物の擦れるような音を聞きつけそっと首を出した。

「……………御前は？」

一匹のレディアンがじつとこちらを見つめている。

「屋敷の影忍」

レンが希薄に返す。

レディアンは口の縁を軽く持ち上げると言った。

「気づいているのだろうか？」

「ああ。怪盗Rだな」

「スピカ、という名は覚えていないんだな……ハッ！」

レディアンはスピカと名乗ると一気に肉薄した。

通常ではありえない早さ、マッハパンチだ。

それに対しレンは目を瞑ってじつと佇むのみ。

スピカの拳が彼の目の前に迫ってきた！

だが、スピカが勝ちを確信した矢先、レンの姿が掻き消えた！

「!?」

「はっけい」

レンの技がヒットし、スピカは吹っ飛ばされた。

彼は咄嗟に起き上ると状況整理のため思考回路を回す。

今の技は……あれは、あれはテレポートだ！ いや、普通のリオルが覚えるわけがない……だがアイツは何事もなかったかのようにテ

レポートを使っていたな……………！！ まさか術式変換技？

フォース・チェンジ

「スピカ。とつとと帰れば今回は許してやる。もうちょっと頭を冷やせ。確かに怪盗はかっこいいようだが、それは表の顔。本来はその辺のコソ泥と同類だ」

レンが淡々と告げる。

その言葉は一言一句がスピカにとっての挑戦状だった。

「う……………う……………」

「そんな犯罪行為、俺は許せない。例え、どんな状況でも」

スピカの怒りに火がついた。

大切なものを守る思い。その全てを“犯罪行為”という言葉で切り捨てられた。

彼の強い意志が、紅蓮の劫火のように燃え上がる！

「うるせえっ！！」

レンが口をつぐんだ。

その赤い瞳が、銀色に輝くスピカを捕える。

次の瞬間、スピカの光と同じ色の竜巻が天井裏を満たす！

ドゴオオオオオオンン……………

「な、なんだ！？」

アーサー卿が辺りを見渡す。

そこにいる全員がうるたえていたが、やがて水をつつたように静まりかえった。

「……………まさか……………天井裏？」

ゼウスが呟く。

「そのようだね。音の大きさ、音質からみてこのすぐ上の部屋からたった音とみて間違いない」

カインが冷静に推考を述べる。

「天井裏って……………まさか、レンさん！？　レンさんが危ない！」

そう叫ぶとゼウスは走りだした。

Legend:10 ラピスラズリの思い(前書き)

うわあ……………疲れた……………

ゼウス

「やっと更新だよ。6日位間開いてるんじゃない?」

まあ僕の小説の中で一番読まれてないみたいだからね。感想一通も来ないし。

ゼウス

「いつか泣かせるよ?」

Legend:10 ラピスラズリの思い

「はぁ……はぁ………！」

ゼウスと卿はレンが潜んでいた天井裏を目指して走り続ける。

カイン曰く、レンが覚えていた技では有り得ない音らしい。

その言葉が正しければこの轟音は怪盗が起こしたものと考えられる。状況が正であれ悪であれレンに危険が迫っていることは必定だ。

「レンさん！」

ゼウスは天井裏につながる隠し扉を勢いよく開けた。そこには傷だらけになって倒れているレンと、怪盗R、もといレディアンのスピカの姿があった。

「怪盗……R……本名はスピカ……」

アーサー卿に介抱されながらレンが弱々しく告げる。

「並みの強さじゃ……ない……」
「フン」

レンの賞賛など気にしない様子で、スピカは肩から下げたショルダ―バッグから何かを取り出すと地面に投げつけた。

「煙珠！」
「うわ！？」

煙が部屋いっぱいになりたちこめ、ゼウス達は目を開けられずに咽る。

だがゼウスは戦闘の構えを解かない。

それどころか両掌を向かい合わせ、紫色の魂を作りだした。
シャドーボールだ。

「ゼウス、相手の場所が分かるのか？」

アーサーが期待を含んだ声で問いかけた。

ゼウスはそれに対し、はつらつとした声質で答える。

「いいえ、分かりません。当てずっぽうです」

アーサーの顔に縦線が無数に走る。

その答えは彼にしてみれば悪魔の現れに等しいだろう。

何故ならそこに怪盗がいなければシャドーボールが飛んでいく先は

「シャドーボール！」

「おいっ、やめ——」

アーサーの制止も届かず、ゼウスは紫魂シャドーボールを放ってしまった。

当然その時にはスピカはそこにいなかった。

放った先はただの壁。

バキィッ！！ パラパラ……

その壁が、シャドーボールの威力を受けて凄まじい音をたてながら
木端微塵に破れていった。

「……………ゼウス……………」

「卿！ 怪盗がいません！」

「当たり前だろ！ 何のための煙珠だと思ったんだ！？」

この結果を予想していたアーサーの呆れを無視してゼウスは声をあげた。

その通り、スピカは煙珠の効果持続時間内にさっさと天井裏から出てしまっていた。

「ゼウス！ 戻るぞ！」

アーサーが素早く踵を返す。

ラピスラズリのある石像は他の皆に守らせているが、アーサーが抱えているレンの様子から不吉な予感を感じる。

「はい！！！」

ゼウスもアーサーのあとに続いた。

「う、嘘だろ？」

食堂に戻ったゼウスとアーサーは驚愕した。

石像を守っていたポケモン達が皆やられている。

その屍の群れの中に立っている、否、宙に浮いているポケモンが二匹。

スピカだ。

彼は石像の前に立ち、ゼウス達を認めると邪悪な笑みを浮かべて一言。

「貰っていくぞ。ラピスラズリを」

そう言つて石像の、彼等からは見えないところに手を伸ばす。

見えないが、そこに自分が守らなければならない物がある、というのは理解できる。

一寸の迷いもない。

ゼウスは再び前足の掌を向かい合わせ、ドッジボール程の紫色の魂を編み出した。

そして、目の前の宝にしか目がいつていない怪盗に、寸分の狂いもなく放つ！

その間、僅か一秒。

「つつ！」

スピカはそれに気づいたが遅かった。

それを防ぐことは可能だったが、万全な受け止め方をすることは出来ない。

（それなら仕方ない………！！）

体を縮め、最低でも急所を隠すような体勢でゼウスの技を受け止める。

バチッ！！

スピカに激しい痛みが訪れた。

焦りの色が窺える目にはアーサーの真空波が捕えられた。

必至に身をよじらせ、紙一重でそれを防ぐと食堂の扉の方へ必至に飛ぶ。

「待て！」

ゼウス達は必至で追いかけるが、食堂をですぐに見失ってしまっ

た。

仕方ないので食堂に戻る。

「逃げられた、か……………」

「いえ、またやってくるかもしれません。今日は徹夜ですね」

愚痴をこぼしつつ、スピカにやられたポケモン達の様子を見ていく。誰も致命傷を負った様子はないのでほっとした。

「屋敷にこんな物があつたなんて……………」

ゼウスは群青色の宝石、ラピスラズリを見つめながらため息を吐く。とても大きく、綺麗。

時価にして数10万ポケはあるだろう代物だ。

「ああ、私が……………絶対に手放したくない物だよ」

アーサーは宝石をとるとうつとりと見つめる。

何か、大事な物。

絶対に譲れない物。

この宝石にはそんな思いでが沢山詰まっている。だから、渡したくない。

物体を全て現金と同じような扱いをするような奴かいとつには、何があっても渡せない。

「絶対に、手放したくない物……………」

ゼウスがその言葉を反芻する。

具体的にどんなものは聞かされなかったが、そのラピスラズリを、アーサーが大事にする気持ちは理解することができなくもない気が

した。

根拠は無い。

ただ、自分の中に漲る力がそれを物語っている。
その時

ビュン！

「危ない卿！ 電光石火！」

スピカの気配を察知したゼウスが電光石火で怪盗を討ちぬく。

彼はスピカがこの付近ですと自分達を見張り、あの宝石を盗みだす頃合いを見計らっていたのを知っていた。
ラベスラスリ

だが半歩ずれていた。

スピカは紙一重でかわすと、体を銀色に光らせた！

「な……な？」

ゼウスとアーサーはスピカの様子に違和感を感じる。

突如、レンの声が響き渡った。

「危ない、卿！ ゼウス！！ それをまともに喰らったらやられるぞ！
フォース・チェンジ

それは術式変換技だ！！」

「えっ！？」

「遅いっ！ 術式変換技、銀色の風×竜巻き！」

その途端、銀色の竜巻きが食堂全域を襲った。

テーブルや椅子が飛び交い、かなりの重量を誇る石像が、発泡スチロールの如く吹き飛ばされる。

だがゼウスは素早かった。

電光石火でスピカの真後ろに來ると、アイアンテールでその頭を殴

った。

「がつ！？」

銀色の風が消え、スピカとゼウスは石像が元あった場所に落ちる。
これで終わったとゼウスが安心した瞬間、

「馬鹿！ それは強制脱出装置だ！」

絶望をも思わせるアーサーの声が響いた。

石像の下にバネが用意されていたことに彼等が気づいた時は遅かった。

その時は既に宙を舞うイーブイとレディアンが、キンセツシティを
離れ、上空を東の方角へと飛んでいくのが、ポケモン達の目に映っ
ていたという。

Legend:10 ラピスラズリの思い(後書き)

はい、そういうことですので暫く我らが修羅、ゼウス君は登場致し
ません。

ゼウス

「はあ!?!」

なんてのは「冗談」次から怪盗とタッグくんで色々犯罪紛いのことを

ゼウス

「それもダメ!」

焦るなよ。半分「冗談」だからさ。

ゼウス

「半分!?! 残りの半分はホントってこと!?!」

ノーコメント

Legend : 11 飛ばされた先で

「あいたた……………」

ゼウスは暗い山の中腹あたりに落下していた。

どうやら繁みの中に落ちたらしく、首をひょこ、と出すとガサ、乾いた音になる。

「ここは……………どこなんだろ……………」

わざわざ声に出さなくても良い台詞を声に出す。

そうしないと言いようも無い恐怖に襲われてしまうのだ。

姉のマキからはぐれた時からのトラウマだった。

「……………」

答は周りの闇に吸いこまれ、帰ってこない。

周りを沈黙が支配し、ゼウスを精神的に追い詰める。

その時、

「おい御前、とりあえず俺から降りろ」

彼を取り巻く気配を掻き消すかの如く、下から声があがった。

「あ、貴方もここにいたんだ」

ゼウスは急に安心したような顔になると、その場からジャンプした。彼が元いた繁みの方を見ると、それはガサガサ、と音をたて、不意に一つの突起物を突き出した。

「いつてえ…………ま、命を落としてねえだけマシか」

スピカだ。

彼はゼウスに目を向けると言った。

「おい、御前。ここが何処か分かるか？」

「知らないよ、そんなの」

ゼウスは拗ねたような表情を作った。

こんな所に来てしまった全責任をスピカに押しつけようという気概がありありと見てとれる。

スピカはそんな彼の態度に苛立ちもせずと言った。

「しょうがないな…………御前、とりあえずここから出るぞ。俺に協力しろ」

「嫌だ」

「嫌だつて御前……………」

「貴方が怪盗なんて犯罪紛いのことをやってなかったらこんなことにはならなかったんだ」

その発言に、スピカも少し苛立った。

「フン、なら俺は一人でここから脱出する。御前は一人でやる。それで問題無いな？」

「……………」

ゼウスは首をブンブンと横に振った。

この真つ暗な森の中に取り残されるのは御免だ。それ位なら怪盗に力を貸した方が良い。

「そうだろう。じゃあいくぞ。まず名前を聞いておこう。何かと不便だからな」

「……………ゼウス」

スピカは全て計算通り、といった風に次の言葉をきりだした。

「ゼウス、俺達は今、敵に囲まれている」

「えっ……………」

「そう案ずるな。敵は雑魚10匹に、少し強いがやはり雑魚の頭が一匹だ……………言いたいことは分かるな？」

スピカはそう言うのと体を銀色に光らせた。

フォース・チェンジ

シルバートルネイド

銀色の風に竜巻きの風速を付け加えた術式変換技、銀色の竜巻きだ。轟音をあげながら、銀色の竜巻きが辺りを揺らす！

「ぐはぁ！」

「ぎゃあぁ！」

そこらの繁みからタネボーの集団が転がり出てきた。

その中から、タネボー達の親玉とみられる者、ダーテングがいた。

「切り札！」

ゼウスはダーテングにむかって必殺技を放つ。きりふた

ダーテングは周りに気をとられており、もろに彼の切り札を喰らった。

「フッ、御前、なかなかやるじゃないか」

「スピカもね」

互いに不敵な笑みを見せる。

そのまま、数で相手を圧すタネボー軍団と、術式変換技という絶対^{しょう}的^りな切り札^{のほうていしき}を持ったゼウス&スピカ。

二人の正念場が訪れた。

Legend : 12 深まる謎（前書き）

あ、今回サブタイと内容が一致しないかもしれませんがね

ゼウス

「は？」

まあゼウス&スピカのタッグが爆進していくよお

ゼウス

「……………まあいいか。では、どうぞ！」

Legend：12 深まる謎

「ははははは！！ 無駄無駄無駄あつ！！」

スピカは悪鬼羅刹の声を出しながら連続パンチで襲い来るタネボー達を葬っていく。

「シャドーボールツ！」

ゼウスはタネボー達の親玉らしき存在、ダーテングと戦っている。二匹とも最初の二つの術式変換技で敵にダメージを与えていたため、楽に戦えていた。

術式変換技は放った自分にも副作用が振りかかるが、その程度でこんな山賊達に負ける程ゼウスもスピカもヤワではない。

「く………確かに御前等は強い。……だが、まだまだあまい！」

相対するダーテングはその状況に余裕の笑みで向かっていた。そのまま片手の団扇でゼウスのシャドーボールを打ち返す。

「あまいのは貴方達だよ」

ゼウスはそう言ってシャドーボールを難なくかわす。そのまま空中で近くにあった木を力強く蹴る。

「電光石火！」

「グフウ！？」

ゼウスの刹那の動きをダーテングは避けることが出来ず、技を抵抗

することなく受けた。

そのまま体を折って経へたりこむ。

そのガラ空きの背中を、彼は見逃さなかった。

即座に尻尾を鈍い銀色に光らせる！

「アイアンテール！」

ゼウスのアイアンテールはダーテングを音速^{マッハ}の早さで動かした。

ダーテングは木々を幾つも薙ぎ倒して見えなくなった。

そしてこちらにも音速^{マッハ}で動いているものが一匹。

「マッハパンチ！」

スピカだ。

彼はタネボー軍団の7匹を弾き飛ばし、目の前の二匹を肉薄していた。

そんな中、スピカに襲いかかろうとするタネボーが――

シュバツ！

ゼウスの電光石火にやられて動かなくなった。

スピカは彼に背を向けたまま礼を言う。

「フツ、有難うよ、ゼウス」

それだけ言うと、目の前のタネボー達をしっかと見据えた。

「げ……………」

タネボーはスピカから殺気を感じて後ずさったが遅かったようだ。

「終わりだ！ 連続パンチ！」

スピカがそう叫び、タネボー達に硬い拳が嵐のように襲いかかった。辺りに再び静寂が訪れる。

「そう言えば……貴方の術式変換技は見たことがない……」

危険が去り、安心したゼウスがその場に座り込んで聞いた。

術式変換技は本来技の性能を書き換えるもの。

技と技を組み合わせて強力な技を作るような技術ではないのだ。その疑問にスピカは難しそうに答えた。

フォース・フュージョン

「あー……これな、術式還元技っていうんだ。技と技の威力や性能をかけ合わせる、術式変換技の発展型だ」

フォース・チェンジ

「そんなのがあったんだ……」

ゼウスは目を見張る。

二匹の互いへの嫌悪感漂う雰囲気は既に消えていた。

「それより、だ。これから如何する？」

スピカは今彼等にとって一番重要なことを聞いた。

「うん……ホントに如何しよう……」

ゼウスは心細くなって辺りを見渡す。

真っ暗だが隣にスピカがいてくれるのでそう怖くはない。

たった一匹側にいるかいなかでここまで違うのか、と思い知らされた。

「……………まあまずはこの山を降りることが必要不可欠だが、問題はその後だな」

スピカはそこまで言うと、不意に言葉をきって先の戦闘におけるゼウスの実力を思い返した。

あの図体でかいダーテングをアイアンテール一発で彼方まで吹っ飛ばす威力。

更に遠距離からポケモン一匹を楽に倒せる電光石火。

そしてあの切り札。事前に技を出していなかったのに高い威力を誇っていた。

間違い無い。あれは術式変換技だ！

出来る。こいつらなら絶対に、アイツらを倒せる！

そう感じ、彼はゼウスに一つの案を投げかけた。

「なあゼウス」

「何？」

「この山を降りたらちよつと俺を手伝って欲しいんだ」

「怪盗の仕事はやらない」

「そんなもんじゃないさ。俺がこの仕事から足を洗うためだ」

ゼウスはこの言葉に驚きを覚えた。

スピカは自ら望んで怪盗という仕事に就いたわけではないのだ。

Legend: 12 深まる謎（後書き）

ゼウス

「ちよつと待つて！ 僕は泥棒と手を組んだの！？」

はっはっは。だが彼は自ら望んで怪盗となつたのではないのだ。

ゼウス

「微妙にラストをばくつた！」

さてさて、続きですが彼等はある場所へ行きます。

ゼウス

「なんか稀に見る次話予告（汗）」

山を降りるシーンは完全に飛ばすつもりです！

ゼウス

「つもりだよね？ あくまでもつもりだよね？」

まあつもりだから書くかどうかは一切分らない、と

Legend:13 故郷ミシロタウンにて(前書き)

ゼウス

「あれ？ 僕がミシロタウンに居ても大丈夫なの？」

？ なんで？

ゼウス

「一応デীবスに命ねらわれてるんだよね？」

うん……まあ、そこは色々と……(汗)

ゼウス

「言葉を濁したよ(汗)」

Legend : 13 故郷ミシロタウンにて

「うわぁ……やっと山を降りたよ……」

ゼウスとスピカが山を降りるとそこはコトキタウンだった。

「スピカ」

「何だ」

「スピカが行きたいってのは何処？」

ゼウスがそこまで訊く。

するとスピカは彼にとって酷な回答を出した。

「この先——ミシロタウンだ」

「……………」

ゼウスの顔が一瞬で引き攣る。

最近ミシロタウンで領主が変わったという噂を聞かない。

あのデービスというドサイドンがまだあの町に居座っていたらミシロタウンは彼にとって危ない場所だ。

だが、デービスはいないという可能性もある。ゼウスはその可能性に賭けて見た

「あのさ、ミシロタウンの領主って誰？」

「ああ、デービスとかいうドサイドンだ。ハウエンの中で最悪の領主だ」

「……………」

が、ダメだった。

「……………ゼウス？ どうした？」

「スピカ、僕はこれから……………ええと……………」

そのままゼウスは固まった。

スピカは苛立ちも見せずに次の言葉を待つ。

「ええと……………ジャードって名乗るから。間違えないでね！」

そう念を押す。

「？ 一体何事……………」

彼はそこまで言うつとゼウスの怯えた顔に気付いた。

そのまま、ゼウスの意味すること全てを察した。

——まさか、8年ほど前、ミシロタウンの領主に直訴を続けていたブースターが領主に殺された。その際にそのブースターの二匹の子供は行方不明になったと噂を聞いたが……………まさか……………まさか……………！！

スピカはある仮説をたてた。

その仮説の正しさを証明すべく、ゼウスにとある質問を投げかける。

「なあゼウ……………ジャード」

「何？」

「御前、グレイシアの姉はいるか？」

ゼウスは怪訝そうな顔をする。

答えない。

相手は怪盗の肩書を持つポケモン。答えるにはリスクが大きすぎる。だが、結局相手には自分の生い立ちがうすうす悟られている。相手を信頼に足る男であるとゼウスはとった。

「うん、いるよ。名前はマキ」

「……！！ フ、フレアさんの息子の一匹は御前だったのか！？」

「知り合い？」

「似て非になるものだ」

スピカはそう短くかえすとミシロタウン方面に向き直った。

ゼウスは彼が最後に言った言葉の意味が分からず首をかしげていた。スピカはボソツと呟いた。

「御前の親父は……素晴らしい奴だった。苦しむ者の為に動き、その命を惜しまない。彼を尊敬しているポケモンは今も沢山存在している。俺もその一人だ」

彼の顔は後向きで分からない。

だが、少し苦笑を浮かべているのが分かる。

「あの方は良いポケモンだった。例えば相手がミシロ領主の独裁者であつても勇敢に立ち向かっていった。俺は彼の弟子として、フレアさんを信じた。それが……今の有様だ。情けねえな」

そう言つて大きく深く溜息を吐く。

「ジャード、御前はまだデービスに狙われていると思うか？」

「多分……アイツの手下のグライオンは父さん達だけじゃなく僕達まで殺そうとしてたから……今も機会さえあれば殺してやろうと思つてるんじゃないかな」

ゼウスは言いながら変な感覚に気づいていた。
父さんのことを喋っているはずなのに悲しくなっていない……？
だがそのことを深く考えている余裕は無かった。
彼は歩き出したスピカについていった。

「久しぶりにここに戻ったが…… 変わらないな」

スピカが哀愁の漂う声をあげる。
ゼウスは懐かしい何かを感じる。
だが、周囲からの視線がやけに気になった。
スピカはさつきから“ジャード”としか呼んでいない。
だからばれている筈が無いのだが……

市場は活気に満ちている。
だが、行きかうポケモン達の顔に光が感じられない。
皆、日々を生きていくのに精いっぱいのようなのだ。

「ここだな。ジャード、ここで俺が合図を出したら思いっきり暴れてくれるか？」

ミシロタウン、領主屋敷前。
スピカがゼウスに指示をだす。

「それは良いけどさ、そろそろ言っても良いんじゃない？」
「なんだ？」
「スピカはここまで来て何をしたいのさ？」

スピカはその問に声を詰まらせる様子も見せるでない、平静とした態度をとっている。

対するゼウスは彼が全てを答えるまでは梃子でも動かない、といった構えだ。

無理に張り合う必要はない、と思ったのかスピカは抵抗も無く答えた。

「俺はかつてここに住んでいた。そこで安らかな暮らしを送っていた。だがそれは永くは続かなかった。13年ほど前。領主が交代した。新しい領主はかつての歴史でも見られないような暴君、デービスだった。俺は物心づいたレディバだった頃から隠密行動の類が得意だった。それをアイツに利用された。俺の家族は全員人質にとられ、俺は仕方なく怪盗となり果て、奴の懐の為にあらゆる高級品を盗んだ。そうしないと、家族は殺されてしまうからだ。俺は怪盗となって10年。ひたすら足を洗う機会、つまり俺の家族を助け出す機会をうかがっていたよ。そしたらいきなりとてつもない実力を持つイーブイ、つまり御前の噂を聞きつけた。だからあの日、アーサー卿の屋敷へ忍び込んだ。そして御前以外全員を気絶させる為に戦ったのだ。御前の力を借りるために」

ゼウスは絶句した。

あの怪盗の、意外な一面。

この時彼は知った。

この世で、辛い思いをしている者は自分だけではない、と。

ゼウスも協力する気になった。

そして、頷く。

スピカは笑ってかえす。

「よく言ってくれた。じゃあ、この不思議珠が光ったら屋敷の前で思いっきり暴れてくれ」

そう言い残し、屋敷の横に彼は消えた。

ゼウスは目を閉じて待つ。

そして思い出す。

彼の、怒りに震える蒼い目を。

こんな理不尽な領主、デービスに対する怒りを。

自分は8年前、デービスに父と母を殺された。

スピカもまた然り。

その怒りを繰り返しながら、時が来るのを待つ。

「……………！！」

やがて、時はきた。

スピカの珠が光りだした。

ゼウスは掌を合わせ、紫色の球体を作り出す。

Legend:13 故郷ミシロタウンにて(後書き)

と、いうわけで、次回、デービスとゼウスが無駄なバトルを繰り広げます。

ゼウス

「む、無駄とはなんだよ(怒)」

ジャードとかなくなっちゃったけど、次か次の次位に出すんで。

Legend:14 VSデービス(前書き)

じゃ、今回デービスと戦って貰うからwww

ゼウス

「? 大丈夫なの?」

暗殺を部下に行わせたんじゃないwwwwww平気平気

Legend : 14 VS デービス

「！！！」

スピカの不思議珠が輝きだした。行動開始の合図だ。

ゼウスは両掌を向かい合わせるとその間に紫色の魂を作り出す。刹那、その魂をデービスの大豪邸の壁に叩き込む！

ドガン！！

そして、両脇から屋敷の従者達が走ってきた。

「何者だ！」

従者達は槍を突き付けると声を揃える。

ゼウスは不敵な笑みを浮かべ、声色を低くして答えた。

「僕はジャード。正義を掲げる者だ」

そう言った瞬間、ゼウスの体は一匹のミズゴロウの後にあった。

ミズゴロウはゆっくりと地面に倒れる。

従者達はその光景に見とれている隙にゼウスはアイアンテールで一回転し、周囲のポケモン達を薙ぎ倒した！

たちまちポケモン達がゼウスに襲いかかる。彼は暫くは勞せず、彼等を叩き潰していく。

が、やがてガタがきた。

「ぐ……………」

ポチエナの嘔みつくがゼウスのわき腹をかすった。

鋭い痛みが彼を襲う。

そして、それからゼウスの動きも変わった。
痛みを堪えるように隙を見せながら戦っている。
その隙をポケモン達が逃すはずが無かった。

「オクタン砲！」

「草結び！」

「ぐっ！」

そして彼は危機に晒される。

更に周囲をポケモン達に囲まれて絶体絶命の時、何かの声を聞いた。

『ゼウス……俺はいつでも御前を助けてやる。だから安心しろ』

刹那、体中が熱気に包まれる。

周りのポケモンも彼を見て後ずさっている。

どうやら表面上でも何か変化が起きているようだ。

「な、なんだあのイーブイ……いきなり火の粉を出しやがった……」
「厄介そうな相手だなあ……」

周りのポケモンは後ずさってかかってこようとしない。
今、ゼウスは体から紅蓮の炎をちらつかせているのだ。
従者達は訳が分からない。

だが、ゼウスは何が起こったかがすぐに判明した。

——あの声は……間違い無い、父さんの声だ！ 父さんが、
僕に力を与えてくれているんだ！

そう思って力を籠める。

体がどんどん熱くなる。

そして彼は燃え盛る炎のように、赤く輝いていく！

熱い、熱い、熱い！ 耐えきれない！

そこで彼は力を放出した。

極太い炎の柱が、彼を包囲していたポケモンを吹き飛ばす。

「やった！」

そう思っただけのため息を吐く。

それもつかの間、ゼウスに第二の刺客が現れる。

「御前達、こんなちんけなイーブイに苦戦するのか？」

それはゼウスにとって両親を殺した怨敵であり、ミシロタウン住人の苦悩の種、暗君デービスだった。

「んんん？」

デービスは訝しげにゼウスの顔を覗きこんだ。
そして問いかける。

「御前、8年位前に死んだフレアの息子に似てんなあ？」

「——！！！」

ゼウスを一瞬戦慄が走る。

だがあくまで彼は知らないフリをつっぱねるつもりでいた。

「フレア？ それは誰だよ？」

すると、デービスは嘘八百を並べまくった。

「あーポケモン違いか。フレアは良い奴だったぜ。このミシロタウンで苦しんでる者を助け、自ら声に出して憐れみを満たす、そんな奴だ。俺はアイツをなんとかして助けたかったんだが8年位前にどつかの誰かに殺されちまって――」

「嘘だ！ 父さんは御前に殺されたんだ！ 僕は見たんだ！」

そう叫び終わって、彼は言うてはいけないことを言ってしまったのに気づいた。

「父さん？ ほう、そうか……………御前はやはりフレアの息子だったか。ジャードなんて大層な偽名を名乗りやがって」

デービスは邪悪な笑みを浮かべると周りのポケモンに離れるように指示をだした。

「さがれ。コイツの死刑は俺が行う」

そう残酷なことを言って拳を構えた。
ゼウスは、今までにない恐怖に襲われた。

「あ……………あ……………」

言い様のない威圧感と半ばあきらめの感情を感じる。

だが、行方不明の姉、マキの言葉が、不意に脳内をよぎる。

『父さんは貴方を庇って死んだのよ！ ならここでゼウスが死んじやったら何の為に父さんは死んだのよ！』

「！――」

別に思い出したわけではない。

ただ記憶の片隅で、無意識に甦っただけだ。

それが何故、こんなにも自分を奮い立たせるのだろう。

ゼウスはデービスが振りあげた拳を睨みつける。

そして、必至に打開策を探す。

周りはポケモン達に遠まわしに囲まれて、目の前には自分を殺そうと殺気だつドサイドン。

その中から小さな打開策を、必至に探しまわる。

だが、遅かった。

デービスが、その硬い拳を今まさに、振り下ろす！！

その時だった。

ゼウスの目の前に何かが飛び込んできたのは

——ガッ！！

「！？ な、なんだ御前！？」

「まさか……ジャード！」

「ヘッ、御前、このドサイドンの話を聞く限り、俺の名を名乗ってたそうじゃねえか？」

リフレクターを展開し、デービスの拳を防ぐそのピカチュウは紛れもない幼馴染、ジャードだった。

「有難う！ でも、なんで？ なんでここに？」

「ゼウス、それは後だ。今はこのクソ野郎をぶっ飛ばすのが先だ」

「あ、うん」

ゼウスはそう答えると、持てるだけの全力を出し切る。

電光石火が、デービスの足元を惑わせた！

「んなつ！？」

「隙ありだ！ 気合いパンチ！」

デービスは5？後に吹っ飛ばされ、気を失う。

ゼウスはその一瞬を見限って逃げ出した。

ジャードも後に続く。

「でも……どうしたもんかな……この後どうやって逃げれば……」

「大丈夫だよ。スピカがきてくれるから、捕まって上空から脱出出来るんじゃないかな」

「スピカ？」

「怪盗Rのことだよ。正体はこのミシロタウンの住人のレディアンだったんだ」

その時、羽音が鳴り響いた。

ゼウスはすぐに気付いた。スピカが来たのだと。

そしてジャードはコイツがスピカか、と呟く。

「俺を呼んだか？……ん、そのピカチュウは」

「後で説明するよ。それより家族は無事だったの？」

「ああ、御前が程良く暴走してくれたお陰で気づかれずにすんだ」

「それなら良かった。奴に見つからないうちにここから出るぞ」

「うん」

「ああ、良く分かんが頼む」

ゼウスとジャードはスピカの6本の腕のどれかに捕まり、ミシロタウンの上空を越えていった。

Legend:14 VSデービス(後書き)

ゼウス

「どこが平気なの!? 僕もうちよつとでアイツに殺されるところだったよね!？」

まあ結果として助かったから良いんじゃない?

ゼウス

「いやいや! もしジャードが来てなかったら」

既に起きたことにifは禁句だよ?

ゼウス

「訳の分かんないこと言ってるんじゃないよ!」

Legend:15 アーサー卿の推薦(前書き)

おー、久しぶりの更新♪

ゼウス

「ちょっと! ? 12月中旬位から全く更新してないじゃないか!」

色々と企画とかあつて忙しくてねえwww

Legend : 15 アーサー卿の推薦

ジャードのリクエストでスピカはキンセツシティのど真ん中に降り立った。

「ゼウス、大丈夫だったか？」

「もちろん。そう言うジャードはなんでここにいるの？」

ジャードとゼウスは互いに安否を確認する。

「ああ、シダケタウンから帰ってきたら卿が御前が怪盗Rと何処かに吹っ飛ばされちまったって仰ってたからな。タイム・リワインド 時空超越を使って御前等が飛んでいった場所を見極めて……と色々やって御前を見つけたってな訳だ」

「？ お、御前、タイム・リワインド “時空超越者” か！？」

スピカがジャードにつけられた肩書を訊き、驚愕する。

「ああ、それがどうした？」

ジャードがそう返すとスピカは黙り込んだ。

なんともないことが、と思ったのか、何かを考え込んでいるのか分かりにくい。

（——まさか、あの神の術式変換技を持つ者がここにいたか……！）

「…………スピカ？ どうしたのさ？」

ゼウスは下からスピカの顔を覗き込む。
彼は真剣そのものの顔つきだった。

（……………さっきの言葉から察する限りこのピカチュウ——
ジャードは何も知らないようだな……………まあアルグレウス研究所は金
を払えば良いとして……………問題はデービスの野郎だな）

スピカは心の中で葛藤を続けている。

何か、押してはならないスイッチを押したように、彼の心は乱れていた。

（とりあえず、デービスが知れば奴はここを責めるに違いないな……………だが今優先すべきは……………）

とりあえず、とスピカは頭の中で必死に考えていたことは全く関係ないことを言い出した。

「この街の中で俺が住めるような場所、あるか？」

翌日、アーサーに事情を全て話したスピカは彼の許しを得てキンセツシティの片隅にあるマンションに住みついた。

「よっと……………おい、スピカ、御前の荷物は本当にこれだけか？」

ジャードが呆氣にとられた表情を作る。

それもその筈、スピカの荷物はゼウス位の大きさの風呂敷包み一つしか無かったのだ。

ゼウスもスピカを可愛そうな目で見つめる。

「お、おい御前、何だその眼は？ 違うぞ！ 所持物が多かったらなにかと行動しにくいからさっさと売り払って金にしたから荷物がそれだけになってんだ！ 決してわびしい生活を送っていたわけではないっ！」

スピカは慌てながら弁明。

そのうるたえる様子は何かと面白かったり。

「あー分かった分かった」

そんなところに、アーサー卿が来た。

「ゼウス、ちよつと良いかい？」

「あん？ 誰だ——って卿？ 何事だ？」

ジャードは先程のアーサーに対する態度は気にしない。
アーサー自身も癪に障ることでは無かったようだ。

「バトルリーグって知っているよね？」

バトルリーグ。1年に一度、ミナモシティで開かれる、ポケモンバトル大会。

個人が参加するのではなく、一区ごとに最強の選手を代表に選出して戦わせる、ホウエン地方が統合して行う唯一のイベント。
去年はキンセツシティ代表はカインが出ている。惜しくも準決勝で敗れ3位という結果だった。

「そつえば今年もバトルリーグの時期なんでしたね」
「またカインが参加するのか？」

「それがさ……………」

アーサー卿は微かに苦笑いを浮かべながら言った。

「今年のバトルリーグ、団体戦らしいんだよ」

「「団体戦？」」

ジャードとゼウス、二人の声が重なる。

「そうだ。各区から3匹代表選手を選出することになった。一匹はカインに決まった。もう一匹もゴタゴタはあったがゼウスが出ることになった。そしてもう一匹は……………」

アーサーはそこまで言うと言を止め、チラリとスピカに視線をやった。

「……………俺か？」

スピカは、期待を僅かに含んだ口調で尋ねる。

「ああ、君の実力を調べる手前、参加して欲しい。出来るか？」

彼の、不敵な笑みにもスピカは恐れなかった。

「ははっ、上等だ。思いっきり暴れてやるよ」

「有難う。それで今回のルールなんだけど……………」

アーサーは二人に説明を始めた。

ホウエン地方リーグ ポケモンバトル大会。

1、団体戦で3匹の参加とする。

2、登録者以外の参加は認めない。

3、登録者の数は補欠1名を含み4匹。

4、フォース・チェンジ術式変換技は使用可能

「術式変換技………！！」

ゼウスはこの単語に息を飲む。

彼は身の内にそれを秘めた者。

それはスピカでもまた然りだ。

「御前、コレを持つ奴が大会に出ると思っているのか？」

スピカが、アーサーの考えを見抜いた。

だが見抜かれた本人はさほど痛い表情も見せない。

「ああ、去年まで、術式変換技は大会では使用禁止だった。それが解禁された以上、他の区では必ず一体はその技を持つ者が参加する。私はそう思うよ」

「彼等の技に、対抗する為ですね」

「恐らくこの大会、鍵は術式変換技を持つ君達が握っている。健闘を祈るよ」

アーサーはそう言って帰っていった。

Legend:15 アーサー卿の推薦(後書き)

はい、つつー訳で次はミナモシティだね。

ゼウス

「ホントに行くの?」

ホントに。

ゼウス

「団体戦ってどんな感じ?」

だから一匹ずつ戦っていくんだよ。

Legend:16 大会直前で(前書き)

ゼウス

「あのさ、先月更新してないのは気のせい？」

気のせいじゃない。とある事情で更新をお休みしてたんだ。読者様、御免なさいっ！

と、それから物語が大きく変わります。

ゼウス

「へえ、どんな風に？」

まあ大きくは新キャラが4匹登場。数えようによつては5匹。

ゼウス

「何故前者と後者で変わるの!？」

Legend : 16 大会直前で

ゼウスはバトルリーグへ向けて鍛錬に取り組んでいるところだった。

「シャルフェアナ、手合わせを頼める？」

彼はメイド服姿のミニロップに頼んだ。

実はシャルフェアナはパフィーの姉である。

「私は今忙しいのですが。少々後にしてもよろしいでしょうか」

彼女は淡々と答える。

そして、

「どうしても言うならライトとトアレの2匹に頼むといいです」

そう言つて、プラスルとマイナンの2匹を呼び出した。

彼女らもメイド服を来ている。

「はい」

「何ですか、チーフ」

彼女らがのほほんとした様子で来る。

シャルフェアナは二匹に指示を出した。

「ゼウスの鍛錬に協力して下さい」

「え……それはちょっと……」

「私達も怪我はしたくないので」

そう言ってライトとトアレは明後日の方向へ逃げていってしまった。
今やゼウスは恐れられる程の実力を身につけている。
ゼウスが、困っていると声が響いた。

「私が相手してあげようか」

「え……」

高く瑞々しい少女の声。

ゼウスがポカンとしているとその声の主らしきロコンが降り立った。

「白炎、コイツで合ってたよね、ミナモシティバトルリーグのキンセツ代表の一匹は」

「うむ。間違い無い。さつさと実力を調べ上げてトウカシティに戻るぞ、レナテ」

と、何処からか別の声も聞こえてきた。低い遠雷のような男性の声。
だが周りにその声を出したらしいポケモンはいない。

「アンタ、バトルして欲しいんですよ。早くやるわよ」

「え……でも……」

「五月蠅い。さつさと構えなさい」

レナテと呼ばれたロコンの少女は強気な態度で迫る。

「待て」

その時、白炎というらしき声が止めた。

「何」

「こやつ、『ブイズの灯』^{ともしび}を持っているぞ」
「え!？」

その時、ゼウスは白炎の音がレナターの耳に巻かれた一条のリボンから発せられていると気づいた。

勿論レナターはそんなことは気にしない。
暫くゼウスを見ながら白炎と何か言いあっていたが、

「御免。帰るね」

そう言うつと背中から二吹き of 炎を出した。

それは彼女の背中で紅蓮の双翼の形をとっていく。

フォース・チェンジ
「術式変換技？」

彼はそう感じた。

「ちょ、ちょっと、いきなり何？」

その時、ゼウスは今目の前にいるロコンが異端者であるとようやく気付いた。

「貴方が暇そうだからバトルの相手でもしてあげようと思ったただけよ。状況的に無理なんだけどね」

そう言うつてレナターは地面を勢いよく蹴つて宙を舞う。
紅蓮の閃光が夜空に走った。

「……………」

ゼウスは“今のは何だったんだ……”という表情でレナティーが飛んでいった方向を見る。

突如、後から声をかけられた。

「ゼウス、今のはなんですか」

「ん……」

振り返るとそこにはシャルフェアナがいた。

「もう一度聞くであります。今のはなんでしょうか」

「や、やだなあ、なんで僕が何かしたような目で見てくるのさ。今のはただの侵入者だよ」

「それなら問題無いのですが………」

「が？」

「もし何かあれば即座に卿に連絡が行くでしょうね。御身が不審なポケモンを屋敷に招き入れていた、と。フフ」

「え！？　ちよ、ちよつと！？」

ゼウスはとんでも無い、という風に悲鳴をあげたが、シャルフェアナは去っていった。

今のは彼女なりのお茶目なのだと彼は知っていたがどうにもそれに慣れることが出来ないゼウスであった。

二日後、ゼウス達はミナモシティにいた。

「…………元怪盗の俺がここにいて大丈夫か？」

「卿が全国に手を回して指名手配を取り消してもらったらしいよ。安心したらいい」

バトルリーグ出場者のスピカとカインが会話をかわす。
ゼウスはミナモデパートにいた。

「ジャード、確かこの前ペンが無いとか言って騒いでたよね」

「あん？ ああ、書きやすいから重宝してたんだよなアレ」

「ここに同じ種類があるけど」

「ウオ！ てか俺が欲しかった種類のが沢山あるぞ！ ここすげえ！」

ジャードは珍しくはしゃいでいる。

「ゼウス、ジャード。卿より呼びがかかっています」

いつのまにかシャルフェアナが来ていた。

「はい、分かった」

「なんの用事だ」

「ゼウスは大会時の出場順、ジャードは来客人がおいでです」

ゼウスは選手が止まるホテルへ向かう。

ジャードは来客人が気になるのかシャルフェアナに聞いていた。

「来客か」

「はい。ロコンが一匹来ているのです。知り合いですか」

「いや、知り合いにロコンはいなかったけどな……」

ジャードはその来客のところへ向かう。

耳に一条のリボンを捲いたロコンはジャードが来るや否やいきなり切り出した。

「あのイーブイは来ているか」

「な……」

高く透き通った少女の声。

ジャードはその声に一瞬聞きいつてしまったが、すぐに思考を取り戻した。

「な、なんだ御前。何処の何サマかも言わないで用事を切り上げてさっさと戻るってクチか」

「良いから早く答えて。あのイーブイはいる？」

「あのイーブイ……って」

ジャードはわざと言葉を濁した。

このロコンの少女が意味するイーブイが誰のことかなど分かりきっていたが、分からないフリをする。

ロコンの少女はそんなことはお見通しだ。

「決まっているでしょう。切り札の術式変換技を持っているアイツよ。ゼウスって言ったかしら？」

「……………」

答えるのに躊躇う。

わざわざとばけていたんだからここであっさり言うのも気が引ける。このロコンが何者かも分からないし、ゼウスはいまデータベースに命を狙われている。

簡単には言えない。

「答えない、ってことはイエス、って言ってるってことね？」

だから、敢えて一つ訊ねる。

「その前に、名前を聞かせて貰おうか。正体不明の者に情報をばらす趣味は俺には無い」

相手の名前を。

ここで一瞬でも躊躇ったり、嘘臭い名前だった場合は言わない、ということ済みます。

「私はレナテ。ポケモンを超えたポケモン」

だが、それはレナテには通用しなかった。

彼女は一瞬の間を置こうともせず、その質問自体を見抜いていたかのようにあっさりと言う。

最後の一言に謎が詰まりすぎたこともあって、ジャードは判断できなくなった。

「……答えないなら答えないで良いんだけどね、ちょっと忠告させて貰うわよ」

レナテは待ちくたびれたように首を振った。

「ゼウスは『ブイズの灯』を持ってるわよ」

「……何？」

ジャードは未だかつて聞いたことがない単語に狼狽していた。

「ブイズの灯はイーブイが持つと最強の力になる聖なる宝。貴方、ゼウスが炎を出したのを見たりしてない？」

「見ては無いが聞いた。紅蓮の炎を出したイーブイがミシロタウン

役所前で騒いでいる、と。即座にアイツと分かったがな」

でも、ジャードはわけが分からなかった。イーブイという種族は普通炎なんか出さない筈なのに。

レナテーはそのジャードの疑問を打ち消すべく、答える。

「それこそブイズの灯の力。イーブイがその灯を持つと、その進化系のポケモン全ての力をその身に収めることが出来るのよ」

「……つまりは……」

「あの子はイーブイでありながらブースターの力である炎を出せる。シャワーズの力である水も。他にも、サンダース、エーフィ、ブラッキー、リーフィア、グレイシア。それらのポケモン全てが持つ力を一概に出せるのよ」

ジャードが驚愕の表情を見せる。

「ゼウスはそれを知って、その宝物を持っているのか!？」

「本人はそんなこと知らない。気づいてもいない。ブイズの灯は体の中に憑依する」

そこでレナテーは言葉を切った。

そして、正体不明の声か

「だが、灯の力は徐々に顕現しつつある。ゼウスとやらが気づくのも時間の問題であろう」

今までのことに散々腰を抜かされてきたジャードは何処から発せられているか分からない声には驚かなかった。

それは白炎の声であったが勿論彼はそんなことを知る由も無い。

「そやつが『ブイズの灯』に気づく時。それは自らの願いを叶い給える時だ」

白炎の、意味深は言葉が響いた。

Legend : 16 大会直前で（後書き）

ゼウス

「物語が大きく変わるって言いやがったわりに進んでないと思う」

ジャード

「全くだ。バトルリーグにも突入してないぞ」

次話……くらいからバトルリーグにはいけると思う。

Legend:17 姉弟(前書き)

ゼウス

「作者さん、最新話を始めるにあたって読者様に何か一言」

はい、皆様。諸事情により更新を1ヵ月程放置しておりました。誠にすいません(汗)

それから今回あの御方が登場です。

Legend : 17 姉弟

「はあ、はあ」

ジャードはキンセツシティからミシロタウンまでの道のり、ゼウスが逃亡する際に通っていたルートを走っていた。

ブイズの灯という、わけのわからない物体が、いつどんな時にゼウスに憑依したのか調べるために。

「アイツがどこを通ってきたのかは別次元再生で調べてるから問題ないが……」

ジャードは時空超越者^{タイム・リワインダー}。

ゼウスがどの道を通ってきたのかなどはすぐに調べることが出来る。だが、

「アイツが落ちたこの崖は……」

ジャードはそう言って、今日何度目かの別次元再生の光をだす。^{タイム・リフロタクト}
だが、光はすぐに消えた。いや、ジャードが消したのだ。

「はずれか……」

ひょっとしたら結構昔に憑依したのかもしれないな、という推測を持ち、ジャードは崖を登っていった。

ここはミナモシティバトルリーグフロンティア。

総勢48匹のポケモン達。つまり、バトルリーグに出場する全ポケモンが並び、開会式が行われていた。

『宣誓！ 我々、選手一同は――を、し――する
ことを、誓います！』

会場いっばいに選手宣誓や、諸注意の音が響く。
そして、対戦のトーナメント表が表示された。

1回戦 第1試合…キンセツVSミシロ 第2試合…シダケVSム
ロ 第……

「ゼウス……！！」

スピカが戦慄を見せる。

それに対してゼウスはあくまで怯えた態度を見せず、

「1回戦でいきなりデービスと戦うんだ。面白いじゃない」

と楽観的な声を出す。

勿論心中では楽観していなかった。

ドサイドン、という種族は決して甘く見れる者ではない。

寧ろ防御力が高い岩タイプを備え、格闘タイプの技を覚えていても
全くおかしくない体格を持つ。

ノーマルタイプのイーブイ、ゼウスには天敵中の天敵だった。
それにデービスだけではない。

おそらく彼はこのバトルリーグで優勝できるようなメンバーを集め
ている。

なんにせよ、一筋縄ではいかない。

「あちゃー、やられたか。ミシロタウンが大会の管理委員会を務めているっていうの忘れてたな」

会場の観客席にいたアーサーは額に手を当て、1本とられたような顔をしている。

「卿、如何しました？」

隣に座っていたレンが訝しげに尋ねる。
アーサーはそれに

「ああ、いや、なんでもないよ」

と答える。

全国にスピカの指名手配を取り消すようオフアーを出していて、それが、スピカがキンセツシティに在住している、と教えているのと何ら変わらないことを忘れていた。

まあ、今更去ったことを悔やんでも仕方ないか、とアーサーは立ち直った。

「ここも違うのか……」

ジャードは別次元再生を解いた。

淡い光がフツと霞のように消える。

ミシロタウンのある廃屋の敷地内に彼はいた。

かつて、フレアと名乗るブースターが妻と、2匹の子供たちと安静

に暮らしていた家があったところだ。

ジャードはここでブイズの灯がゼウスに乗り移ったと考えたが、別次元再生が映し出す映像にはそんなものはどこにも映っていないかった。

「だとすれば、ミシロタウンがキンセツシティの何処かだが……」

ジャードは考えかけて首を振った。

「無理だなー両方合わせたら5000haくらいになるしな」

5000haというと100m四方の土地が5000集まっているということだ。

その全てを調べるとしたら1年以上はかかるだろう。

そんなに時間はかけられない。

これは自分の興味本位、つまり自己満足の為にやっていることだ。知らない間にわけのわからん物体が友達の体内に入っているというのは何とも気持ち悪いことだが、知らなかったからといって別に死ぬわけでもないのだ。

「……帰るか」

そう言っただジャードは踵を返した。

バトルリーグ会場では、試合の出場選手が控え室に向かっていた。

『えー第1試合、キンセツシティVSミシロタウンの試合の出場者を発表いたします』

ゼウスのいる控室に、司会進行役のヌマクローの声が響いた。

『キンセツシティ代表。フライゴンのカイン選手、レディアンのス
ピカ選手、イーブイのゼウス選手』

「なんですって!？」

ミシロタウンの控室。1匹のグレイシアが金切り声をあげた。
そして、傍らにいたドサイドン——もちろんデービスであ
る、を睨みつける。

「デービス、何を考えているの」

「何がだ」

あくまでしらを切るつもりでデービスを彼女は問いたです。

「ここで私とゼウスを会わせるのはアンタにとって都合が悪いんじ
やないかしら？」

「さあ、決して都合が悪いとは言えないな。それにイーブイのゼウ
スだからといって御前の弟とは限らんだろう？」

彼女の鋭い視線が、デービスを刺す。

その緊迫した空気の中、司会が声を紡ぐ。

『ミシロタウン代表。ウィンディのヘリアグナ選手、ドサイドンの
デービス選手、グレイシアのマキ選手』

「「え!？」」

キンセツシティの控室内に、ゼウスとスピカ、2匹分の絶叫が響いた。

「へえ、マキさんが出るのか、楽しみだな」

カインが心底楽しそうに言う。

「カインさん、そのマキってポケモンを知ってるの？」

ゼウスが尋ねるとカインは

「同じ名前の別ポケモンとかだったら話は別だがな、マキさんは術オース・チェンジ式変換技開発の第一人者なんだよ」

と答えた。

「……？」

スピカは何故それで喜ぶのか、全く分からなかった。

ゼウスや自分のように術式変換技を持っていると言うなら分かる。

だが、カインはそういうものは全く持っていない。覚えている技の全てが自然に覚えるものだ。

それでいて、術式変換技を開発したポケモンを敬う意味が分からない。

「ねえカインさん、そのマキっていうポケモンの生い立ちとか分かる？」

ゼウスは予想を確信にするためカインに尋ねた。

カインは答える。

「そうだな、ミシロタウンに弟と両親の4匹で住んでいた、というだけ知っているよ。とりあえず有名なポケモンだ」

「その親とか弟の名前とか知らない？」

「僕は別に芸能人のファンとかいうわけじゃないからね。知らないんだ——ってゼウス、何故いきなりそんなことを聞いたんだ？」

それまでベラベラと喋っていたカインは急に訝しげな顔色を見せた。

「……僕は前に両親を殺されている……そのマキっていうポケモンも、両親を殺されている。そしてマキの弟は生きていれば僕と同一年。違う？」

カインは首を傾げて言った。

「知らないけど……試合開始まで小1時間あるな。携帯があるから調べてみるか」

カインはそういつて持参のショルダーバッグのなかから携帯電話を取り出した。

そして15分後、携帯を閉じて言った。

「マキさんは確かに両親を殺されている。それから弟は生きていれば今13歳。ゼウス、君は……」

「僕も13歳だよ。それに僕にはマキっていう名前のグレイシアの姉さんがいるんだ」

カインが笑顔のまま固まった。

「信じてくれる？　僕は8年前、ミシロタウンに住んでいた。色々あって、僕の父さんは領主から目の敵にされていた。そして、殺された。僕と姉さんは命からがら、ミシロタウンから逃げ出したんだよ」

カインは返す言葉が無かった。
一言、

「別に、ミシロタウンの代表として出るマキさんが君の姉とは限らない。でも……もし彼女の親を殺し、彼女や君を良い様に操ろうと言うなら僕は絶対にデービスとかいう暗君を止めてやる。だからゼウス、安心しろ」

とだけ言うことが出来た。

Legend:17 姉弟(後書き)

ゼウス

「本当に姉さんかな？」

さあ、どうだろうね〜
♪

Legend:18 聖龍と聖獣

ミナモシティバトルリーグは団体戦である。3対3で勝負が行われる。

キンセツシティとミシロタウンの試合。キンセツシティ側からはフライゴンのカインが一番手で出た。

対するミシロタウン側の一番手はウィンディのヘリアグナ。両者は向かい合い、試合開始の合図を待つ。

観客すらも喋ることを拒み、本当の意味での沈黙が辺りに降りる。ただ司会1匹が、旗を振りかざす。

『それでは、ポケモンバトル———』

この瞬間、カインも、ヘリアグナも、観客、更にキンセツ、ミシロの残りの代表も固唾を飲む。

やがて旗はバツという音と共に振り下ろされた。

『スター———ト———!!』

瞬間、カインは地面を蹴って大空を舞う。ヘリアグナが飛びかかった瞬間、彼は両翼を力強く羽ばたかせて、

「砂嵐！」

粒子の竜巻きを起こした。

「つつ!?!」

ヘリアグナが怯む。その瞬間、カインは燕返しでヘリアグナに斬りかかっていった。

燕返しは素早い動きで相手を翻弄する技。それは強風起こる砂嵐の中でも例外ではない。

「^{ザン}斬ー!!」

計算違わず、ヘリアグナは切り裂かれた。カインは宙で翻り、ドラゴンクロウを喰らわせんと向き直ったが

(!?)

そこに、ヘリアグナの姿は無かった。カインは思考が追いつかず、何が起こったか分からなかった。

ウィンディという種族が神速という技を使えることを思い出したところで、後に殺氣が現れた。

「……君は、私のことを舐めているようだね」

「しまっ……!?!」

後先考えず、カインは上へ飛ぶ。彼の下スレスレを何かが飛んでいた。

「あの野郎……術式変換技を持ってやがる」

キンセツシティ代表の待機場所で、スピカは苦々しげに呟いた。

「さっきの、カインさんに放った技って龍の波動だよね」

ゼウスが状況を的確に述べる。

「ああ……なにぶんウィンディが覚えられる程度に術式を書き換えてあるだけだが、ウィンディは特殊攻撃力が高い種族だ……カインが一撃喰らって……耐えられるかどうかだな……」

スピカは苦々しげな表情を崩さない。

（まずかったな……今は……）

カインはさっきの自分を批判する。さっきのヘリアグナの攻撃は、反射にちかい咄嗟の判断で避けられた。しかし、次は無い。

また背中を見せて神速で背後に回り込まれたらあの技を避けるのは不可能である。

条件は、あのウィンディに背中を向けないこと。背中を向けた瞬間、龍の波動が襲ってくる。

（でも……そんなことが出来るか？）

それは難しかった。カインは敵の周囲を飛び回り、四方八方から攻撃を加える戦い方を主として使う。背中を見せない、ということはその戦い方を使わない、ということだ。

「まあ……そうしないと負けるっていうなら仕方ないけどな……」

カインは不敵な笑みを見せると、ドラゴンクローを右手に構え、へ

リアグナに肉薄する。だが、彼は本来のスピードではない。攻撃を加えたあと、すぐに後へ引けるよう、わざと速度を落としてある。

「ドラゴンク」

「火炎放射！」

カインが至近距離まで接近した時、ヘリアグナが炎を吐いた。

「龍の息吹！」

カインは紫色の炎で応戦する。

2つの技がぶつかりあったものによる爆発でカインは飛び退った。

カインは驚いてはいない。寧ろ敵が迫ってきたら技を放つ方が普通だ。

「龍の息吹！」

カインは爆発の跡の煙の中にもう一度、紫色の炎を吹き込む。

「龍の波動！」

だがそれはヘリアグナに簡単に打ち消されてしまった。

爆発による煙が晴れた時、

「神速！」

という声と共にヘリアグナの姿が掻き消えた。

（しまった！！）

カインは焦りながらも、状況を打破しようと動く。燕返しであらぬ方向へ飛んで行った。

壁にぶつかるといふ瞬間、軌道を力クン、と変え、ヘリアグナを振り払う。

だが、カインが燕返しを取りやめて地面に降り立った瞬間、ヘリアグナは彼の目の前2 mあたりにいた。

ヘリアグナはカインを嘲るように見つめて言った。

「私にそんな戦い方は通じない。君は“粉塵爆発”というものを知っているか」

「粉塵爆発っていうと……」

大気などの気体中にある一定の濃度の可燃性の粉塵が浮遊した状態で、火などにより引火して爆発を起こす現象。

粉塵ならカインの起こした砂嵐がある。だが砂は可燃性ではない。強いて言うならこのバトルステージが可燃性の物質でできているらしいが――

「あつ……」

カインは背中に氷柱を差し込まれたような感覚を覚えた。

「岩砕き！」

ヘリアグナは前足を床に打ち付ける。床は簡単に割れ、バトルステージを構成する物質の粉塵が舞った。

「火炎放射！」

ヘリアグナは即座に粉塵に点火する。あたりに粉塵爆発が巻き起こ

る。

「ぐあっ！」

カインの体に衝撃が走る。ヘリアグナは砂嵐の強風の為、爆風には巻き込まれなかった。

ドラゴンタイプに炎タイプは効果今一つなので、カインは致命傷にはいたらない。だが……

「ケホッ……！？」

やけに息苦しい。それもその筈、粉塵爆発は周りの酸素を吸って起こるのだ。粉塵爆発の後の空気は二酸化炭素だらけで、いくら吸っても肺が満たされることはない。

（ダメ……だ……意識が！）

闇に吸い込まれていたカインの意識は

「龍の波動！」

というヘリアグナの叫びによって現実へ引き戻された。

だが、酸素を取り込んでいないカインの体は言うことを聞かない。

ドオオオオ……！！

という音が響いた。同時に、砂嵐が止んだ。

『ゲームセット
試合終了ー！！ 第1試合1匹目の勝者はヘリアグナ選手ー！』

司会の又マクローの声が響く。観客席からワアアアと歓声が沸く。

「カインの野郎……負けやがったな」

スピカが額に手を当てている。

「次は……スピカだね」

ゼウスがボソリと呟く。

「ああ、……俺が負けたらキンセツは1回戦敗退ということだな……
しかし、分からねえ」

「デービスが自ら参加して、マキまで強制的に参加させて勝ちを狙う理由はなんだ？」

「あ……」

ゼウスはこれまで思ってもいなかった事に言葉が詰まる。
スピカはそんな彼に背を向け、

「まあ良い。俺は俺がすべきことをやるだけだ」

と言ってボロボロになったフィールドへ向かっていった。

Legend:18 聖龍と聖獣(後書き)

カイン

「僕は……負けたのか」

まあそう塞ぎこむなよ」

スピカ

「俺が勝たないといけないな」

頑張れ」

Legend:19 霰のカラクリ(前書き)

ゼウス

「いや、何この更新の遅さ(汗)」

完結しそうな小説に全てを注いでいたから(汗)

スピカ

「今回は俺とマキの戦いだったな」

Legend:19 霰のカラクリ

「カインの野郎……負けやがって……」

俺は軽く舌を打ちながらバトルフィールドを踏んだ。1回戦第1試合2戦目。

俺とマキのバトルだ。正直デービスがマキをどう懐柔したのか気になるところだった。マキの体に傷が付いていないところを見ると、強制的に従わせた可能性は低い。

術式変換技開発の第一人者ともなると金で釣られるなんてこともなさそうだ。だとしたら何故？ 何故アイツはここに居るんだ？

離れ離れになつていた実弟、ゼウスが大会に出場して、デービスに殺されるかもしれないというのに辞退すらしていないのもおかしい。何かがあつたんだ……マキとデービスの間でかわされた取引が……考えるのはよそう。分からないことが増えるだけだ。今は目の前の勝負に集中すべきなんだ。

『それでは、スピカ選手、マキ選手の試合を始めます』

審判のエビワラーが旗を振り上げる。その瞬間、会場は静まり、誰かが唾を飲む音すら聞こえる。

カインが負けた以上、俺は負けられない。俺の敗北はキンセツシテイ代表の敗北をも意味するのだから。

『ポケモンバトル、スタート！』

合図と共に、羽を広げ、マツハパンチを構えながらマキに向かって

いく。対するマキは微動だにしない。何を考えて――

「霰」

「つつ!？」

その瞬間、冷たい粒子が襲いかかってきた。しまった!

霰は氷タイプ以外のポケモンの体力を徐々に奪っていく技。その上
グレイシアは“雪隠れ”という特性を持ち、俺から見えなくなっ
ている。これは苦しい戦いになりそうだ……!

> i 2 2 3 6 5 — 1 8 3 7 <

「くそ……シルヴァートルネイド 銀色の竜巻き!」

銀色の竜巻きで霰を一瞬打ち消す。マキがいるのは……斜め前30
m辺りか!

「マッハパンチ!」

マキの位置を確認すると共に再び吹き荒れ始めた霰の中を突き進む。

「馬鹿ね。私だって移動するんだよ?」

その瞬間、全く別の方向から冷凍ビームが襲いかかってきた。ギリ
ギリのタイミングでそれをかわす。

「ちきしょう……」

歯がみして周囲を見渡す。少し手荒だが……こういか……。

「銀色の竜巻き！」

銀色の竜巻きを何連続も繰り出す。霰が消えては吹き荒れ、また消えては吹き荒れる。そして見た光景に俺は目を疑った。
マキは霰が消えることに違う場所にいる。テレポートを使っているのか？いや、それにしても移動が細かなような……。

「かはっ……」

しまった、術式還元技の使い過ぎと霰のダメージが重なって疲労がたまってきた……！

膝をついてしまいそうになる。でも、そうしたら俺の負けだ。マキは俺が動けなくなるのを待っているんだ……。

カインは包帯を巻いた体でフィールドを見つめていた。

「……あれはテレポートじゃない。影分身の応用だな」
「どういうこと？」

ゼウスが聞き返す。

「影分身を使って幻影を見せているんだ。本体はなんらかの手段を使って隠れているんだよ。だからバトンタッチさえ使えば良い」

「バトンタッチを使ってから自分が元いた場所に攻撃を加えればいい、ということ？」

「その通り。本体は動いたりしない。場所さえ割り当ててしまえば簡単なことだよ。あとはスピカがそれに気付くかどうかだが……」

大会のルールとして控えの選手は出場中の選手にアドバイスを送ることはできない。

スピカは息を吐きながら周囲を見渡す。そして、あることに気が付いた。

何だ、この影の数は……？

苦しくなると分かっているながら銀色の竜巻きを発動する。

すると、周囲に無数に憚っていた影は一つを残して消えた。その影はマキの姿を投影する。

スピカは再び銀色の竜巻きを放つ。すると今度は別の影が投影された。

成る程、影分身を作って銀色の竜巻きの発動に合わせてそれを消し、移動したように見せる。そういうことか！

分かってしまえば対処方は簡単だ。

「バトンタッチ！」

その瞬間、マキがギョツとするのを感じた。バトンタッチによってスピカとマキの居場所が入れ換わる。

スピカはさっき自分がいた方にマツハパンチを繰り出す。

その音速にマキはついていけなかった。スピカの右手に、手ごたえがあった。

L e g e n d : 1 9 霰のカラクリ（後書き）

スピカ

「結局俺は勝ったのか？」

それは次回分かるよ。

Legend:20 並走する2つの謎(前書き)

今回、前半はジャードの行動を覚えておかないと分かりませんw

ゼウス

「ちょっと(汗)」

ジャード

「つか、更新遅れたな」

……(汗)

アステリアーゼ

「お仕置きです」

Legend：20 並走する2つの謎

ブイズの灯についての情報収集を終えたジャードは、ミシロタウンから帰ることにした。

「はあ、はあ……っ！」

ジャードは息を切らしながらミナモシティまでの道を走っていた。その黄色の体を、鋭い瞳が捕える。

「包围」

瞳の持ち主が指示を出した瞬間、ジャードの周りを幾多のポケモンが取り囲んだ。

「……テメエらは……」

赤と黒を基調とした体に、両手に着いた鍵爪。コマタナ、というポケモンである。

輪の外には、その進化系で、コマタナ達の頭領と見られるポケモン、キリキザンが控えている。

「暗黒の劔……」

ジャードは言いかけて、その可能性は薄いと判断した。コマタナ族はイッシュ地方と呼ばれる地域に多く住み、ホウエン地方ではあまり姿を見せない。恐らく、海を渡ってきた盗賊団と考えるのが普通だろう。

（いやまて……こんなずぶ濡れのピカチュウを盗賊が襲う理由なんて無い……）

ジャードは、一瞬思考が迷路に入ったのを感じたが、コマタナの一匹が襲いかかってきたのを見ると、考えるのを止め、戦いに集中することにした。

「切り裂く！」

「電撃波」

襲って来たコマタナは必中の電気技で吹っ飛ばされた。

それを皮切りに、コマタナの軍勢が雪崩のように押し寄せてくる。いくらジャードでも、これは防げない。ゼウスであれば、いくらか凌ぐことはできるだろうが、今この場に彼はいない。

「甘いな、バカ共」

だが、押し寄せてきたコマタナが斬撃を浴びせ、肉を裂き、鮮血を吹き出させたのは

——彼等の仲間であった。

「!？」

同士討ちで、血の海に沈んでいるコマタナ達には表情を変える余裕などない。驚愕をその顔に映したのは、頭領であるキリキザンだった。

何故なら、先程殺そうとしていた相手が目の前にいたから。

「くそ……砂嵐！」

キリキザンが叫ぶと粒子の粉塵が吹き荒れた。粉塵は豪ゴウ！と渦を巻き、――

一瞬で消え去った。

キリキザンは今度こそ、焦りを表す。そんなキリキザンに、ジャー
ドは呼びかけた。

「時間が経てば砂嵐も必然的に収まる。御前、俺が誰だか分かって
喧嘩を仕掛けたんじゃないやねえだろうな」
タイム・リワインダー
「……時空超越者」

キリキザンがボソリと呟く。それを聞いてジャードは顔を顰めた。
だが、次は肉厚的な笑いを浮かべると、拳を構えた。

「分かってんなら問題ねえな？　いくぞ。タイム・パラドックス時空断層！」

キリキザンには何が起こったか全く分からなかった。

種明かしはこうである。ジャードは、キリキザンが感じる一秒を0
000001秒にしたのだ。

つまり、彼が1秒間分の動きをしたときにはジャードは100000
0秒間、つまり約3時間分の動きをしたことになる。どちらが多く
攻撃を繰り出せるかは言うまでもないだろう。

「うつ……つぁあ……」

キリキザンを一頻り殴り終わったジャードは、四つん這いになると

苦しそうに呻き始めた。時空超越は便利である分、それだけ体に負担もかかる。ジャードは血の塊を吐くと、立ちあがった。

そして、見た。

倒した筈のキリキザンが一つの傷もなく立っているのを。

「ゲホッ……な、に……？」

キリキザンは顔に嘲笑を張り付けて言う。

「無駄だ。お前の拳など通じんよ」

「が……くそ」

ジャードは悔しげに呻いた。元不良の彼にしてみれば、自分の拳が通じないというのは悔しいことこの上ない

「もう満足だろう。さっさと死ね」

キリキザンは爪を振り上げ、ジャードの命を刈り取ろうとした。

（やべえ！！）

ジャードは本気で覚悟した。命の危機を。

「シャドークロー……！」

紫に染まった左手が、ジャードを襲って、その頸動脈を切り裂く――

ことはなかった。

「ゲアアア!？」

思わず目を瞑ったジャードの耳に届いたのは、キリキザンの断末魔だった。ジャードがギョツとして目を開くと、目の前にあったのは燃え盛る連獄、そして倒されていくポケモンの影であった

「……な、何だ、これは」

「私が倒した」

その残酷な光景に、ジャードが顔をしかめていると、凜とした声が響いた。彼が我に返って見上げると、そこには1匹のロコンがいた。

「お前は……レナテー、だったか？」

「……」

ジャードの問いかけに対し、レナテーは答えもしない。冷たい表情をキリキザンに向けたままだ

「キ、貴様……何者だ……」

「“白炎”の契約者」

「……!」

キリキザンの顔に強い動揺が浮かぶ。

「時空超越者に手をだすというなら、ここでお前を消し去る」

「ひっ、や、やめ……」

キリキザンは倒れたまま這いつくばって逃げようとした。だが、レナテーは無情にも、炎を吹き掛けた。

「おつ、おい！　いくらなんでもやり過ぎだろ！」

ジャードの制止も、レナテーには届かない。

ギョルギョルツ！

炎は魔方陣の形をとる。魔方陣はキリキザンの真上まで移動すると中心から小さい鬼火を出す。鬼火は、キリキザンの体に取り憑く。すると、キリキザンの体はいくつもの光の破片となって魔方陣の中心に吸い込まれていった。

「ぐ……！」

マキは脇腹にマツハパンチを受け、倒れそうになっていた。それでも、四肢に力を籠め、なんとか立ち上がる。

「はあっ、はあっ……わ、私は、負けない……！！　絶対……」
「マキ、止めてくれ」

その痛々しい姿に、スピカは思わず制止を入れる。

「貴方に拳を向けるのは嫌だ。俺はそんな裏切りみたいな真似はしたくないんだ。だから、頼む。もう、やめてくれ！」

だが、マキの刺々しい視線は収まることを知らない。

「何よ？　フレアの子もだからって、肩入れしてんの？　ふざけないでっ！」

「うつ……」

スピカはその言葉に口ごもるしかない。マキは更にたたみかけた。

「ゼウスだってそうよ！ アンタが負ければこの後デービスとも戦わなくて済む筈よ。アイツと戦えば、ゼウスは絶対に殺されるに決まってるんだから！」

なるほどな……

スピカはマキが参戦していた理由を知った。恐らく、彼女は初戦でミシロタウンとキンセツシティが当たることを知っていたのだろう。そして、ゼウスとデービスが戦うことを避けるため、自分がミシロタウンまで赴いて参加を申し出たのだ。若しくは、デービスから誘われ、ゼウスが死ぬことを恐れたために断れなかったのだろう。

今のマキから見れば、スピカはゼウスを殺そうとしている重罪人に映っているに違いない。

彼の言葉は、マキには届かない。絶対に。それでも、彼は語りかける。

「それは、貴方がゼウスを見くびっているだけだ」

「な……によ………」

マキがスピカを睨む。だが、その眼には覇気が無い。スピカを怯ませることはできない。

「デービス如きにアイツが殺される筈が無いだろう。何より、ここは公の場だ。殺しを行えば、即座に大会運営委員に拘束される。デービスも、ゼウスも、それは分かっている」

「う、うるさいっ！」

「貴方が、俺の邪魔をしてゼウスを守っているというなら、それはただの偽善だ」

「黙って！」

マキは涙をボロボロと零し、慟哭をあげる。自分の信じるものを壊されないよう願う為の涙を。

「アンタなんか、知ったつもりでいて欲しくないわ！」

その言葉が響いた瞬間、再び霰が吹き荒れ始めた。だが、ギョーン！と音がした。レディアンが覚える虫タイプの最高技、虫のさざめきが走った音である。すると吹き荒れ始めた霰は徐々に鎮まり、霰がやんだ。

その時、観客が見たのは、横たわっているグレイシアの姿だった。審判のエビワラーが、右手に握った旗をあげる。戦闘終了の合図である。

第1試合2戦目——激戦を制したのは、怪盗の顔を持つレディアンだった。

Legend:20 並走する2つの謎(後書き)

スピカ

「ハッハッハ。勝ったぜ♪」

まだ分からないよ？ 激戦を制したのは怪盗の名を持つレディアン
としか書いてないじゃないか。

スピカ

「俺以外に誰がいるかそんな奴!？」

うん、いや、いないけど、まあ例外というものはあるもので

スピカ

「タイムンバトルに例外があつてたまるかああああ!」

Legend:21 残酷な真実(前書き)

今回、真実という単語が何回もでてきてうざいかと思います。

ジャード

「作者の語彙力不足」

しよ、しょうがないじゃないか。y。h。o。o辞書にも類義語でいいのが無かったし。

ジャード

「それと今回かなりシリアスなんだよな」

うん。これまでのほのぼのとした話を気に入っていた人は要注意です。

Legend : 21 残酷な真実

「レ、レナテ、いくらなんでもやりすぎだろ！」

先程から降り始めた雨が、その勢力を増し始めた頃、ヒワマキシテイの西の日照りの岩戸の付近で、一ペアのピカチュウとロコンが対峙していた。勿論のこと、ピカチュウはジャード。ロコンはレナテである。

「あのキリキザンを消さなかったら御前は死んでいたのよ。違う？」
「だからって、殺すことはないだろ！」

ジャードはレナテの冷徹な感情に、苛立ちをも感じた。
レナテの耳に巻かれたリボンの白炎が、彼女の代わりに答える。

「……キリキザンは掟に背き、タイム・リワインダー時空超越者に危害を加えようとした。
貴様が死のうが死ぬまいが、どの道消すべだったのだ」
「掟……だと？」

ジャードが険しい表情から一転、訝しげな表情をする。レナテは後を向くと、背中に、二対の灼炎の翼を吹き出した。落ちてきた雨粒が、翼に当たって蒸気をあげる。

「今御前に教える必要はない」

レナテはそう言い残すと、灼炎の翼をはためかせ、飛び去った。後ろから、ジャードが手を伸ばして止まるよう促したが、レナテに見える筈が無い。

天から大粒の雨が降っているのにも関わらず、レナテーが纏った炎は空の片隅に紅蓮の一閃を描いている。

「掟……とは言いつけど、もうそれに力は皆無よね」

炎翼を広げ、飛翔を続けるレナテーが、グレーの空の中で眩く。

「ああ。そうでなければ、“暗黒の劔”などという組織は誕生しなかったであろうな」

「もう、行かないとな……」

ジャードはずっと同士討ちでやられたコマタナに目をやっていたが、思いたって、ミナモシティへの道を進みだした。心の中では、“掟”“消す”“魔方陣”の三単語が不可思議の渦を巻いている。

ジャードは、訳も無い衝動に駆られて、弾けるように走りだした。

「な……なんだってんだよ!!」

ジャードの叫びが、周囲の木々に木霊する。暗い森の中からは何も聞こえてこない。

ヒワマキシテイからミナモシティまではサファリパークを経由して約10km程。ジャードの足では1時間程費やす。

「はあ、はあ……っ」

その1時間は、ジャードにとっては10時間にも、100時間にも感じられた。

そのまま立ち止まっているだけでも苦しいのに、走ることを止められそうにない。草の根に躓いて転びそうになる。それでも、走り続ける。

勢いよく地面を打っていた雨が遠のき、空を覆っていた雲の間から陽が差し始めた頃、送り火山の麓を通り過ぎ、ミナモシテイに辿り着いた。潮騒の芳香が鼻を刺す。ようやく到着した、という安堵感から、地面に手をついてへたり込んでしまった。

「ジャード！？ アンタ、何処に行ってたのよ！」

俯いて息を切らしていると、聞きなれた声が耳に飛び込んできた。顔をあげると、パフィー、アステリアーゼ、デインがいた。

「ジャード、どうしたんです？」

アステリアーゼが、心配そうにジャードの顔を覗き込んでくる。だが、彼は息切れで暫く話すのを拒んでいた。

「……随分長い時間走り込んでいたな」

デインが、ジャードの背中を摩りながら言う。ジャードは、喘ぎながら、ようやく口を開いた。

「ゼウスは？ あいつの試合はどうなっている？」

「あと少しで始まるわよ。アンタ、昨日辺りからいなかったけど、どこに行ってたの？」

パフィーが眉を吊り上げてジャードを睨む。勿論、彼を心配していた証拠だ。

「ミシロタウン……に。……あのさ……」

「何」

「ブ——」

ジャードはブイズの灯と言おうとして黙りこむ。あんな敵めしげな物の存在を、彼等に教えて良いのだろうか？

「何よ。ブの後何て言おうとしたのよ？」

「……」

「……ジャード、黙ってたら分からない」

ジャードは、強い疑心に捉われた。彼等が、ゼウスの体内に異質な物体が憑依していると知ったら、彼等はゼウスをどんな目で見るだろう？

もう、友達ではいられなくなるかもしれない。自分は、ゼウスがどんな存在になっても彼の友であろうと決めた。でも、自分以外がそうであるとは限らない。誰もかれも、簡単に信じることはできないのだ。

「なあ、御前ら」

パフィー達は、ジャードの顔がいつになく真剣なのを見て、暫く凍りついていた。

自分が、知りたくない“本当のこと”を知らされるかもしれない。

「これから俺が言うことは、とても残酷なものだ。間違いなく、御前らの心を傷つける。それに、一歩間違えば御前らはゼウスの友達でいられなくなる。それでも、俺の話を聞きたいか？」

「な——」

「言っておくが、俺の言うことは紛れも無い真実だ。俺の話を聞かないってことは、真実に目を向けずに逃げるってことだ」

パフィーは背筋に凍りを突っ込まれるような感覚を抱いた。他の二人を見ると、同じように顔に縦線を走らせている。

そのまま、時間だけが過ぎていく。

パフィーが、震える足で大会が行われているスタジアムの方に向き直った。

「さっさと行きましょう。早くしないと、ゼウスの試合が始まっ」
逃げる気か」っ!？」

パフィーの言葉は、ジャードの冷たい声に阻まれる。

「さっきも言っただろう。俺の話を聞かない、というのは真実から逃げるってことだ。真実を知って、始めて理にかなった行動をとれる。そうだろう?」

「黙って!」

パフィーの口から、感情の奔流が押し流れてくる。

「残酷な真実なんか、これっぽっちも聞きたくない! 弱くていい! 途中で逃げるような臆病者で構わない! でも、友達が友達じゃなくなるなんて嫌!」

全ての悲しみをぶちまけるように喚いた後、パフィーは目から雫を零しながら走り去っていった。

後に残されたアステリアーゼとデインは複雑な表情で押し黙っている。

「御前ら、聞くか？」

2匹は黙っていたが、やがてデインが前へ進み出て頷いた。
一方アステリアーゼは

「私も……ゼウスを傷つけるぐらいなら、逃げ出した方がマシです」
そう言って去っていった。

「デイン……。御前は聞くんだな？」
「……」

デインは沈黙を伴って肯定する。

「俺は真実を教えるだけだ。その後御前がどう行動するかは御前が決めることだ」

「……構わない。現に俺は御前が時空超越者であると知っている。
でも、御前の友達である、という真実は変わらない。だから、ゼウスがどういった存在であっても構わない」

その言葉は、ジャードに希望の光を与えた。

Legend:21 残酷な真実(後書き)

本当に暗かったですね〜

シャルフェアナ

「次の更新は遅れないように」

あれ、後書きに意外なキャラが

シャルフェアナ

「意外、というのは心外であります」

Legend:22 発現(前書き)

ゼウス

「あれ？ 天と地でもひっくり返ったの？ こんなに更新が早いなんて」

失礼な。

ジャード

「いや、遅いのはいつものことだからな」

「……ゼウスが、死ぬかもしれない？」

「一歩間違えばな」

デインが、顔に縦線を走らせて一歩後ずさる。普段は内の感情が気取られない彼だが、今ばかりは彼が膨大な恐怖に包まれていることを感じる事ができた。

「俺がタイム・リワインダー時空超越者であるのとは規模が違うんだ。……俺は言うべきことは言った。後は御前がどう判断し、行動に移すかだ」

ジャードの冷淡な声も、デインの耳には雑音としてしか入らない。デインは、掠れる声をやつとのことで絞り出した。

「……どうすれば……どうすれば死ぬのを止められる？」

その問は、ジャードを戸惑わせるのに十分だった。どうすればいいかは知っている。だが、それを行動に移せ、と言われても出来ない。言葉で分かっているだけで、具体的なイメージは描けていないのだ。

「どうすればも何も……俺は“ゼウスの存在を下手に刺激しないこと”としか説明できないぞ」

「……そうか」

一抹の沈黙を間に置き少年は決断を下した。

「……ゼウスの存在がどんなに偉くとも、いつか訣別の時があると分かってても、俺は今、アイツの友達であることは変わらない。……それが俺の信念だ」
こたえ

「デイン……」

彼の言葉は、ジャードの心に希望を抱かせた。ジャードは笑みを浮かべると、デインに向き直ってはっきり言う。

「ありがとな。御前のお陰で、傷つかずに済んだ」

デインは呆気にとられた表情でジャードを見つめた。が、やがていつものムツリした顔になる。

「……俺は自分の答を出しただけ。それは御前も変わらない」

デインはスタジアムの方を見た。今まさに、ゼウスの戦いが始まるうとしている。

「……ジャード、行くぞ」

「ああ。アイツの晴れ舞台くらいは見届けておかないとな」

スタジアムから聞こえてくる歓声は段々と大きくなっていく。恐らく、試合開始まであと1分もないだろう。

「……急ぐぞ。アクアジェット」

不意にデインが電光の勢いで飛び出した。

「ちょ、待てって、デイン！」

ジャードはそう叫びながら高速移動でデインの後を追う。

2匹が着いた時には既に試合は始まっていた。

観客席に入りざま、審判が『ポケモンバトル、スタート!』と言ったのははつきりと聞こえたが、ゼウスと、その対戦者——デービスは睨みあったまま動かない。

観客が湧きあがっている分、彼等の周りは静けさが支配しているようだ。そこに臨場して、実況が聞こえてくる。

『さあ、先程はマキ選手がスピカ選手に敗れ、両チーム1勝1敗となりました。この戦いによって、2回戦に進むチームが決まります!』

ジャードは、その実況を聞き、驚愕を露わにした。

「マキ、だと?」

——かつて、別次元再生で、ゼウスの過去を覗いたことがある。そこで知ったのだが、彼の姉の名前も、マキだ。偶然なのだろうか……?
まあ、どうでもいいか。

ジャードは頭の中の疑念を自己完結させ、試合を見つめた。ゼウス達はまだ動への兆候を見せない。

経常のような時間が流れ、スタジアムの喧騒もすっかり静まり返っ

た――

――ゼウスは、弾丸のように飛び出した。

「てやあああつー!!」

アイアンテールを構え、一陣の旋風の勢いでデービスの前に出て、鋼鉄の尻尾を叩きつける。

もちろん、そう簡単に当たる筈が無い。デービスはドサイドン独特の岩の腕で防ぐ。

ガキン!! とひび割れた金属音が響き、体重が軽いほうのゼウスが弾かれた。

「シャドーボール!」

ゼウスは着地の姿勢をとらず、両掌を向かい合わせ、漆黒の球体を作りだす。空中で一回転すると、球体は狙い違わずデービスに向かつていった。

デービスは大きく腕を振りかぶって、力任せに振り下ろし、シャドーボールを叩き潰した。

「ハッ、こんなもんか」

あえなく潰されたゼウスの技を見て、デービスは嘲笑を浮かべる。

「……」

「噂程強い訳ではないのだな。もっとも、親が雑魚だったから当然

の成り行きかな」

「なっ！」

ゼウスは、両親をバカにされ、眉を吊り上げる。

「もう十分だろう。さっさと死ね」

「——ッ！」

ゼウスは、デービスの“死ね”という言葉の葉に本気を感じて戦慄を覚える。

何故か、恐怖心は湧いてこない。

「……僕が、簡単に死ぬなんて思っていないよね？」

彼はそう言いながら体に力を溜め始める。

デービスは強気な姿勢で啖呵をきったゼウスを見て何も言わない。

「なら、どれぐらいで死ぬか見てみるとうしよつか」

デービスは、右手を前に突き出した。

だが、ゼウスの体の中には、今や絶大な力が籠っている。後は、その力を押し出すだけである。

「そう。……貴方が生きている間には無理だよ」

ゼウスの呟きと共に放たれた一発。彼は、完璧に自分が切り札を放ったと思い込んでいた。しかし、彼の体から放たれたのは吹き荒ぶ若葉の嵐。

「な——に！？」

茫然と口を開けたままつつ立っているデービスに、若葉の嵐は襲いかかる。そこを通り過ぎた後には、傷だらけのデービスが、瞳に憎しみを燃やしてゼウスを睨みつけていた。ダメージは大きかったようだが、戦闘不能には至っていないらしい。

「ゼウス……面白い奴だ。ますます、その命を刈り取りたくなった」
デービスの言葉が、壊す両者の留め金。2匹の動きは爆発的に激しくなった。

Legend:22 発現(後書き)

アステリアーゼ

「何だか物騒な終わり方です」

うん……今までほのぼの系だったけど、少しずつシリアス期に突入していったるね？

アステリアーゼ

「怖いです」

ごめんごめん(汗)

Legend:23 それぞれの絶望と決意(前書き)

明るくするどころかどんどん暗くなっていつてるなあ……

ゼウス

「さっさと明るい話にしてよ」

ジャード

「作者みたいな馬鹿がシリアスな話をかけるなんて思わなかった」

失礼な。まあ、バトル大会の終わりには明るい話を聞けるようになります

Legend : 23 それぞれの絶望と決意

会場は騒然となった。

『なんと、先程放たれたのは……リーフストームでしょうか!?!』
『いえ、リーフストームはまだ威力を抑制できるようにしてあります。あれは……技のカテゴリズに当てはまるのでしょうかね?』
『ということは……あれは新技、ということになるのでしょうかね?』

『現状ではそうなるでしょうね……』

実況と解説のポケモンが真剣な口調で声をかわす。だが、ジャードはそれが技でないことを知っていた。

イーブイというポケモンのみに憑依し、異能の力を発現させる、兇器なる物体『ブイズの灯^{ともしび}』。

「今のは……リーフィアの力だな」

「……今のがブイズの灯の力か?」

デインの間に、ジャードは荒んだ表情のまま頷く。別に、ブイズの灯が発現しようと、彼等に何ら被害があるわけでもない。ゼウスにも、今のところ甚大な損傷が見られたわけでもない。
なのに、嫌な予感ばかりが募る。

「うつうつ……」

観客席の片隅。

パフィーは地面の両手を着いて荒い息を吐いていた。流れる汗が、
禍々しく輝く。

「パ、パフィー、大丈夫です。しっかりするです」

アステリアーゼがパフィーの横で必至に呼びかける。だが、パフィーは嗚咽を我慢するあまり立ち上がるうともしない。

「何でよ……っ、知りたくないって言ったのに……だから逃げたのに……」

パフィーは真実に背を向けた。訣別を繰り返さないように。だが、結局は同じだった。ゼウスの秘密を目の当たりにし、絶望の奥底に墮とされ慟哭する羽目になった。

「パフィー……」

必至に呼びかけるアステリアーゼの声も、哀しみの響きが籠っている。

「やだ……アイツの秘密なんて、知りたくない……触れたくも無い！
なのに……」

「……私も、いやです……このままじゃ、皆との絆が……」

アステリアーゼがボソリと呟き、戦場を仰ぎ見る。戦いの火蓋は既に切られたらしく、デービスとゼウスは激しい乱闘を繰り広げていた。

「……ジャード、今のが……」

同じくスタジオムの片隅で、ジャードとデインが深刻な面持ちで立っている。

「恐らくな。俺はブイズの灯の発現を直接みたわけじゃないから分からないが、アレがそうなんだろう」

ジャードは一しきり言い終え、ある考えに頭が辿りついた。

——ゼウスの頼みの綱、とも言える術式変換技。フォース・チェンジゼウスがあの技を出す時の動きと、今のブイズの灯の発言の時の動きが——酷似している！！

その考えが正しければ、ゼウスは知らぬ間にブイズの灯を体内に憑依させるという選択をとっていることになる。

「ダメだ……違う、絶対に違う！ そんなことが、ある筈が無い……」

ジャードの台詞は力強いが羨望に乏しい。違う、と言い切りながら何処か信じられないでいる。

「違う……それに、そうだからといってなんだと言った……実際、にそうだからって、どうということは無いだろう……」

ジャードは、先程パフィーに「逃げるのか」と罵詈雑言を吐いておきながら自身が現実から逃げていることに気付く。でも、仕方が無

かった。現実がこんなに醜いと知っておきながら、まだ立ち向かうとする自分が馬鹿だった。

「……ジャード、落ち込むな。未来に希望を持って……」

デインが弱々しく呟く。それにジャードはハツとし、幾分か元氣を取り戻す。立ち向かう、と言っても、自分は孤独な存在ではない。数年前まではそうだったかもしれないが、今では心から信じあえる仲間がいる。手を取り合って進みあえる、友がいる！

ジャードは姿勢を正し、笑みを浮かべて呟いた。

「有難う。危うく絶望の渦に引き込まれるかと思ったよ」

「シンクロノイズ！」

ゼウスの放った音波は、デービスの拳と触れ合った瞬間に露と消えた。

さっき、ブイズの力が発現した。損傷は大きかったようだが、デービスには致命傷ではなかった。

「アイアンテールッ！」

今度は、弾丸のように飛び出して、サマーソルトの要領で鋼の尾を叩きつけた。

だが、それもデービスの二の腕に弾かれた。ゼウスは敵の技を喰らう前に、即座にその腹を蹴ってデービスの前方15m辺りの地面に着地する。

「はっ、さつきから無鉄砲に技を出すだけか？」

デービスはお得意の嘲笑を混ぜながらゼウスを見下すように言う。
それに対し、ゼウスも力強い笑みを浮かべる。

「そう思っているのなら、貴方の敗北は目に見えてるね」

「……」

自分より、4周り以上も小さい相手なのに、何故かその笑みが自分という存在を消し去ってしまいそうで、デービスは心の底から震え上がった。

『さあ、気を取り直しまして、ゼウス選手、先程から技を積極的に出している様子が見られますが……なかなかあたりませんね』

遠くから、実況の声が聞こえてくる。ゼウスはそれに、恥辱を感じることもなかった。

「自分の失策を悟ってから、後悔しないですよ？ 電光石火！」

デービスの腹に、敏速にぶつかってから、素早く飛び退る。目の前を疾風が撫でた。デービスの拳だ。

電光石火は、ノーマルタイプで、そこまで威力も高くない技だ。一発当てたところで、岩タイプのデービスには屁とも思われないう。う。

「シンクロノイズ！」

耳をつんざくような雑音を伴った衝撃波が空を裂く。それに対し、

デービスは拳を地面に叩きつける。

「ストーンエッジ！」

拳が地面とぶつかった瞬間、無数の岩の破片が地面を突き破って飛び出してきた。そのまま、シンクロノイズの壁となった。

「惜しかったかな……」

ゼウスは失笑を浮かべる。だが、その失笑すら、次には消えていた。

「もう十分暴れ回っただろう。そろそろ死ね。罪人の息子」

デービスは目を吊り上げ、憤怒の形相になる。そして、またも地面を殴る。

「岩石封じ」

デービスと同じくらいの大サイズのフィールドの破片が、地面から離れる。

それは、ゼウスに引き寄せられるように動いた？

ゼウスは、無数の岩に押し潰されて、その姿も見えない。

デービスは、地面に手を突っ込む。引き抜くと、直径30cm程の大きさの岩が握られていた。

その岩を、ゼウスが閉じ込められている岩に向かって構え――

「岩石砲」

音速で、打ち込んだ。

パフィー、アステリアーゼ、ジャード、デイン。
岩石砲が打ち込まれた瞬間に、皆息を飲んだ

Legend:23 それぞれの絶望と決意(後書き)

え、我等が主人公ゼウス、死す。

全員

『はあ!?!』

いや、冗談冗談。ホントに死んじゃったら物語終わっちゃうでしょ？

ジャード

「び、びっくりした……」

パフィー

「で、どうなるの、この後。生かしておくんでしょう?」

うん。まあ色々と……

Legend:24 決着(前書き)

とりあえず、スケジュール通りには出来てます。一応↑。

ジャード

「オイ」

パフィー

「それからなんか今回短いとかほざいてただけど……」

はい。これでもかっつくくらい短いです。文字数は一応10000字に到達しておりますがww

Legend : 24 決着

辺り一帯を、沈黙が支配する。

たった今、岩石砲を打ちこまれた岩の塊は見るも無残な姿で崩れ落ち、その中に封印されていたゼウスはまだ土煙のせいで見えない。

『あつと……これは、ゼウス選手はどうなるのでしょうか……？
仮にゼウス選手が死亡した場合、デービス選手にはそれなりの懲罰が課されることになるのですが……』

実況の声は、幾分驚愕を抑えてあるがその中にある緊張を隠すことはできていなかった。

「……終わったな」

デービスが口の端を持ち上げ、不敵な笑みを見せる。

「あ……ゼウス……？」

「そ、そんな……嘘です……死んだなんて、幻想まやかですっ」

パフィーとアステリアーゼは身を乗り出してフィールドを見ている。
2匹とも、目に大粒の涙なみだを溜めて。

「お、おい……ゼウス、冗談じゃすまないぞ。さっさと、目覚めて飛び出して来いっ」

ジャードは未だに目の前の光景が信じられないのか、呂律の回らない口調で変なことを口走っていた。そばにいる、デインのみが冷静

に、否、冷やかにフィールドを見降ろしていた。そして、氷のよ
うな声で一言。

「……まだ、死ぬには早すぎる」

フィールドの土煙が晴れたのは、鎮まっていた空間が、阿鼻叫喚の
地獄絵図に差し替わってからだった。

そこを見て、観客の皆誰もが息を飲んだ。

ゼウスの姿は無い。肉片1つすら、見当たらない。

「何！？ 何処へ行った！？」

それを見たデービスは焦りから突然に声を荒げた。だが、彼がゼウ
スを探そうとその1歩を踏み出そうとした瞬間、自分の体が硬直し
ているのに気付いた。

「かかったね。デービス」

背筋に氷柱を刺し込まれたような感覚を覚えたデービスに、嘲りの
声が背中から届いた。

彼が放った岩石砲は高威力を誇る代わりに、直後の動きは一切制限
される技だ。自身の自慢の逸品を使ったと思っていたら、逆にそれ
が命取りとなった。

「ふん。どうせ岩石封じに閉じ込められる寸前に電光石火を使って
逃げ出した、とそういうことだろう？」

「正解だよ。寧ろそのトリックに気付かなかったら脳に支障がでて
るかも」

ゼウスの言葉は、デービスにとっては勝利の宣言にしか聞こえなかった。

「これで終わらせて貰うね。切り札」

彼がそう言うのと同時に、技を放つのに必要なエネルギーの集結がある1点に集中した感覚が押し寄せてきた。

デービスは最後の足掻きだろうか。強がりと言った。

「ふん。御前の切り札とは言え、所詮ノーマルタイプの技を、術式を書き換え威力を強くしたものと変わらんだろう？ これで俺が終わったと思うなよ」

すると、ゼウスの言葉に含まれる嘲笑の度合いは更に増えた。

「デービス、分かってないね」

「何——」

余裕の表情を保ったままの彼の顔は、次の言葉を聞いた瞬間に仮面を被ることを忘れていた。

「確かに、僕の切り札は術式を書き換えてある。でも貴方は大事なことを見落としているんだよ？ 僕の切り札は、切り札の技が本来持つ『別の技を出す度に威力があがる』という性質を備えもった上で威力を高いものに書き換えてあるんだから」

彼の覚えている切り札は、何も技を出していなくても破壊光線と同等の威力がある。だからと言って、威力が変化しないわけでも、技を放った直後に動けなくなるわけでもない。技を出せば出すほどその分強くなっていく。

先程、ゼウスは何度技を出しただろう？ 恐らく、手の指のみでは数えられない。否、足の指を加えても数えられないほど、彼はその下積みとなる技を放っていた。

「もう、分かったよね。ならこれまでの分の仕返しを、きっちりしてもらおうから」

ゼウスはそう言って技を放つ。そこで呼び出された爆発は、神々の技にも肩を並べるほどに凄まじいものだった。

一閃の煌めきの後、デービスが軽く宙を舞った。

バトルリーグ1回戦第1試合キンセツVSミシロ。勝者は、言うまでも無い。

Legend:25 戦いの後の悲しみは(前書き)

最近、暗い鬱屈とした話が続きますが、今回も暗い話です。

ゼウス

「そろそろ明るい話に入ってくれないかな……」

バトル大会の2回戦は明るい話にできるんじゃないかな、と思う。

ジャード

「よし、約束したな。2回戦でドス暗い話だったら10万ボルト30秒間の刑」

え！？ ちょっと待て、今の取り消s—— (口塞)

Legend : 25 戦いの後の悲しみは

「デービス……」

ゼウスは、薬の臭いが充満した病室で、懇々とベッドで眠り続けている怨敵の顔を睨みつけた。だが、いくら睨めつけてもデービスの瞼は動こうとしない。

「ゼウス、おめでとう」

不意に、後ろから声をかけられた。振り返ると、いつもの友達が、
—— 彼が勝ったというのに —— 晴れない面持ちで立っていた。

「……有難う」

デービスのベッドから飛び降り、4匹と向かい合う。彼は、罪悪感に駆られてそれだけ言うのが精いっぱいだった。

「うん……でも、その前に」

刹那、パフィーが顔を強張らせた。その目には、大粒の涙が溜まっている。ゼウスは、それが何を意味するか —— 予知ができた。

「アタシ達に心配かけた、その償いをしなさいっつっ！……」

パフィーは短い腕を一振り、ゼウスの頬に平手打ちを喰らわせた。そのまま背を向けると、走り去っていく。

「アイツも、相変わらずだな」

ジャードは苦笑いを浮かべながら、パフィーが走っていった方を見る。その瞬間、彼の顔から全ての感情が死絶えた様な気がした。

「……いつも癪癪を起しては、すぐに機嫌を直す。……おてんば」

デインが愚痴をこぼすが、その様子に鬱屈さは見られない。

「……で、デービスの野郎はどうしてんだ？」

「それが……起きなくて」

「う、うう」

「！？」

ゼウスが言いかけた時、デービスが呻くのが聞こえた。

「デービス、起きたのか」

ジャードが、声を低くして訊ねる。デービスは、目を開けていたが、暫く口をパクパク動かしていた。やがて、そこから掠れた声を出し始める。

「ここは……どこだ？ 私は、何をしている？」

「デービス！？ 起きたのか！？」

ゼウスは彼のベッドに跳び上がり、その瞳を睨みつけ、驚きの溜息を漏らした。

戦っている時は、濁っていたように見えた、その黒い瞳が、今は美しい色を湛えている。まるで、彼の心から邪悪な感情が抜け落ちたことを示唆するかのように。

「デービス……？ それは、私のことか？」

今のデービスの一言に、ジャード、デイン、アステリアーゼの皆が息を飲んだ。まるで、デービスが彼の体を持ちながら彼でなくなっってしまったようだ。

「どういうことだ？」

ジャードがうろたえていると、後に誰かがいる気配を感じた。振り返ってみると、アーサー、カイン、シャルフェアナが立っていた。

「卿？ どうかしたか？」

その言葉に、デインとアステリアーゼも振り返り、ゼウスはベッドから飛び降りた。

「1回戦が終了した折にいささか不審点があったので、調べ物をしていたのですが……」

アーサーの代わりに、シャルフェアナが答える。そして、カインが続く。

「何年も前に発行された新聞を調べていたんだ。そしたら、面白い記事があっただね」

カインはそう言って、ジャードにその新聞を手渡した。ジャードはその記事を読みあげる。

「……ドサイドン、行方不明……だと？」

その記事に記されていたのは、ハジツゲタウンで1匹のドサイドンが失踪した、という記事だった。そのドサイドンの名前はヴェイスマン。失踪した年はポケモン歴402年。今はポケモン歴で414年だから……

「12年前の記事か……」

「そう。で、そのデীবイスとやらがミシロタウンの領主になったのも、幸か不幸か、12年前なんだよね」

カインはそう言うと、ニツと口の端を持ち上げながらもう1部の新聞を取り出す。そこにはでかでかと、『ミシロタウン、領主交代』と書かれていた。

「ぐ、偶然だよ……！」

ゼウスは、そう叫ぶことで3匹が言いたいであろうことを否定する。だが、アーサーは冷酷に言葉を紡ぎ始めた。

「これは私の想像だけだね。ヴェイスマン、というドサイドンは12年前にある組織に連れ去られた。その後、何らかの方法で洗脳されて、“デীবイス”という仮りの名前を与えられた。そして、当時のミシロタウンの領主をその地位から蹴落とすと自分が領主に成り上がったんだ。12年後、君の一撃で、眠っていた“ヴェイスマン”としての彼の記憶が蘇えり、洗脳後の記憶は掻き消されてしまったというわけだ」

「そんなの、卿の想像でしょう！ 証拠はあるの！？」

ゼウスは困惑のあまり、敬語を使うことも忘れていた。だが、アーサーは冷静に、残酷に、答を返す。

「証拠はない。でも、私の想像を裏付けるものはある」

アーサーはそう言うと、ヴェイスマンと思しきドサイドンが寝ているベッドへ歩み寄る。途中でゼウスが引き留めようとしたが、勿論無駄だった。

「……貴方の名前を、教えて頂けますか？」
「……」

ヴェイスマンと思しき者は、今までは信じられなかったような沈痛な表情で、答えるのを躊躇っている様子だったが、

「……言いたくは無いが……先の話題にもあった、ヴェイスマン……」

瞬間、ゼウスの表情に一抹の絶望がよぎった。

「それが、私の名だ……」

ゼウスは、目に大粒の涙を溜めながらも、それを零さないよう震えている。カインが、重苦しい表情で最後の希望を断ち切る。

「後さ……実は戦闘前と戦闘後のデービス……ヴェイスマンの脳波を調べさせてもらったんだ」

ジャードが、目を伏せる。

「戦闘前は、とても不規則な波だったのに、戦闘後はいきなり規則的になっている。偏に、デービスがヴェイスマンに戻った証拠だよ」

「そん、な……」

ゼウスが、目から涙を零す。それは、彼の足元に、喜びに絶望の穴を穿つように堕ちていき、やがて大きな水たまりを作った。

「卑怯だよ！ やつと、敵を討てると思ったのに……記憶を失くして、自分は何も知らない、善人ぶった顔をするなんて！」

熱い感情の塊が、奔流のようにその口から零れ出る。

「自分は好きなだけ悪いことをしていて、その身が危なくなったら記憶を失くすなんて、……こんな……こんな理不尽なことがあってたまるかっつっ！！」

言葉の鏃が、ゼウスだけでなく、ヴェイスマンの心にも、ジャードの心にも、デインの、アステリアーゼの、アーサーの、カインの、シャルフェアナの心にも刺さっていく。

ヴェイスマンは、細い声で、しっかり呟いた。永遠の贖罪を負わされた罪人のように。

「ごめんな……本当にごめんな……私ができることならなんでもする。手でも、足でも、目でも、何でも差し上げる。それが、私の償いだ……」

ヴェイスマンの贖罪は、ゼウスには拒絶されてしまいそうに思われたが、彼は何も言わなかった。

Legend:26 覚醒と(前書き)

えっと……前半は暗いけど少し鬱屈感が消えています。

ゼウス

「後半は？」

ちょっとほのぼのとしてるかな？ ゼウスとパフィーのやり取りがないけど；

Legend : 26 覚醒と

陽が傾いて、夕方と正午の丁度境目の辺りの時間。どちらともとれない不明瞭な感覚の中。

「ジャード、力が欲しくはない？」

ゼウスの涙を見て、居心地の悪さを覚えて、外に出ていたジャードの背中に、澄んだ、しかし鋭い声突き刺さった。

「……お前か」

彼が振り返った先には、ロコンの少女、レナテーが凜とした表情で立っていた。

ジャードは嘲笑と共に、彼女の質問を一蹴する。

「力なら既に持っている。タイム・リワインダー時空超越者としてのな」
「本当？ もつと強い力が欲しくはないの？」

ジャードの顔に、更に強い嘲笑が浮かぶ。

「力が必要なのは俺じゃない。ゼウスや、デインや、パフィーや、アステリアーゼ……」

「そうかしら？ 力を手に入れた。そして自己崩壊していったのはゼウスじゃない？ それでもゼウスに力が必要というの？」

レナテーが鋭く切り返す。ジャードは、感情がはち切れそうになるのを我慢して言う。

「アイツが力を持ったのは誤りか？ 過去の悲劇を繰り返さないようにアイツは力を手に入れた。違うか？」

「違わないわ。でも、そのおかげでブイズの灯火を背負うことになったのよ」

その言葉を聞いた瞬間、ジャードは自分の推測の正しいことを確信した。ブイズの灯火の正体は、フォース・チェンジ術式変換技だ！！

「それに、貴方は何も過たずに力を手に入れられるわ。貴方はディアルガの器なのよ」

「器……？」

「貴方だけに、教える。他の奴に教えたらぶち殺すわ」

決してハツタリとは取れない脅しに、ジャードは全力で首を上下に振った。

「よろしい。器というのは、神のポケモンないし、神話にでるポケモンないし……彼等を保存しておくポケモンのことなの」

「つまり、俺の体の中にはディアルガがいる、ということか？」

ジャードの推測に、レナテは満足そうに頷いた。

「理解が良いわね。その通りよ。かくいう私も器。白炎のね」

レナテはそう言って耳のリボンを撫でた。ジャードはそれを聞き、一つの質問を投げかけた。

「白炎……お前は何者だ？」

だが、その答が帰ることはなかった。

「今は答えることは出来ぬ。レナテ、行くぞ。もうすぐ汝の試合が始まる」

「試合だと？」

「分かったわ。じゃあね」

レナテは不敵な笑みを浮かべると、ジャードに何かを握らせた。そして、背中から紅蓮の双翼を発現させ、飛び去っていった。

「……俺の中に、ディアルガ？」

ディアルガ。実物を見たことは無いが、前に本で絵を見たことがある。鋼の手甲に守られていて、知的な群青色で、その絵のディアルガは時計を湛えていて、まさに時を司る神のようで――

――まさか！？

そこまで考えて、ようやく及ぶべきところに及ぶ理解。自分が時空超越者と呼ばれる所以。その能力の由来――

――俺の中にいるディアルガの力なのか！？

彼は晴れない面持ちで、レナテが渡したものを見て、ハッと驚愕の表情を浮かべた。それは、ダイヤモンドで作られたペンダントだった。ペンダントは、どこも変わらない、普通のそれに見える。

――眩い光を放っていなければ。

「ま、眩し……」

彼は、目を覆おうとして、その手を止めた。目の前にいるのは、かつて神話の本で見た、時を司る神――

「ディアルガ……！！」

あの、伝説のポケモンだった。もともと、実物ではなく映像だが。ディアルガは、ジャードを見下ろすと、ゆっくりと、機械的な平淡な声で言った。

『器の存在を、確認。金剛珠と協調』

そして、光の粒子となって、ペンダントに吸い込まれていった。残されたジャードは、何も言わない。ただ、頭の中で色んな感情がせめぎ合っている。

レナテーが、大会に出場していること。ブイズの灯のこと、パフィーとゼウスの仲違いのこと、そして、時空超越者という自分――

「俺は……どうすればいいんだよ……！！」

ジャードが抱えた頭の中に、威厳を含んだ、しかし、どこか軽薄さが窺える声が響く。

『どうした、俺の器』

「黙れ。か、勝手に俺の体に住みつきやがって……！！」

声の主がディアルガであることは、容易に想像がついた。よく見るとその声はペンダントから発せられていた。

『お前が近づいてきてくれたお陰で、俺も金剛珠から覚醒することが出来た。何か心憂きことでもあるか？ 相談に乗るぞ』
「……」

随分と接しやすい神だな。と思いつつ、ジャードは彼に相談しても良いか迷っていた。

『ヒワマキシティ、圧勝でしたねえ』

『そうですね。偏にレナター選手の活躍が大きかったと言えるでしょうか』

ジャードの中のディアルガが覚醒してから約20分後。1回戦の最終試合が終わっていた。

ハジツゲタウンとヒワマキシティの試合は、ヒワマキシティ側のレナターというロコンの少女が大きな活躍をしたらしく、華やかな勝利を収めていた。

「あのロコンさん、なかなか強いです」

アステリアーゼが、感嘆の声を漏らす。

「僕もあんな風に強くなりたいな……」

ゼウスが、誓いのように呟いた。デインも、目を見開いて、その強さに傾倒しているようだった。パフィーはまだ怒っているようで、そっぱを向いていたが、試合の様子が気になるらしくたまに振り返って、そわそわしたようだった。だが、

「……なかなか、素直じゃない」

デインがそう言うと、目を三角にしてそっぽを向くのであった。

「ゼウス、次は何処です？」

アステリアーゼが尋ねると、ゼウスはパンフレットを取り出してじっと見つめ、やがて顔をあげて答えた。

「シダケタウンだ。でも、試合自体は明日だよ」

その声は明るく、邪気が一切見られず、さっきまで泣いていたのが嘘のようだった。

「そうですか。明日も応援するです。ね？ パフィー」

パフィーはいきなり呼びかけられ、仰天してこちらを向いてしまった。ゼウスと目が合って、いきなり後ろに向き直る。その顔に、違和感があるのに気付いたのはデインだけだった。

Legend:26 覚醒と(後書き)

作者がこの小説を読み返して気付いたこと。

恋愛描写がない。これはいけませんねえ。ちょっと一段落着いたら恋愛系の描写を入れます。

パフィー

「無くて良いわよ」

いやいや、君には必要なんじゃない？

パフィー

「い、要らないわよ！　／＼／」

デイン

「……モテたい」

デイン！？

L e g e n d : 2 7 出たーっ！（前書き）

ああ、結構遅れてしまいましたね（汗） およそ20日あまりのブランクでしょうか。次からは気をつけたいと思います。

Legend : 27 出たーっ！

ゼウス達が、帰ってきたジャードを迎えたのは夜の10時のことだった。

「お帰り、ジャード。遅かったね」

「あ、ああ。色々とな」

「どうしたの？ 顔色悪いわよ。それにそのペンダントは何よ」

パフィーが彼の首から下げられた、ダイヤモンドを飾ったペンダントを指す。ジャードはそれを隠すこともせず、ただ見つめるだけだ。

「ああ、これはちょっとした事情から手に入ったんだ」

「……事情？」

「何かあったですか？」

デインとアステリアーゼの質疑には答えず、ジャードは碧白になり、苦しそうに顔を少し下に傾けた。

「さあ、もう寝ようぜ。俺も今日は予定外の外出があつて疲れているんだ」

「え、ちよっと、何かあったかは言いなさいよ」

自分が話を聞きたくないと言ったのを棚に上げ、ジャードに問い詰めるパフィー。だが、彼はそのままペンダントを外すこともせず、にベッドに潜り込むといびきをたて始めた。

「私ももう寝るです」

アステリアーゼも欠伸混じりに言いながら部屋をでて、寝室に向かった。

「む……」

「ね、パフィーももう寝たら？」

「うっさいわね。何でアンタに指図されなきゃいけないのよ」

パフィーは目を三角にしてゼウスを睨むと部屋を出た。因みに、デインは既に安らかな寝息をたてている。

「ジャード、ゼウスはどうだ？」

「ディアルガ、皆といるときに喋るなよ」

皆が寝静まったと思ぼしき頃、時空超越者に力を与える神、ディアルガが金剛珠の中から話しかけてきた。

「分かってるよんなこたあ。で、どうなる？」

「どうなるって……俺に、これから先の時間を見ると言うのか？
見てもいいが、それが正しい未来とは限らないんだぞ？」

ジャードは呆れた口調で返した。

彼の言うとおりである。ジャードは、タイム・リワインダー時空超越者の力を使って、過去だけでなく未来も見ることができる。

だが、この先の時間軸は、いくつも選択肢がある。彼が見られるのはそのうちのたった1つだ。いわゆる所謂、パラレルワールドといったと

ころだ。

「それでも良いぞ。見てみる。悪い未来だったら、それは俺達を選ばない未来。良い未来だったら、俺達を選ぶ未来だ」

「ふん……やけに樂觀するんだな」

「俺は将来に希望を持っているんだ」

ディアルガの口調は、氣力の抜けたジャードのそれとは違っていて、力強く、輝かしい。自分達が苦しい時でも、希望を持って生きていこうという強い意志が見てとれた。

「成る程……もし、悪い未来を見て、それが確定したら絶望こそ大きくなるだろうが……。まあ、それまで大きく希望を持っておくというのも味なものだ。さて、良い夢でも見るかな」

ジャードはそう言って、頭の中でタイム・リワインド時空超越を発動させた。

「こ……さ……起き……」

「うゝん……何？ ファアア……」

「いいから、さっさと起きなさいっ！」

ゼウスは、耳を劈く怒声と幾度も襲う揺れによって目覚めた。いや、目覚めさせられたといった方が正しいのだろうか。

「ひゃああああ！？」

「アンタ、起こされたら1回で起きなさいよ！」

その怒声の主であるらしいパフィーが目を三角にしてゼウスを睨

む。それをみて、ゼウスは怯えたのか俯いてしまった。

「アンタは、今日2回戦が控えているんでしょう。さっさと準備しに行きなさい」

パフィーは、ゼウスがその言葉を聞いて弾かれたように飛んでいくのを見届けると、次の生贄であるデインの所へ向かっていった。アステリアーゼが彼を起こしているが、彼もゼウスと同じく、一向に起きる気配が無い。

「デイン、さっさと起きなさいっ！」

彼女がそう叫ぶと、デインはおろかアステリアーゼさえ驚いて飛び上がった。

「……もう、朝か」

「そーよ。アステルが起こしてあげてたのに、何で今まで起きないのよ」

パフィーは厭味つたらしく言いながら、ジャードという名の次の生贄に目をやっていたが、意外にも（彼女からすれば予想通りなのだが）ジャードは起き上っていた。

「ジャードはちゃんと起きてるってのに……ってどうしたのアンタ」

「顔色が悪いです、ジャード。何かあったですか？」

「ん……いや、何でもない……」

ジャードは、顔に縦線を幾つも降ろし、顔も強張らせている。

「心配すんな。ジャードは悪い夢を見ただけだって」

「あ、そうなの……え？」

突如聞こえた謎の声に、パフィーは呆けた声をあげた。この部屋には、パフィー、アステル、ジャード、デインの4匹しかない。今の声は、その中の誰のものでもない。

ジャードが冷や汗を一筋垂らした。

「……今の声、誰？」

「あん、俺のこ——」

ジャードは首からペンダントを外すと、傍にあった壁に何度も打ち付けた。打ち付ける度に、ペンダントの中から「ギッ、ゲッ、ゲハッ」と声が聞こえてくる。怪談やグロテスクが嫌いなアステリアーゼが悲鳴をあげた。

「きゃああああっ！！ よ、妖怪ですーっ！」

「(……) テメエ。寝る前に皆といるときに喋るなっつったのを忘れたのかこの野郎」

「(お、おいゲハッ。だからってンガッ。こう何度もングホッ。叩き付けなくてもベヒッ。良いじゃねえかクジエッ)」

ジャードとペンダントの中のディアルガとの間で繰り広げられる無言の会話。先程の声の主は、言うまでも無くディアルガである。

「(黙れこの阿呆。皆に説明するのが難しくなっちゃっただろうが。大体、昨日も俺にあんな悪夢見せやがって)」

「(あ、あれはお前が自分の意志で見たんであって確かに俺はそうするよう言っただけでもお前に拒否権はあったわけで、別に俺が悪いんじゃないやああああ！)」

やがて叩きつけるのも飽きたジャードがペンダントを、小さな両掌で圧迫し始めた。その瞬間、ディアルガは断末魔をあげ始めた。勿論、皆に聞こえている。

「きゃああああっ！ 出たですーっ！」

「あ、アンタ、そのペンダントは何よ！？」

「……幽霊？ ……成仏できないとか？」

「いや、これはだな……」

ジャードが状況を説明し終えた頃には、ゼウス達キンセツシティの試合は始まろうとしていた。

Legend:27 出たー！（後書き）

さて、かなり明るくなった話ですw

次、キンセツシティブSシダケタウンとなります。

シダケタウンはバ——ゲフンゲフン。変わり者を集めたメンバーにしています。でも、試合自体は1話で終わってくれと助かるなあw

Legend:28 非情なる空の舞手(前書き)

ゼウス

「先月更新してないよね」

え？ ナンノコト？

ゼウス

「先月更新してないよね」

いや、だからナンノコト？

ゼウス

「先月更新してないよね」

うん……だから……その裏がありそうな満面の笑みは止めてよちよ
っ、

ゼウス

「ぶっ殺す」↑アイアンテール

ンゲホッ……↑倒

Legend：28 非情なる空の舞手

スピカは呆けていた。確かに、ゼウスは強い。彼の实力は筆舌には到底尽くせないほどだ。だが、これはあまりにも酷い。何が酷いかって、シダケタウン代表との試合、第1戦目はゼウスと、ファルカリというフシギダネとの試合だった。その試合は、僅か10秒。ゼウスの勝利だった。

第2戦目はスピカと、ヘンレというらしいゼニガメとの試合だった。

「さてさて、準備体操でもしておくかなって」

スピカはそう言っ、6本ある脚を順番に伸ばし始めた。その後、2対目と3対目の足の間を捻る。そうこうするうちに、戦いの時間はせまってくる。

『お待たせいたしました。第2戦目はスピカ選手対ヘンレ選手の試合です』

解説のポケモンが言った、その瞬間、観客席から轟音とも言つべき歓声が響いてきた。一匹一匹のポケモンの声が結束されて、さながら音の束となったようだ。

「うつせーなあ、ったく」

「ははっ、オイラの相手はその見るからに弱そうなレディアンか？」

瞬間に、ヘンレは見下すように顎を反らし、目を細めた。だが、スピカはそれが“挑発”という技の一つだと知っていた。

「……見下しているつもりか？ 稚拙なやつだな」

そう言い返すと、ヘンレが怒りで顔を醜悪に歪めた。だが、その直後にスピカのマツハパンチが向かう。

「っ、殻に籠る！」

ヘンレが使った技は、惜しくもマツハパンチを防ぎきった。さらに、高速スピンを繰り出す。

ギュルルルル！ と音がして、ヘンレは宙を舞う。辺りの空中を徘徊しながら上下している。絶えず動いていて狙いを定めにくいことこの上ない。だが、スピカは動いた。

「そうでもしてりや攻撃できないと思ったか？ 浅はかな奴だな。
シルヴァー・トルネイド
銀色の竜巻き！」

瞬間、鮮やかな銀色の旋風が広がる。ヘンレは、風に流され、スピカの思いのままに流される結果となってしまった。スピカは風を止め、空中で静止したヘンレに虫のさざめきを放つ。

「ぐああっ！」

甲羅の中から、くぐもった断末魔が聞こえた。殻に防がれて、致命的なダメージは与えられない。だが、攻撃しつづけていればそれにも相当するものになるはずだ。勿論、ヘンレの反撃も想定していた。

「くそ、水鉄砲！」

ヘンレは顔のみを出すと、水を発射した。スピカはそれを体を回すことによって難なくかわす。

「ほらよっ、お前、さっきまで俺のことを見るからに弱そうと卑下していたのは何だ？ 攻撃一つすら当てられないじゃないか」

「っ、まだ戦いが始まって5分と経っていないだろうが！」

挑発を返されたヘンレが怒って走ってくる。だが、それこそスピカの思う壺――

とは、流星に行かなかった。

「冷凍パンチか……ふん、厄介なものを使いやがるな」

飛んできた打撃を脇腹に感じながら回避したスピカは、その冷氣からそれを予測して顔を歪める。ヘンレを見ると、いかにもしてやったりという感じの顔でスピカを見ていた。スピカは気にせずに、拳を固めた。そして、拳が届きそうにもない場所にいるというのに、それを振るった。

「！？ 目が……」

そこから放たれた光。今のはフラッシュだった。光は一瞬で収まったが、その場にスピカはいなかった。

「なっ……テメエ、何処へ行きやがった！？ 隠れていないで出て来い！」

高速移動で上空に上がり、地面へ落下する。

「俺はここにいるよ」

顔に当たる風の心地よさを感じながら言い返す。

「それに、隠れてなんかいない」

ゼニガメは、引き攣った顔で空を仰ぐ。

「はっ、喰らいな。マツハパンチ！」

右拳に痛みが走り、皮膚が破れて血が滴り落ちる。

「咄嗟の判断で殻に籠るか……なかなか反射神経だけはあるんじゃないか？」

“だけ”の部分のみをやけに強調して言う。ヘンレは、それがスピカの罠と悟ったのか、今度は表情1つ変えることすらなかった。

「舐めた真似をするなよ？ アクアジェット！」

水を纏って突進してきたヘンレを、スピカは高速移動で後退していなす。途中、虫のさざめきを放つが、ヘンレも、それをかわしながら向かってくる。

「上だっ！」

壁際に追い詰められたスピカは90度方向を変え、上空へ舞い上がった。ヘンレが壁に激突し、停止する。

「痛え……」

頭を抑えながら立ち上がるヘンレ。だが、足元が覚束ない。壁にぶつかる寸前にスピードを弱めていたようだが、頭を強く打ったというのは変わらないのだろうか。

「悪いな。俺は前職が前職だったから、あまり情けを持てないんだ」
高速移動で即効舞い降り、拳でヘンレを吹き飛ばすスピカ。そして、羽に力を籠める。

「（く、くそあつ！）」

ヘンレは声にならない声を出す。だが、抵抗にはなりえない。四肢を動かすことはできず、拳に飛ばされ、空中を漂っている今では、地面を殻に籠って滑ることも不可能だ。

耳に響く、戦闘終了の合図。

「お前の健闘を祝おう。虫のさざめき」

爆発音を聞いたのを最後に、ヘンレの意識は闇の中に吸い込まれていった。

Legend:28 非情なる空の舞手（後書き）

スピカ

「久しぶりだつてのに短いな（汗）」

ごめん。集中力が尽きたorz

スピカ

「いやいや、たった2000字で尽きるなよ」

Legend:29 悪の組織を束ねる者(前書き)

さて、そろそろLegend:30に達しますね。

ジャード

「作者の小説がここまで続くとは思わなんだ。途中で削除されるんじゃないかと思ってたが」

失礼な；

ジャード

「いやあ、否定はできないと思うが。だって約1年は経つのにたった30話。お前が書いた別の小説では9カ月で80話いつてたしな」

デイン

「……差別？」

ジャード

「差別だな」

差別じゃない！ 区別d（撲殺

ジャード

「よし、邪魔者が消えた所で（↑）始めるか」

デイン

「……スタート」

Legend:29 悪の組織を束ねる者

「うわあ、スピカさんかつこよかったですー」

試合が終了した直後の観客席。アステリアーゼが呟いた。パフィーがぶすつとした表情のまま呟いた。

「もうお昼……あれ、空が曇ってきたわ。さつさと何処かのレストランに行って何か食べましょう」

「……了解」

「分かったですー。ならゼウスを呼んで……あれ、ジャード？」

アステリアーゼは、そこにいるべきポケモンが1匹欠けていることに気付いた。

「あれ、ジャード……何処行きやがったのよあの馬鹿」

パフィーは不機嫌そうな表情を崩さずに辺りを見渡して、さながら愚痴を零すように呟く。だが、そこにくるデインのツッコミ。

「少なくともパフィーよりは頭は良い」

哀れなブイゼルの少年は、パフィーの耳パンチを受けのた打ち回った。

「……シエルダナ」

キンセツシティとシダケタウンとの試合が終了した直後のこと。
ある場所では暗雲が低く立ち込め、今にも雨が降りそうだった。そんな中円柱型の高台の上で佇む、暗雲と変わらない色をした4足歩行のポケモン。彼の頭を覆うヘアバンド。鋭い眼光が、その名を呼んだ者を刺す。彼はレントラーという種族だった。

「……貴様、レナテーク」

シエルダナの名を呼んだのはレナテーク。12、3歳ほどの外見にそぐわぬ威厳をその体に秘めている。だが、シエルダナはその威厳に臆することもない。

「ヘタレな炎の王様、何のためにここまでその狐をここまで連れてきたんだ？」

刹那、ヘアバンドから嘲りの声が発せられる。幾分猛々しさが籠り、声の持ち主が戦国の豪傑のような性格であると暗示している。

「貴様を正しに来た。それだけだ」

「暗黒の劔の総統である貴方がこんな所で1匹で佇んでいるなんてね。私としては絶好のチャンスでしかないでしょう」

白炎とレナテークが、声に負けじと強気な表情で言った。

「シエルダナ」

「分かっているよ、黒雷。俺は裏切り者にや負けはしねえ。逆に、奴等を惨めな姿にしてやる」

「ほう。掟に背いた裏切り者が我等を打ち負かすときか」

やけに高ぶっているシエルダナに、白炎の遠雷の如き声突き刺さる。しかし、シエルダナは余裕の笑みを崩さない。

「今の状況下では、裏切り者はお前達だ。暗黒の劔に深手を負わせた恨み、忘れはしない」

構えるシエルダナの周りで、電気が火花を散らす。それに対して、レナテーも背中中で灼炎を燃やす。

「ほう？ 俺と相まみえると言うのか？」

「1対1なら貴方と私は互角でしょう」

レナテーの言葉を聞いた瞬間、シエルダナは高らかに笑い出した。永遠の言祝ぎをレナテーと白炎に捧げるように。

「お前、俺が1匹で来たと思ったのか？」

「……」

「俺が1匹でここにいれば、お前は絶対俺を狙いに来る。それくらい、分かってたよ」

レナテーは精悍な表情を崩さない。シエルダナの言葉が指す意味を理解しても。レントラーは、尻尾を振り上げる。その瞬間、嘲笑う表情を見せたのは――

――レナテーだった。

「可哀そうね。私だって、1匹で来たなんて一言も言っていないわよ」
「何!？」

シエルダナに加勢するべく、崖下から現れレナテーを取り囲んだ

ポケモンに、10万ボルトが突き刺さる。

「何者だ……！？」

「コイツなら、貴方が呼びだしたポケモン何て屁でも無いわね」

10万ボルトの発生源から電子が集結して、パソコンの画面にでるブラウザのようなデータをいくつも作りだす。

「レナテーに『暗黒の劔の総統に会わせてやる』と言われて来たが……」

そのブラウザは何かのデータを表そうと目まぐるしく動く。気付けば、周囲は黒に緑の線を引いたいかにも別次元のような空間となっていた。

「あんなどす黒いえげつなさそうなレントラーだとはな」

そのうち、ブラウザ同士が集結し合って、形を変えた。

1匹の電気鼠ポケモン。

種族はピカチュウ。名前はジャード。時空超越者の異称。

その目は鋭くとがった視線を放っている。

「貴……様ッ！」

「シエルダナ。観念するか」

白炎が嘲るようにシエルダナに呼びかけるが、勿論まだ勝負が決まってすらいらないのに、降参などする気は毛頭ない。彼の体毛が逆立ち、高電圧を生み出す。電気が散らす火花がシエルダナの頭上で一点に集結する。やがて火花は変形し、Xの形をとった。同じように、レナテーの頭上でもXの形をとった紅蓮の劫火が浮かんでいる。

「……時空歪曲」

ジャードがレナテールの後から出てくる敵を、時空の狭間で作られた竜巻きで吹き飛ばす。竜巻きはジャードの掌でサッカーボールサイズのものが生成され、彼がそれを地面に放り投げると竜巻きは一気に空へ伸び、敵を吹き飛ばす凶器となる。竜巻きはポケモン達を幾つも吹き飛ばす。

「あめえぞ、雑魚共。数で俺を圧せると思ったら大間違いだ」

と、後ろから光が強く放たれた。

レナテールの頭上で輝く炎とシエルダナが掲げる雷。それぞれ^{クロス}Xの形をとったそれらは、互いにぶつかりあった。両者の距離は20m。その距離を白蓮と黒碧が埋め尽くす。

「クロスサンダー！」

「クロスフレイム！」

——なんだと！？

ジャードはその技の名前に驚嘆を覚えながら、その手を緩めない。時空をも操る脅威で向かい来る敵を薙ぎ倒していく。

Legend:29 悪の組織を束ねる者（後書き）

パフィー

「そう言えば聞くところによると、作者この小説が終わった後の続編も考えてるらしいわ」

アステリアーゼ

「えゝ？ 時旅だけでこんなにダメダメなのに続編なんていけるですかゝ？」

ゼウス

「多分……いけないと思うな。その続編を書いてる途中で受験が始まりそうだし」

パフィー

「それは十分ありえるわね（汗）」

……しくしく。

パフィー

「あ、いたのね」

Legend:30 大なる力を解放して(前書き)

ジャード

「放置乙」↑右手には包丁を

いや待って、まずは右手に握りしめているそれを床に置いてもらえるかな↑ガクガク

ジャード

「置いてもらえるかな、じゃねえよ。前回の更新から3週間も経ってるだろが馬鹿」

うん、まあね、忙しいわけよ。

ジャード

「お前、手際は良いと自慢できるんじゃないのか」

そりゃ限界くらいはあるから。いやね、これでもちまちま執筆はしてたんだよ？

ジャード

「そうか。じゃあ刺そう。何故ちまちま執筆していて更新できない馬鹿」

C||=|(っ・・)っ

ゼウス

「逃げた……っ」

Legend:30 大なる力を解放して

レナターとシエルダナが戦う円柱型の高台は、側面に20メートルほど低い高さの円柱がもう一つ控えている。レナターに襲う予定だったポケモン達はそこで時空超越者であるジャードによって蹴散らされる。その小型の高台の上で戦っていたジャードの耳に、彼を驚かせる言葉が流れ込んできた。

「クロス……だと？」

ジャードに悠長に考えている暇は与えられなかった。伝説の2匹しか覚えないはずの技を、ロコンとレントラーという種族が覚えている、というのは奇妙奇天烈だ。だが、目の前には幾多の敵が迫っている。ジャードは思考を止め、頬を帯電させた。そして、一気に電撃を放つ。

「10万ボルト！」

ラッタが、オドシシが、ゴリキーが、倒れていく。ジャードは、右手をかざすと、今の一撃で怯んだポケモン達に向けた。

スパイラル
「輪廻！」

周りの風景が空の色のままマール状になり、立体響音が響く。次の瞬間、マールの背景がいきなり止まり、辺りは輪廻発動前の風景に戻った。しかし、ポケモン達の足元には地面がない。地面まで、およそ数100メートルの距離がある。さっきまでいた高台は遠く向こうにあった。

『あの野郎、俺達に何しやがった！？』

『どうでもいい！今は助かることを考える！このまま落ちたら待つの死だぞ！』

『よし、皆！近くにいる飛行ポケモンに掴まれ！』

ポケモンの内の1匹が指示を出すと、周囲のポケモン達も動き出した。だが、不幸にもこの集団の中に飛行ポケモンはエアームド1匹しかない。

『お、おいちよっ、待て！俺に捕まっても飛べるはずがぐええ！』

エアームドは最後は首を絞められたと思しき断末魔をあげた。結局、皆地面に叩きつけられる結果に終わった。

「さて、アイツらを見てもお前たちは俺に突っかかる勇氣があるか？」

ジャードは、滝のように大勢で地面に叩きつけられるポケモン達を示唆しながら、また目の前に現れた十数匹のポケモン達に心理作戦のごとく問いかける。

「……無いみたいだな」

「ある。俺達は総統様から見合うだけの報酬を貰っているからな」

だが心理作戦は見事に外れ。それを知ったジャードはフラットな表情を作る。その顔は、これから発する声に起伏の無いことが恐ろしく感じられる。

「愚劣だな、命を捨ててまで富を求めるとは」

彼が手をかざすと、眼前にいたポケモン達は一瞬舞い上がった竜巻きによって吹き飛ばされた。

「抱く神器に宿した、神という名のポケモンの力を借りるくらいの力は持っていたというのか」

シエルダナは嘲笑を声に混ぜ、見下したように言った。それを見たレナテーは、彼の愚かな一面を見た、と顔で表現した。

「阿呆ね。私の力を見くびりすぎていたの？　そこまで私を見下していたのなら、思わぬ一手を打たれるなんて思ってもみなかったんじゃないよね」

「案ずるな。お前が時空超越者を連れてきたこと自体、俺にとって予想できなかったことだ」

シエルダナは一息ついて、更に言った。

「思いもよらぬ戦力が手に入るのだからな」

一線、沈黙が突き抜ける。レナテーは、その言葉の本意を理解してそれが笑えるものだと感じたのか、フツと鼻で笑い、口の端を持ち上げた。

「貴方、ますます愚かね。ジャードが暗黒の劔ダーク・ソードに加入するとも思ってるの？」

「お前が暗黒の劔が悪の組織であると時空超越者に教えていなければな。尤も、教え込んでいても、洗脳技術には欠けないが」

シエルダナの自信も、レナターの自信も相手に劣らない。

だが事実として、ジャードがゼウスの過去を知って、ヴェイスマンのことを知ったことをシエルダナは把握していない。

レナターは、シエルダナの言う洗脳技術など端から信じていない。互いに、ハツタリのかまし合いを続けていると信じているのだっ
た。

「それはどうかしらね……碧い炎！」

レナターは、炎の翼で遥か後方に下がる。そして、翼は彼女を包み込んだ。その瞬間、紅蓮の炎は、蒼碧の炎となった。

「ふん、雷撃!!」

シエルダナは、一跳び後方に引き下がって、宙に浮いて吼えた。その瞬間、空を裂く轟音と共に巨大な電気エネルギーが彼の周囲に発生する。

碧い炎。雷撃。炎、電気両タイプの中で最大級の威力を誇る技が、激音を伴って激突する。

「厄介だな……」

「お前、俺達を殺すんじゃないのか？」

ジャードの顔には、少し疲弊の色が見え始めてきていた。いかん

せん、敵の数があまりにも多い。

「……お前の上半身と下半身を逆向きに回して棒で串刺しにしてやつても良いんだが、今の言葉は撤回しないんだな？」

ジャードが苛立ちを覚えて脅しの言葉をかけると相手のサワムライはポケモン達の影に隠れた。それを見たジャードは、つまらなそうに息を吐く。相手が時空超越者であることは薄々知っていて、それがハツタリでないと察しているのだろう。

「つまんねえな……。足掻くなよ、ヘタレが」

彼はそう言つと、手をかざして、エスケープ時空飛翔で敵の軍勢を吹き飛ばそうとした。だが、その瞬間、

「つまらんのはお前だよ。一度くらい本気出して戦つてみなつての」
「？ どういうことだ？」

ディアルガから覚えぬ批評を浴びた。何故そうなっているのかも分からずに、時空飛翔を取りやめる。その瞬間に飛びかかってきたアブソルをアイアンテールでいなしながら。

「お前は感づいてないのかもしれないけどな、御前が使つてる力は俺のその1パーセント程度だ。本来なら、俺が覚えている技もお前は使えるんだからな」

「それならそうと早く言つておけ」

ジャードが若干据わつた目をしながら言つと、ディアルガはあまり悪びれていない口調で謝つた。

「おー悪い悪い。ま、今のお前はドラゴンクローくらいは使える筈だから確かめてみな」

「ふむ……こんな感じか？」

ジャードは雷パンチを繰り出す要領で、右手のエネルギーを操作する。すると、炎のように蜿々と渦巻いた紫の爪が4本伸びた。

「ドラゴンクロー！」

その腕を振るい、目の前にいたオノンドを薙ぎ倒した。その瞬間、横にいたピジョット、テッシード、キングラーに向かって波動弾を放つ。3匹がいた場所で爆発が起こり、3つの影が吹っ飛ばされるのが見えた。

「……他、何が使える？」

「あん？」

ジャードの消えゆくような小さな声での間にディアルガはどこか倦怠感を帯びた声で訊き返す。ジャードは多少焦りを覚えながら言い返した。

「他の技、何が使えるんだ」

「ドラゴンクローと波動弾以外か。えっと……原始の力と……」

最後にディアルガが言った七文字はとても小さく、ジャードも気をとられると聞きとれない程だった。だが、意識の大半を注ぎ、その上で対峙する敵にも注意を注ぐ。

「……そうか、なかなかの業物揃いだな」

「はっはっは、パルキアと並ぶ伝説なんだ。これくらい誉れの範疇

「じゃねえよ」

ジャードは、ディアルガの軽薄な声をBGMに、原始の力を放つ用意をする。右手を前に出し、力を籠める。右手に、光の塊が集まっていく。

「負けるかあ！」

ドダイトスが、彼の前に地震と地面に落ちた時の轟音と共に落ちてきた。ドダイトスは、丁度ジャードが放った原始の力をも受け止める。

「何っ！？」

「地震！」

瞬間、地面が揺れてそこを衝撃波が走る。地面タイプを苦手とするタイプは少なかった為、相手への損害は大きくない。ジャードへの損害は好ましくないほど大きい。

「ぐあぁっ！」

衝撃波に当たって吹っ飛ばされるジャード。相性と、ピカチュウの防御力の低さもあってか、痛みはかなり激しい。

「岩雪崩！」

飛行タイプ故に先の地震の余波から逃れたプテラがジャードに巨大岩石の塊をいくつも飛ばす。それは、立て直そうと何とか立ち上がりにかけているジャードに、流星の滝の如く雪崩れ込む。

「……やった、か？」

数秒後、ピクリとも動かない岩の山を見てポケモンの軍勢の中の1匹が呟く。

「そう、みたいだな」

他の1匹が相槌を打った。そして、敵のピカチュウが完全に倒されたと確信すると、次の敵——白炎という名のレナターに向かう。しかし、

「うぐぐ……」

「おいおい、情けねえなあ」

「黙れ」

ディアルガの残念そうな声を遮りながら、ジャードは岩の山の中でうめき声をあげた。そして、手を離すと自分に押し掛かってくる岩を2本の腕で必至に支える。

「お、重い……あの技でどかせるか……？」

「あの技？ ああ、あれか……あれ使ったらここら一帯のやつらは吹き飛ばせると思うが」

それなら大丈夫だ、とジャードは“あの技”を使う用意をして、ふと心配になる。

「俺に帰ってくるリスクは大丈夫か？」

「あ？ ああ、大丈夫。実際に技を使ってるのは俺で、御前は俺が

使う力を対象にぶつける端子みたいなものだからな」

「そうか。だから、技の追加効果なんかは俺じゃなくお前に帰ってくるってことだな」

ジャードはペンダントの中のディアルガに言った。半ば確認をとる意味で。

「まあそういうことだ。リスクとしちゃ一定時間お前は俺の力全てを使えなくなるってことかな」

そうディアルガが答えたのを皮切りに、岩の山の中に沈黙が訪れた。ジャードが、ディアルガが“あの技”の用意に取り掛かっているのだ。

「準備はいいか？」

「いつでもどうぞー」

OKのサインを出されて、ジャードは岩を支える格好のまま身の内に秘めた力を解放する。

「——時の——咆哮」

Legend : 30 大なる力を解放して（後書き）

ゼウス

「……あれ？ 僕の出番は？」

うん、ごめんね； 次はゼウス side でいく……と思うから。

ゼウス

「推測形でくるとこが怪しい……」（ジトッ）「

……；

Legend:31 結末は（前書き）

不調を押しきって書いたのが間違いでした。今回二本指に入りそうな駄作です。

ジャード

「始末してやる」

ちょ、待つて！ 今回本当に調子悪かったんでいや、原始時代に飛ばすのは勘弁して（ry

レナデー

「Legend:31 楽しみなさい。……いや、作者が作者だから無理ね」

「はあっ！」

シエルダナが放つ雷撃に、レナテーはかわす以外の対処法を持たない。

「うくつ……」

何故なら、シエルダナとレナテーの技の威力に違いがありすぎるからだ。無理に青い焰をぶつけて対処しようとしても、雷撃の力の方が上回っているが故、打ち返すことができない。

ジャンプして、雷撃を紙一重でかわしたレナテーは火炎放射を放った。しかし、それはシエルダナに容易くかわされる。

「ははっ、裏切り者の癖に弱いじゃないか。さっきまで大口を叩いていた態度はどうした？」

「う、五月蠅いっ！」

見下しながら言うシエルダナに言い返すレナテーの叫びは、気丈ながらも弱々しい。しかし、劣勢を敗北の言い訳には使わないレナテーである。炎の翼で上空に翔びあがる。ラフラム・エスキャート

「ふうん？ 上空に逃げれば勝てると思ったのか。そうかそうか」

シエルダナは悪鬼羅刹の顔を見せ、体を帯電させる。そこから、10万ボルトが伸びた。レナテーは身を翻してそれをかわし、自分の周囲に幻覚を作りだす。神通力である。幻覚は、シエルダナから

見て歪んで見えた。神通力は、歪みを見せて相手にダメージを与える。しかしシエルダナには通用しなかった。彼はチャージビームを放つ。

「レナテー、避ける！」

白炎の、幾分焦ったような声が響く。それに応答^{こた}えるかのように、レナテーは身を横にずらした。耳元を、光線が突き抜けてゆく。シエルダナは、更に2、3発チャージビームを撃った。それからの逃避として、レナテーは空をどんどん上昇していく。周囲の景色が上から下へとスクロールし、遠くにあった雲が、近づいてくる。チャージビームは横に反れた。下を見ると、さっきまでのバトルフィールドは小さな点になっていた。そこから、炎の翼に変化が起こる。

ラフラム・エスキヤード

炎の翼はとぐるのうように渦を巻き、レナテーに纏わりつく。元来炎タイプである彼女は、熱いなどとは一切感じない。

そして、今度は急降下した。最高神が天罰として振り下ろす拳のように、紅蓮の塊は一点のシエルダナを確実に狙って音速で降りていく。炎が引いた尾は、直進の余韻として仄かな温もりを残した。

「……それで俺を狙う気か。……いいだろう、機は熟したな」

シエルダナは、禍々しいほどの視線でそれを突き刺した。彼の体の周囲で電撃が炎上する炎のように弾け飛ぶ。それは始めは青白く、しかし若干の間を得て漆黒に光り出した。

「これより、雷撃君臨を行う」

そう言った彼の頭から、ヘアバンドが抜けて宙に浮いた。シエルダナの放つ電撃の幾筋かがそれを貫いて、そのたびに黒いヘアバンドは禍々しい光を放つ。そして、ヘアバンドはその光を更に強めていく。

「古の英雄よ。汝我に力を示しこの一点に大いなるとして君臨せずとすれ」

発せられる度に言語としての成立が消えていくシエルダナの呪文を反映するかのように、光は数秒と経たないうちにあるポケモンの形をとった。二本足で立つ巨大な龍。それは実体と化した。闇を内に秘め、雷を行使して戦い続けて勝利を収め、それ故に自身こそ黒雷と呼ばれる、数大なる伝説のポケモン――。

「……黒雷が顕現したか」

白炎の遠雷さながらの声が轟いた。それはレナテーに、自分をこの世に召喚するよう言外に命じていた。勿論、レナテーに拒否理由などない。あつたとしても、白炎はそれを許さなかっただろう。

「劫火、翔炎。ただいま始動」

その瞬間、レナテーの右耳に結ばれていた一条の純白のリボンがほどけて宙を舞った。彼女の炎の翼の中でも燃えなかったそれは、今でこそレナテーが炎を吐くことによって点火している。だが、それを燃やしているのは紅蓮の炎ではない。目を覆うような純白の炎

だ。

「今この場に姿を現せしとき、我この優劣に従いなん。然るに発現せんとせよ」

互いに知らぬものではあるが、レナターの呪文はシエルダナよりは幾分か整った単語の羅列である。そして、その言葉を言霊よろしく吸収しながら白い炎はあるポケモンのシルエツトとなった。その後、炎が散って現れたのは色も変わらぬシミーつない美しいポケモンだった。かつて、神話にも存在したポケモン――。

「レシラム、行くわよ」

「ゼクロム、出撃だ」

黒と白、二つの力が競り合う。シエルダナはその脚で、強く地面を蹴ってレナターを迎え撃つために飛び上がる。それを、ゼクロムが先行した。

レナターが速度を落とし、レシラムが白翼をはためかせた。彼女はレシラムの力を最大限利用するため、さっきまで行っていた、炎ラフラの翼による炎を纏った突撃を止めざるを得なかった。シエルダナが雷撃君臨を行ったことによる1つの誤算である。レシラムは強い。そんな誤算など覆す程に、しかし、ゼクロムも引けなどとする筈も無い。

「クロスサンダー！」

「クロスフレイム！」

雷が電撃音をたて、炎が轟と燃え盛る。

ここで、勝敗を決めるのは何であろう。ゼクロムとレシラムの力量差か？ 否、2匹は対する伝説のポケモン。差など微塵も無い。

元来、ロコンとレントラーは種族的に見てレントラーの方が勝っている。これは即ち偏見であるが。しかし、同じ鍛え方をして強く育つのがレントラーの方であるのも事実。つまり、神なるポケモンをその身に秘めたとき、その力を多く引き出せるのもレントラーとなる。

「痛え……」

瓦礫が辺りに散乱する中、ジャードは身を起こした。上では、レナターとシェルダナの戦いにより爆発が起き、号音も轟いている。先にディアルガの技により、彼の力を使えなくなってしまったため、今敵に襲撃されると非常にまずい。だが、目の前の崖から何かが這いあがってくる気配をジャードは感じない。とりあえず、石で強打して痛む腰をさすりながらレナターが戦っている筈の上方を見上げた。

「……何？」

その時、彼は見た。ロコンの少女が赤い尾を引きながら落ちてくるのを。

「レナター、危ないっ……」

前方に、僅かジャードの手が届かないと思しき場所に落ちたであ

ろう彼女を、ジャードは慌てて抱きかかえた。赤いので分かりにくいのだが、体のあちこちに傷と思しき線が描かれ、血が滲み出ている。右耳のリボンは、蝋燭の火のように儚く燃えている。ジャードは、レナターがシエルダナに敗北したと悟った。

「おい、どうした？ 何があつたんだ！？」

「う……うぐっ……」

「単純な力量差で奴に負けてしまった。それだけだ」

力を大幅に消費し、喋ることのできないレナターに変わって白炎が答えた。敗北という事実が彼の遠雷のような声に含まれていた。何と言うことだ。自分達は暗黒の劔の頭領を討つ為にやってきたのに、帰り打ちにされたのか。レナターは絶対に勝つと確言していたのに。

「丁度よかった。ここで時空超越者と白炎、共に始末してやるよ」

「シエルダナ、テメエっ……」

「おい、やめておけジャード」

力むジャードを、時の咆哮の反動から回復したディアルガが制した。闇の帝王ともいえる者を早く倒しておきたいというジャードは、焦りからペンダントを睨みつけた。

「お前がシエルダナにつつかかっていったとしれ、レナターはどうするよ？」

正論を浴びせられた。それが直感で分かったジャードは、攻撃をとりやめた。敵は既に電撃を放つ用意を完了させている。

「分かったよ」

ジャードは不満げな鼻息混じりにそう答えると、右手と左手を前に出し、即座に波動弾を打ち出した。不意を突かれたらしいシエルダナは溜めていた電撃、チャージビームを打ち出した。その隙に、ジャードはレナターを抱えて飛び上がった。

「よし、このままバトルリーグの会場に向かおうか」

「お前に指図されるのは気にいらないが、そうするか」

ディアルガとジャードはお互いに言い合いながら飛行を始めた。シエルダナが追うようにチャージビームを放ったが、時空超越者としての力をそれにぶつけた。チャージビームはいつとも知れない時間に飛んでいった。

ジャードは前かがみになってレナターを背負い、その姿勢のまま飛行を続けている。背中の上でぐったりしたレナター。彼女を見守るように、白炎はボロボロのリボンの姿に戻って彼女の耳にずっと巻かれている。

Legend: 31 結末は（後書き）

今回文章と文章に対句法を用いてみました。

ジャード

「みました、じゃねえよ。場面転換一回も行われてないのになんで
こつも場面が何回も変わってますよ的な感じの表記になってるんだ」

うん、不調だつ t (ry

ジャード

「言い訳乙」

Legend:32 リ・wind(前書き)

ジャード

「いと遅し」

分かったから縄文時代に飛ばすのはやめてくれええええ(黙りたまへ

ゼウス

「はいはい。またリアが忙しいとかみつともない言い訳するのはやめようね」

何で私の胸中を見抜けるんだ君は； 今まさにリアが忙しいって言おうとしたn(r y

ジャード

「うつさい黙れ。とりあえずこの話が終わったら作者に制裁を喰らわそうゼウス」

ゼウス

「りようかい」

ε|| || || || (つ、・・・)つ

ジャード

「逃げやがった(汗)」

Legend:32 リ・wind

ゼウス達キンセツシティが準決勝を突破したその日、アーサー卿によって1組のピカチュウとロコンが発見された。

「ジャード？」

ピカチュウとロコンは傷だらけで道端に倒れていた。そして、アーサー卿はピカチュウの名を知っていた。先も言った、ジャードだ。

「おい！ 大丈夫か！？」

アーサーは慌てて彼等を起こしにかかった。ジャードが行方不明になっていたのは知っていたが、何故こんなところで倒れているんだろう。そして、このロコンの少女は何者なんだろう。アーサーは焦り靴から携帯電話を取り出すと、カインの番号を表示し、発信ボタンを押した。数回のコールの後、カインの声がスピーカーを振るわせた。

『ウィーっす、何か用すかー？』

「カイン！？ 今、ミナモレストランの横の路地裏にいるんだ、早く来てくれ！」

カインの失礼極まりない応対などは一切無視して（常日頃のことだが）早口で語りかける。焦りがその語調を操っていたことは言うまでも無い。カインは些か呆気にとられたようだ。スピーカーからその気配が伝わってくる。

『きよ、卿？ 何があつたんすか？ しかも路地裏つて、何でそんなと』

『いいから早くしろっ！』

『はいっ！』

怒鳴り終わつた後、周囲のポケモン達の反応を確かめようと周囲を見渡しかけ、彼は自分が人通りポケモンの少ない路地裏に佇んでいたことを思い出した。何か理由があつてここに来たわけではない。少年時代の感覚を思い出し、冒険ごっこなどという童心が光る遊びに現を抜かしていたらここに来たというだけの話だ。それで倒れていたジヤードとロコンの少女を見つけてしまったのだ。

「何が、あつたんだ」

とりあえずは不衛生な路地裏から退避させるべく、2匹の体を持ち上げた。ピカチュウもロコンもそれなりに体重があり、アーサーの肩にずっしりと重みがかかる。しかしながら、カインが来るまで、その重みに耐えることにした。

「カイン、早く来い……！」

言いながら、アーサーは焦燥から上空を見上げた。準決勝と決勝の狭間3日間のうちの1日目の空は、雲がその青色を晒すことを拒み、彼の肩のように重い。黄砂の影響も出ているのか、うつすら白んでもいる。その内、ブーンという小さな羽音すら響き始めた。アーサーには、それが災厄の予告であるかのように不吉に聴こえた。

鞆の中に入れておいた傷薬は、今しがた、転んで擦り傷を負ったルリリの少年に渡してしまったためもう無い。それ以外の回復道具は全てホテルの自室に置いてきた。

——彼等がいなくなっているってことは何日も前から分かってたというのに、私は何故準備を怠っていたのだ？ この、馬鹿が。民の上に立つ者として失格だ

自虐で自分を苛み、傷つけながらアーサーは臍を嚙んで下を向く。その耳に入ってくる羽音が一層大きくなるにつれ、風がうねり、砂埃まで舞い上がった。小さい粒の一つ一つが、アーサー達の体を穿いていく。時間は刻一刻と過ぎていき、彼の心の中には焦りが募り始めた。早く、来てくれないだろうか……？

「卿！」

後ろからかけられた声に、アーサーは思わず振り返った。そこには、数分前に話したばかりのフライゴンが息を切らせて空中で上下していた。

「カイン！ あ、有難い……」

アーサーは、安堵とそれからくる脱力感に包まれた。それが、緊張で直立していた彼の足を緩ませる。

「卿、ど、どうしたんですか！？ それに、そのピカチュウは……」
「言うまでも無い、ジャードだ。早く宿泊所まで連れて行ってくれ。このロコンの子も」

カインは、ピカチュウの少年とロコンの少女を片手ずつに抱えながら、運びやすい恰好になるよう両腕で調整した。その作業が終わりざま、次にこう言った。

「何があっただんですか？ ジャードも、久しぶりに見たと思ったら

随分ぼろっちい姿になってるし」

「私には分からない。詳しいことは後で彼等に訊くよ。カイン、後は任せた」

「うーん……まあいいか。じゃあ、ウィッス」

軽薄な返事を語尾に残すと、その姿は瞬く間に上空へ消えた。一時安泰か、とアーサーが胸をなでおろしたまさにその時だった。携帯電話が、鞆の中でけたたましく鳴り響いた。ロックとポップの中間の音楽を頼りに鞆の中を探り当て、音の元凶を取り出して開いた。その画面には、電話ではなく最新情報を会社から受信したことを知らせる帯があつた。

——インフォメーションサービスか。

そう思つて、帯に書かれてある文字を読んで携帯電話を閉じようと思つた。しかし、その文字を読み上げた瞬間、彼は自身の眼を疑つて、携帯電話を閉じることができなくなつてしまった。

『ヒワマキシティにて、正体不明の生体が衝突する事件発生。戦闘は現在も継続され、徐々にミナモシティへ向かっているとのこと』

何かを思つたのは、アーサーが幅の広い道路へ飛び出した後だった。さつき路地裏に入るまではポケモンも少なくなかつたのに、今では誰もいる気配が無い。代わりに、色良く装飾された店の中が混雑している。

——どういうことだ!?

突然発生した、幾多もの怪奇現象に、アーサーの精神は錯乱しかけていた。それを現実に戻すものが、すぐにやってきたが、彼はそ

れに気付かなかった。

「卿！ 何をなさっているんですか！」
「え？」

またもや後ろから声をかけられ、振り返るとルカリオのハントが幾分焦った様子で立っていた。

「ハント、どうしたんだ？」

領主としての権威を保つため、出来るだけ心の乱れを表情に出さないようにハントに話しかける。彼の方は、その必要もないがゆえに、唾を撒き散らすほどの勢いで話し始めた。

「どうしたもこうしたもありません！ 巨大な生体同士の衝突が隣の市であっているんです、早くホテルにお帰り下さい！」
「あ、ああ……ところで、カインはどうしてる？」

ハントは、今更何故そんなことを、とでも言いたげに答えた。

「カインなら、さっき飛び立っていつてすぐに帰ってきました」
「そうか、有難う」

カインの無事、即ちジャードの無事を確認できたのか、アーサーは余裕の足取りで去っていった。

「うぐう……ここはどこだ、俺は誰だひゃあはははは！？」

とあるホテルの看護室。先程までの緊迫した赴きが嘘であることを示すかのように、ジャードの脱力的な笑い声が響き渡る。

「ジャード、寝ぼけたこと言っていないでさっさと起きるです」

「ん……え!？」

ジャードが目を開けると。アステリアーゼが彼の顔を覗き込んでいた。どうやら、彼女がジャードの足を頭部の蓄でくすぐっていたらしい。

「わ、分かった分かった」

よれよれ、という擬態語が似合いそうな感じで起き上り、ジャードは複数の視線を感じてそちらを向いて、絶句した。

その視線の源泉は、目を吊り上げて怒りの形相を作っているパフィー。唇を嚙んで、溢れそうな涙を零れないように引き留めているゼウス。常に暗い色の瞳を更に暗くして、苦悩に耐えるかのように唇を匹結んでいるデイン。

「……悪かった」

「気にしないで。ディアルガに選ばれたんでしょ」

謝ったジャードの口を、パフィーは閉ざした。その沈黙は、永遠に続く拷問のように思われた。困惑に駆られたジャードは目を伏せた。

「ジャード、これから戦うの?」

ゼウスは、形状の変化を拒んだその顎を無理矢理に動かし、いつもより一オクターブ低い声で言った。ジャードは、迷った拳言っ

た。

「俺は、出来るだけ無駄に命は散らしたくない……が、それが運命なら仕方ないよな」

その時だった。デインの、宇宙の深淵のように真っ暗な瞳がアーク灯の光すらも反射しているかのように輝き意志を持った。

「ダメだ！」

ビクンと跳ねあがったのは、ジャードの肩だけではない。ゼウス達も、瞳を丸くして見ていた。

「一度だけの命だ！ 生まれ変わりなんて無いんだ！ 簡単に死ぬのが仕方ないなんて思っんじゃない！」
「ど、どうしたんだお前？」

爛々とした動きで、ジャードの肩を掴んで揺さぶるデイン。そのつばらな瞳が驚きに見開かれ、口がポカンと開けられる。いきり立っていたデインは、その眼光も使って、彼に語りかけていた。やがて、デインは手を肩から離すと息を切らしながら後退した。

「……一度死んだら、時間を巻き戻さないとやり直せない。ゲームとは、違う」

「あ、ああ……そうだな。死んじまったらお前らや拾ってくれた卿に申し訳が立たねえし。まだまだこの世界に未練だってあるしな」

論的に、熱烈に話していたデインは静まり、ジャードはものを言う余地ができた。ここまで心配してくれるポケモン達がいて、この暖かな気持ちの中にいて、幸せだと思った。自分が時空超越者であ

る限り、戦闘に赴くことは止められないが、この風景をより長く見ていたいと思った。その為に、自分は死んではいけないのだろうか。

その時、全員の携帯電話が慌ただしく鳴り響いた。

ゼウスはその丸い瞳を一層丸くし、携帯電話を取り出した。それにならって、パフィー達もそれぞれ携帯電話を取り出す。画面を見ると、契約会社のインフォメーションサービスが届いたことを通知するブラウザが掲示されていた。

——何だろう？

ゼウスがそう思って、ブラウザを開けようとしたまさにその時、轟音が鳴り響いた。そして、二件目のインフォメーションが届く。インフォメーションの内容はこんなものだった。

『現在、ミナモシティ上空でポケモンと思しき巨大生物二体が戦闘中……シティは外出禁止警報を敷く。今回のバトルリーグの続行も危ぶまれるとのこと』

「な、何だこれは？ 一体どういう……」

驚愕するジャードを尻目に、パフィーが窓の方へ飛び出した。駆けざまにこう言った。

「“百聞は一見に如かず”って言うでしょう。さっさと外を見てみればいいじゃない」

「パフィー、“百聞は一見に如かず”ってそういう使い方しないと思うよ」

「うっさいわね！ 良いからさっさと見るの！」

そう叫びながら、シャツとカーテンを開くと、目の前を水色の戦闘機のような水色の生物が通りすぎていった。窓ガラスが振動で振るえる。

「きゃあああああ!？」

腰を抜かして床にへたり込むパフィー。ゼウスが傍に駆け寄った。

「ぱ、パフィー、大丈夫？」

「べ、別にこの位なんともないわよっ」

強気で言い返してパフィーは立ち上がろうとして、足が震えて立てないことに気付くと、ゼウスによりかかった。

「えっ……」

ゼウスは顔を真っ赤にしたが、相対的にパフィーは顔の色を変えている余裕がない。

「な、何だ今のは……!？」

ジャードが駆け寄る途中、号音が背後から鳴り響いた。

Legend: 32 リ・wind (後書き)

そういえば執筆中にホウエン地方の地名を漢字に当ててみました。

豊縁地方 御白町 琴祈町 藤花市 金炭市 武路町 海那市 近雪市 歩炎町

刃実夏町 日和槇市 水面市 徳実市 琉音市 姫薙町 最優市

豊縁は公式設定らしいですがその他は全て鏡花の妄想。わざわざ書きこんだのはいつか使う日が（来ない来ない）いつか時間がある時を見計らって作中の地名全て漢字に直しとこうなんておっと誰か来たようだそれではこの辺で。

Legend:33 追っ手は根強い(前書き)

さてー、今回短いくせにggggです、

とはいえ、結構な進展がある話……になってるつもりなので↑
うん、つもりなので……。

とりあえずはスタートッス。

Legend:33 追っ手は根強い

ジャードは、思わず頬をピリピリと弱く帯電させた。ペンダントの中のディアルガが、彼に呼びかけた。

「ジャード、目覚めたばっかだろ？ 今から戦うのかよ」

「何もせずにボーっとつつ立ってたらぶっ殺されるだけだろうが……
…と言いたい所だがなあ」

パフィーは恐怖を感じて、目に涙を浮かべてゼウスの首の房にしがみつく。異性に大胆な行動をとられたゼウスは、羞恥から、頬を赤く染める。だが、アステリアーゼもデインもそれを気にして目線を投げやる間隙も持てなかったらしい。デインの頬を、一筋の汗が流れる。二発目の轟音は、先より大きく鳴り響いて、彼等の鼓膜を打った。その時だった。扉を破って、1匹のロコンの少女が舞い込んできた。

「レナテーツ!？」

「生きてたのか、何て間の抜けた質問はやめてよね。それより、良い？ あの怪物を駆逐するわよ!」

激しく燃え上がるパフィーの言葉。それを、デインが遮った。先程、ジャードに語りかけた時の自身の勢いを気にしているのか、少しづつが悪そうに振舞っている。

「ちょ、ちよつとアンタ! 誰? ジャードの何なのよ!」

「いきなり名前を尋ねる何て失礼ね。アンタに名乗る筋合いはないわよ」

「何ですつてえ！」

いきり立って轟々と燃え上がるパフィーの言葉。それを遮るデインの言葉。

「……キュレム」

『え？』

それは、ポケモンの名前らしい。印象的で、常に小さく聞きとり辛いデインの小さな声でも、聞き洩らすことはないであろう響きだった。パフィーとレナテは睨めっこを中断して、デインの方に視線を向ける。デインは、ぞんざいに動き出すと、部屋の隅に置いてあったカバンを取って来た。そこからブックホルダーに巻かれた一冊のハードカバーの本を取り出した。中央には星を象ったであろう魔方阵が描かれていて、「WORLD MYTH」とタイトルがふられてある。その本の、とあるページをデインは開いた。この文明利器の時代に羊皮紙で作られているあたり、随分古い時代に書かれた本の原本だろう。

「それは……イッシュ地方の神話ですよね」

ページを覗きコンで呟いたアステリアーゼに、デインは無言ながら首を縦に振ることで肯定した。そして、掠れた声で神話を読み上げ始める。

「……今のポケモン、キュレム。イッシュ地方最初の伝説のポケモン」

淡々と続くデインの説明を、始めこそ黙って聴いていたのだが、突然レナテは立ち上がって彼の元へと歩み寄った。そして、目の

前に来るなり前足を出した。

「その本、ちょっと貸して」

「……」

会って間もないのに失礼な物申しだが、彼は相手が見た目12、3歳程度の少女だったこともあって、眉を1ミリも動かさずにその前足に本を置いた。随分重たいものだったので、彼はレナテールというロコンの少女が持ちきれるかどうかが心配だったがそれも不用のことで分かった。

レナテールは興味深そうに神話をパラパラと捲っていた。が、ページが捲った後、目を見開いてページのある一点を凝視した。

「存在値、50000……ですって!？」

「ふむ……憑依先のポケモンから切り離されたのかな」

「そんなことどうでもいいわ。あのデカブツを止めにいくわよ!!」

レナテールと（ゼウス達にとっては）謎の声との会話を聞いて、ジャード以外のゼウス達は顔を見合わせた。ジャードさえも、存在値という言葉の意味が分からずに首を傾げた。

「おいレナテール、存在値って……」

「五月蠅いわね! ジャード、さっさと行くわよ」

そのとき、喚くレナテールの言葉に声を荒らげ返した者がいた。ミミルの少女——パフィーである。

「アンタが五月蠅いわよ! 何処の何様のつもりよ! ジャードを連れ出す権利があるの!？」

「パフィー、止めないでくれ」

奇しくもその言葉を止めたのは、ジャードだった。パフィー、ゼウス、そしてレナテールさえも、顔を驚愕に浸している。デインは齒を軋り、アステリアーゼはダメと言おうとして声が沸き上がってこなかった。

「その、キュレムって奴を止められるのは俺とレナテールしかない。だったら、俺はいくべきだろう。勿論、死にはしない。生き延びるって誓う」

その、厳かな声がわたる間、誰とてうんとも言わなかった。パフィーはそれを聞いても、顔を俯けて納得いかぬと言わんばかりの表情で、押し黙っている。それを傍目にしていながら、ゼウスはあることを考えていた。自分が何もしないで部屋の中にぬくぬくと居座っているのも悪いだろう。

「ねえ、僕達に何か出来ることはない？」

「え？」

レナテールは憤怒から一転、呆氣にとられた表情を浮かべている。ゼウスの視線を見つめて数秒、やっと我に帰った。彼にできること？ ある筈がない。それぞれ伝説のポケモンを身に秘めた自分達の、その中でも強力な“英雄”だからこそ、自分達は戦えると思っている。そのプライドを、何の変哲もないイーブイに騙って欲しくない。そう思っていたところで、あの貴重な情報を思い出した。

「……アンタ、ブイズの灯の憑依先よね？」

「え？」

そう訊いたのに、ゼウスというイーブイは固まって何を言おうともしなかった。彫像のように固まった後、瞬きをいくつか繰り返し返した。その仕草14という彼の年齢からは幼すぎる。もっとも、レナデーが言えることではない。デインとアステリアーゼが目を見合わせる。

「何？ それ」

「説明は後だ。お前は……」

硬直するレナデーを押しつけてジャードは、話を強制的に打ち切った。徐に窓の外を見て、目を見開いた。その表情は、苦悩までもを表していた。

「アイツ……シエルダナか！？」

「何ですって！？」

レナデーの顔が強張り、心の中が殺意で満たされる。まさか、自分達を狙いに？ でも、それならキュレムはどうして——！？

「っ、迷っている暇ないわ。私は行く」

「待つて」

窓の棧に手をかけ、まさに今飛び出そうとするレナデーを、パフィーが言葉を以て制した。レナデーが厳しい目付きでパフィーを睨むが、その視線に彼女は怯えなかった。

「ブイズの灯とかシエルダナとか、アタシ達に分からないことばかりよ。教えて、今何が起こっているの？」

レナデーの瞳が、幾分温度を下げた。一抹、迷いが生じ、それを

振り払う轟音が鳴り渡る。

「悪いなパフィー、今は悠長にしゃべくってる暇はないんだ」

ジャードの言葉は深みを持ち、その視線は怨敵にしっかり刺さっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5932n/>

時の旅人

2011年11月30日20時56分発行